

# NICHE

工学院大学建築系学科同窓会誌

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>

VISA PLEASE...  
TOPICS  
LETTER  
A ROUND THE WORLD  
NICHE GALLERY  
NEW FACE  
SEE YOU...!  
LIST OF AN ASSOCIATION  
etc.

Vol.26 2002

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>

工学院大学建築系学科同窓会公式ホームページ

# NICHE on WWW

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>



<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>

## [目次]

■『NICHE』vol.26 の発刊に寄せて 1万7,200名の建築系学科・卒業生の皆様へ:田野邊幸裕	02
<b>■TOPICS</b>	
①宮澤健二先生「坪井賞」を受賞&大塚毅先生、日本建築仕上学会賞の「論文賞」を受賞	04
②宿場まちの関町で、本校の学生が町並み保存発表	05
③八王子11号館に居住環境制御システム比較実験装置	06
④大学の先生と楽しむ「理科教室」	07
⑤「大屋台村フェスティバル」開催	08
⑥建築系学科同窓会・懸賞付「大メール大会」の案内	09
⑦本校の大学院生グループ、IFHPLP国際学生コンペで1等受賞	10
⑧建築系学科同窓会と校友会の総会が開催	10
⑨本校の3年生が「1,500万円の快適住宅コンペ」に最優秀賞	12
⑩本校の大学院生の研究「米軍ハウス」がニュースに	15
⑪博多に、きんしやい—校友会／福岡大会のご案内	16
<b>■同窓生を訪ねて</b>	
①山口文象と安野光雅美術館:小町和義	17
②世界の台所アラカルト:宮崎玲子	22
<b>■輝かしき先輩たち</b>	
社寺建築に独自の道を切り拓いた:小林福太郎	26
<b>■同窓生からの便り</b>	
①中国あれこれ:石川晴雄	32
②北国の、おもしろおかしい行政物語:星光彦	34
③都市再開発—日本と中国の違い:野中耕太郎	36
④地方建築家として生きる:松下重雄	38
⑤ローコストなSN減震基礎構法を自宅兼事務所に採用:関谷真一	40
⑥水まわり空間は、住まいの要!:山本みさ子	42
⑦既存建物への免震レトロフィット適用例:中川理	43
<b>■a round the world</b>	
古の北京、煌めきの上海—拡大企画部会〈中国視察〉:編集部	46
<b>■ NICHE GALLERY</b>	
①等々力の家:高木雅行	52
②鷹匠まちの家:山根秀明	56
③作品3題:小林將夫	60
④長生村の家:植木秀視	64
<b>■建築系学科の新しい風に聞く</b>	
①私の事務所と大学の研究室を、できるだけ近いものに:山本理顕	68
②歓迎!—感性と頭で全力投球できる学生たち:窪田重矢	70
③Régimeの二つの意味:中島智章	72
④安全で安心して快適に暮らせる居住環境の創出を目指して:村上正浩	74
<b>■また違う日まで</b>	
①さあ、建築屋の出番だ。町の棟梁になっていこう:濱邊定夫先生	76
②工学院大学での思い出:水野宏道先生	77
<b>■研究室のみんな、元気か~い</b>	
①横田研究室&今泉研究室	79
②保岡研究室&大庭研究室&中島(康)研究室	80
■建築系学科 Home Page の紹介	81
■学科だより	85
■[平成13年度] 卒業生名簿	95

発行●2002年11月31日

編集・発行●工学院大学建築学科同窓会

〒163-8677

東京都新宿区西新宿1-24-2

☎ 03-3342-1211

(内線) 2025

編集委員●大場光博・田野邊幸裕

谷口宗彦・初田亨・類洲環

編集協力●寺西祐二

表紙デザイン●鎌坂誠之

印刷●大日本印刷株式会社



■『NICHE』vol.26 の発刊に寄せて

# 1万7,200名の建築系学科・卒業生の皆様へ

田野邊 幸裕

建築系学科同窓会会长

母校の建築系学科同窓会会长に就任して最初の年度を、皆様のご支援ご協力で、無事努めることができ、感謝申し上げます。

近年、建設産業を取り巻く社会的・法的環境は、激変しております。建築基準法の大改正・住宅品質確保法・消費者契約法・建設リサイクル法の制定など、法律の整備が急ピッチで進んでいます。こうした動きは、われわれ関係者に「法的責任の明確化」と「品質確保の要請」「役割と責任」が求められております。建設業界に、ようやく法的近代化の波が押し寄せってきたと同時に、建物の品質に世間の目が向いてきた証であると思われます。建築に携わる私たちには、極めて広い知識と深い洞察力・建築専門知識・時代に即した対応力・独創性などが多様に求められる時代でもあります。私たちは、第二・三の食品業界にならないよう、襟を正して社会に貢献したいものです。

建築系学科同窓会も新世紀を迎え、新たな「ネットワーク」づくりの試みとして、昨年10月31日(大学創立記念日)に「建築系学科同窓会ホームページ」を、開設いたしました。同窓会誌『NICHE』に加えて、皆様に参加していただく場、大学の現状と同窓会活動状況や、リアルタイムな情報提供を目指して、同窓会の活性化に役に立つことを期待しています。

今回の「輝かし先輩たち」は『小林福太郎先輩でいきましょう』と、伊藤氏から原稿をいただいた。読んでいるうちに、どうしてもその作品に直接会いたくなりました。早速、7月28日に「浅草寺」に出向きました。続いて8月4日(日)朝、八王子の自宅を出発して約2時間半かけて先輩が手掛けた足利にある「織姫神社」に到着、逸る気持ちを抑え、運動不足を悔やみながら鳥居から階段登ること約8分、眩い神社本殿に辿り着きました。朱塗りの神殿は緑に映えて美しい一言。足利は古くから織物の産地として栄え、約1,200年の伝統を持つ足利織物の守り神として建てられたそうです。境内から南に、足利市内と渡良瀬川の眺めが素晴らしい実に気分爽快でした。対照的な「長林寺」。静かな森の中に溶け込み、心が静まる雰囲気を先輩の作品から感じた一日でした。

## ①「第37回・工学院大学建築系学科同窓会総会」を開催

平成14年5月26日(日)、午前11時、工学院大学新宿校舎11階・第5会議室にて開催し、平成13年度事業報告および収支決算、平成14年度事業計画および収支予算の承認をいただきました。

引き続き、『政策次第で景気は良くなる』のテーマで講演会(校友会主催)に参加。講師は、日本証券経済研究所・主任研究員の紺谷典子氏。『今こそ景気にてこ入れする時期』と指摘しながら、その理由を歴代総理の判断能力を具体的に示しながら、政界の裏話を豊富に説明。さらには、郵政民営化など当面する多様な問題を軽快に分析し、リズミカルな話題の展開は、井戸端会議に参加しているように、分かりやすく思わず聞き入ってしまいました。漫才のやり取りのように、時には笑い声が上がる中で1時間15分が過ぎました。

## ②大屋台村フェスティバル

恒例の建築学科同窓会と建築系学科との共同企画、学生たちのコンペとして制作させた屋台村による大交流懇親会は、今回は「大屋台村フェスティバル」と名称を改め、2001年(平成13年)12月1日(土)に実施いたしました。

お忙しいところご出席(約300名)いただいた皆様に、厚く御礼申し上げます。また、校友会の新潟県・鹿児島県・島根県・鳥取県・静岡県・山形県・青森県・北海道・福岡県支部様、および住宅性能評価センター、機械工学同窓会会长様からは、イベント当日に向けて「美味しい地酒」を、お送りいただき厚く御礼申し上げます！

なお、交流懇親会屋台村は、この10年間現役学生との交流の場をつくるとの当初の目標を十分に果たしたため、新世紀にふさわしい、新しい活動に移行することが、総会にて承認されました。現在、「交流会のあり方を考える会(責任者:三好副会長)」を発足し、新しいHPを活用したユニークな企画で準備されています。詳しい内容は、『本誌』の09頁をご参照下さい。また、HPでもお知らせいたします。

## ③第14回校友会全国大会は、福岡「博多」

第14回校友会全国大会は、九州の福岡県博多にて2003年7月11日(金)に、開催されることになりました。

「博多祇園山笠」祭りに合わせて、福岡県の特徴を生かした全国大会にと、福岡県支部(支部長:麻生好彦／1963年卒／平岡研究室)を中心に、九州地区の卒業生が一丸となって準備中です。皆さん、来夏は博多でお会いいたしましょう。

#### ④産学共同研究センター稼働開始

(設計者:三好薰／1975年卒／波多江研究室)

企業・官公庁との共同研究プロジェクトの受け入れ拠点として八王子キャンパスに建設中であった産学共同研究センター(CORC)が完成し、11月28日から稼働を開始しました。

この研究センターは、本学専任教員を研究責任者として、企業や官公庁から研究資金を調達して共同研究を行い、その研究成果を社会に還元するとともに、本学の教育・研究活動の活性化を目的としたものです(『NICHE』第25号10頁に紹介)。

#### ⑤工学院大学八王子キャンパス(C3:Cキューブ)が2002年の日本建築学会作品選奨に選ばれる

八王子キャンパスに建設したC3:Cキューブが、2002年の日本建築学会作品選奨に選ばれました。作品選奨は、作品選集(2002年は204作品の応募があり、94作品が作品選集中に選ばれました)の中から特に優れた作品に贈られる賞で、今年は12作品が選ばれました。

C3:Cキューブは、地下2階・地上2階の建物で、教室や情報処理演習室を備えており、主に授業やゼミなどに利用される建物です。また、学生ラウンジや自習室も設備され、学生は授業がない時にはレポートの作成などに利用しています。

#### ⑥第9回工学院大学わくわくサイエンス祭

8月24日(土)～25日(日)、八王子キャンパスにて、小中学生を対象とした「大学の先生と楽しむ理科教室」(13市町の教育委員会後援)が開催されました。

今年の演示は全69テーマ、参加者は2日間で約8,000名を数えました。子どもたちが各会場で演示テーマの理論や仕組みの説明を受けて、楽しげにものづくりをしている姿は印象的でした。

毎年「理科教室」参加の男女生徒たちの中から、多くの児童が付属中・高等学校に進学している状況を考えると、理科離れの昨今、教育指導に大きな役割を担っているように思われます。

## VISAカード 加入のお願い

建築系学科同窓会は、卒業生の皆様の会費で運営しています。

このVISAカードは、本校の在校生・卒業生を対象としたオリジナルカードで、2002年現在、入会対象者は建築系学科のみで1万7,200名以上に及んでいます。

在学中はもとより、卒業後の皆様と母校を結ぶ絆として活用していくことを考えております。

**この機会に是非ご加入いただき、**  
同窓会へのご理解とご支援を、お願い申し上げます。

最後に、『NICHE』第26号の発刊に当たり、多忙にもかかわらず原稿を、お寄せいただいた皆様、ボランティアで編集していただいた伊藤氏・大場氏のお二人に、大変感謝申し上げます。

今後とも、建築系学科卒業生の皆様の、同窓会へのご協力・ご支援を、よろしくお願ひいたします。

田野邊幸裕:1969年一部建築学科卒業(山下司研究室)

鹿児島県立鹿屋高等学校出身

E-mail:tanobe@email.plala.or.jp

# 居住環境制御システム比較実験装置

## —八王子11号館に地震防災・環境研究センターが完成



八王子校地の建築系学科実験施設のある11号館に増築される形で「地震防災および環境研究センター」の建物が完成した。

この研究センターは、文部科学省の補助金を受けて施設・設備を整え、研究を遂行する研究推進プロジェクトである学術フロンティア事業によって総合研究所に設置された研究センターであり、建築系学科を中心となり平成13年度から5カ年のプロジェクトを申請し、採択されたものである。

平成13年度は、研究センターの建物および実験設備の建設を中心に研究プロジェクトが実施された。研究プロジェクトの正式課題は「地震防災および環境共生に関する新技術の研究開発」(代表者およびセンター長 広澤教授)であり、3つの課題で構成される。これら3つの課題は、「建築物・機器などの地震防災新技術の研究開発」、「環境共生型建築新技術の研究開発」、「建築・都市の環境共生に関する評価システムの研究開発」である。

この学術フロンティア推進事業で

設置された実験装置の一つが表題の「居住環境制御システム比較実験装置」である。この他に、3階までの木造住宅の試験が行える加力実験装置、振動台などが、センター内に設置されている。

居住環境制御システム比較実験装置は、筆者ら環境系教員が担当する研究に使用する実験装置であり、異なる2種類の室内環境制御システムを直接比較できる装置であり、二つの実験室と機械室で構成されている。研究センター4、5階の2層部分を使用して設置してある。日照障害に影響のない場所を選んで建設されたため写真でわかるように、実験室からは大変に見晴らしがよい。二つの実験室は、同一形状で、床面積26m<sup>2</sup>、天井高5.5mであり、吹抜けのような天井の高い部屋の実験も可能である。これら2室の実験室には独立した空調設備から冷、温風が供給され、吹出し方法、制御方式によって変動する実験室の熱負荷を確実に計測する計測装置も組み込まれている。

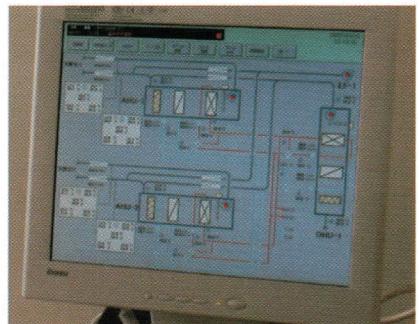
実験室の天井高の変更や窓、外壁仕様の変更も容易なように計画され



■居住環境制御システム比較実験装置外観



■実験装置機械室



■計測監視モニター画面

ており、建築と設備の融合した快適で、エネルギー効率の高い環境・設備システムの研究・開発に活用しつつある。

この実験装置を利用した研究は、学内教員では宇田川、大橋、野部、高信が実施しているが、研究センターは学内外、特に学外の官・民との共同研究の中核的施設として位置づけられているため学外との共同研究が活発に行われつつある。

(記:宇田川光弘／建築学科環境コース教授)

# 大学の先生と楽しむ「理科教室」

## —工学院大学わくわくサイエンス祭—

### ■今年で9回目、参加者は8,000名

8月24(土)、25(日)の2日間天気に恵まれて、八王子キャンパスで小学生、中学生を対象に自由参加、参加無料の「工学院大学わくわくサイエンス祭」が行われました。

「理科離れ」が言われて久しいけれど、子どもたちは本当に理科が嫌いなの、「危険なことしちゃダメ」、「触っちゃダメ」、「実験しちゃダメ」と大人がいっているうちに、子どもたちは理科が嫌いになったのではないの……、大学の先生やお兄さんお姉さんたちが子どもたちに理科の面白さを紹介して味わってもらうために、実施しました。今年でもう9回目、2日間で約8,000名の参加者が集まりました。

### ■テーマ数69の理科教室

八王子キャンパス全体の各建物を使って69のテーマで楽しむことができます。最初にシーキューブ地下「コンピューターの中で自分の家を作ろう」を見学。60人が一日3回に分けて参加。パソコン教室のCADシステム上で設計、「難しくないですか」と聞いてみたら、安原治機先生が、子どもは「5分で覚える」とのこと、きっとゲーム感覚で操作しているのかな~。

1階のロビーには『「アイメイト」(盲導犬)ってナンだろ? 光のない生活を知って下さい』、子どもたちに盲導犬を知ってもらいたい。目隠ししてアイメイトと一緒に歩いてみる。自分の名前を点字で打って、視角障害者に読んでもらう。「アイメイトの優しさや、人間の能力の素晴らしさを感じてもらいたい」と主催者の言葉です。

学生ラウンジでは「医療材料を



使ってスーパーボールを作ろう」、ペレット(プラスチックの粒)に色と匂いをつけて、お湯の中に入れる。柔らかくなったら手で丸める。水で冷やせばでき上がり。子どもたちの目がキラキラ輝いています。大学生のお兄さんお姉さんが、緑色のエプロンを締めて丁寧に説明します。

2階のホールには天井からジャンボジェットや複葉機のそっくりな紙飛行機がぶら下がっています。5種類のモデルがあって、やさしいのから作ります。

この他、印象的だったのは5号館9階の昆虫ロボット、線上ロボットの製作、人気があり過ぎて抽選になりましたが、子どもたちは夢中で作っています。同館3階の「電子オルゴール」の製作では、小学2年生の女の子がハンダ付け「はじめて」と言っていました。

テーマがたくさんあり過ぎて紹介しきれません。子どもたちは自分で作った宝物を大事に抱えて帰途につきます。2日間とっても幸せな一日を過ごしました。 (レポート:大場光博)

# 「大屋台村フェスティバル」開催



2001年(平成13年)12月1日午後5時、新宿キャンパス1階ホールにて開催。建築学科同窓会と建築系学科の共同で行なわれていた大交流懇親会は、出店内容やコンセプトをコンペ形式(応募数15研究室)にして、今回「大屋台村フェスティバル」と名称を改め実施(参加者約350名)しました。会場に入るとまず、「万博の太陽の塔」をイメージした5m四方もあるうかという巨大なシンボルマーク(南迫研究室丸山氏作成)がステージ壁面に掲示されていました。

## ◆コンセプトは「EXPO'70」

「大屋台村フェスティバル」のテーマは、トム・ヘネガン先生(特別専任教授)の提案により30年前に大阪で開催された「EXPO'70」に基づいて会場全体のレイアウトが行われ、例年よりも出店数が増え、所狭しと屋台が建ち並び、同窓生の皆様、先生方、学生のみんなが一体となって、大いに盛り上がりました。オープニングや授賞式などの進行には吹奏楽部のアンサンブルによる華やかな演奏が行われ場を盛り上げました。

トム・ヘネガン先生を審査委員長と

し、倉田直道、中山繁信先生の3特別専任教授が担当。審査結果は、屋台大賞に藤木研究室「TYOUTIN」、企画賞に渡邊・野澤研究室(合作)「REUSE」、運営賞に谷口研究室「光彩陸離」、そして特別賞として安原研究室「食BEAUTILON」が選ばれました。おめでとうございました。また、惜しくも入賞はされませんでしたが、どの研究室の出店された作品はどれもすばらしいものでした。

審査員の講評では、「高度成長期の一大イベントであった大阪万博のその後の建築的に大きく貢献するものでした。これらを振り返ることで21世紀の新たな始動として欲しい」「1週間前から注意して見ていましたが、何もしていない。どうするのだろうと心配しました。こんなに素晴らしいものを短時間に作り上げました。設計の課題と同じです」「単なる屋台以上のもの、企画した考え方が面白い、活気があるといい。大変楽しめました」と、感動した意見でした。

## ◆全国同窓会支部の地酒大会

さらに、新しい企画として、全国の同窓会支部から美味しい地酒が届

きました。『全国の名酒が味わえる』、『これだけでも来たかいがあった』。来場された上戸の方は大変な喜びの声でした。ご送付いただいた各支部などの皆様に、重ねてお礼申し上げます!



**地酒寄贈**●新潟県支部(菊水)／鹿児島県支部(伊佐美、かめ壺焼酎他)／島根県支部(手名推、奥出雲神話他)／鳥取県支部(三朝正宗)／静岡県支部(吉屋忠兵衛、安部街道)／山形県支部(秀鳳、枯山水、出羽桜)／青森県支部(菊駒、ねぶた原酒、北勇至情他)／北海道支部(十勝ワイン、北海鬼ころし他)／福岡県支部(喜多屋、如水、球磨焼酎大石他)／住宅性能評価センター(地酒)／機械工学同窓会(熊本桜の里)。

「楽しいイベントにしたい!」と夜遅くまで白熱した議論を通して努力されました、役員の皆様、お疲れさまでした。同窓会会长・田野邊幸裕、实行委員長・三好薰、高城文一、高橋昭彦。学生実行委員・岩下絵美子、田中康貴さんなど。この他多くの方々、学生のご協力をいただきました。関係者の皆様厚くお礼申し上げます。

(取材:編集部)

# 平成14年度建築系学科同窓会、懸賞付「大メール大会」の案内

建築系学科同窓会の大交流懇親会も、左頁の「大屋台村フェスティバル」で10年を迎えました。この間、年代を越えて、また各研修室の、まさに交流を促してきたと、実行委員一同、自負しております。

そして、10年を数えたのを機に、「交流」の原点を問い合わせることにしました。といって、すぐに答えが出てくるものではありません。

というわけで、今年度は建築系学科同窓会の大交流懇親会の新規プレ事業として、「懸賞付大メール大会」を行います。

これは、開設した建築系学科同窓会ホームページの活性化を目指したもので、さまざまな意見や考えを同窓会ホームページ上で発表し、「意見交換」しましょう！

**そして、懸賞当て、海外に行きましょう！**

**応募対象者**●工学院大学建築系学科の在校生、卒業生、教職員の方、また今回の主旨にご賛同いただける方。

**テーマ**●同窓会について考える  
[学生の部] (学部生、院生含む)  
サブタイトル例:「先輩へもの申す」「先輩と後輩」「友・先生」「理想の先輩・嫌な先輩」「大学に来てから」「大学と自分」「こんなこと言いたい」など。  
[OB等の部] (学生以外の方ならどなたでも)  
サブタイトル例:「後輩(学生)へもの申す」「先輩と後輩」「後輩へ伝えるべきもの・残すもの」「一族同門と人脈」「同窓生の交流会」など。

**共通テーマ**●「こんな交流会がいい」「交流会の意味」「同窓会の活性化」「同窓会とベンチャー」など。

**応募受付開始**●2002年11月1日～

**締切日**●2003年1月15日

**メール応募方法**●文字数:特に限定しないが、800～1200字程度が望ましい(原稿用紙2、3枚程度)

建築系学科同窓会ホームページにメールで投稿、もしくは原稿を本部まで、Fax.か郵送して下さい。

ホームページに掲載しますので、できるだけメールでお願いいたします。

**メールアドレス**●

wwd1025@ccs.kogakuin.ac.jp

**本部住所・Fax.**●

〒163-8677

東京都新宿区西新宿1-24-2  
工学院大学建築都市デザイン学科  
谷口研究室

Fax. 03-3340-0588

応募者は、住所、氏名、電話番号、メールアドレス、卒業年度、または学年や所属研究室名を明記して下さい。また、匿名を希望される方はその旨も記入して下さい。

**賞品**●建築と美味を求める旅へ同窓会主催海外ツアーア

[学生の部]

メール大賞:(3点以内)

　　海外旅行+賞金5万円

メール当賞:(7点以内) 海外旅行招待

[OBの部]

メール大賞:(2点以内) 海外旅行招待

メール当賞:(3点以内) 海外旅行1/2

招待

(OBの方には都合により旅費一部負担願う場合有)

**審査の方法**●

メール大賞は審査委員とそのメールを読んだ方々の反響により点数化し総合点で決定します。審査委員は、同窓会、交友会、建築系学科教職員、OB運営委員、学生運営委員から選出し総勢6名程度とします

※メールを読んだ方の反響とは、いただいたメールを受付後順次ホームページに掲載します。そしてそのメール内容についての意見を求めます。いわゆるホームページ上での意見の交換です。良いに付け、悪いに付けその反響を評点として加算いたします。

メール当り賞は、メール大賞に受賞された以外の応募者全員を対象に公開抽選で決定いたします。

**結果公表**●2003年1月31日までにホームページへの掲載と本人へ直接連絡致します。

**旅行説明会とシンポジウム**●2002年2月10日頃

当選者および旅行希望者が、集合し「交流会など」に関するシンポジウムを行う(内容については次号の『NICHE』へ掲載)。

**海外旅行予定日**●2003年3月1日～3月15日前後で設定します。

なお、この旅行には、受賞者以外のOB・学生などにも自主参加をいただき、総勢25人程度を予定しています。

旅行先などの詳しい情報は、ホームページで12月中旬までに発表する予定です。

どうぞ、皆様ふるって応募下さい。

(交流会のあり方を考える会発起人会)

# —本校の大学院生グループ IFHP 国際学生コンペで1等受賞!

2001年9月に、スペイン・バルセロナで行われた「第10回 IFHP 国際学生コンペティション」において、本学大学院建築学専攻の大学院生による設計提案「NEW SHINAGAWA-JUKU as LODGING TOWN」が世界で1等という大変優秀な成績をおさめました。今村亮輔君(2002年修士修了／渡邊研究室)、原本智紀君(同／野澤研究室)、吉田敦君(同／野澤研究室)、鶴見忠大君(修士2年／渡邊研究室)の4名による快挙です！

このコンペを主催している IFHP とは、International Federation for Housing and Planning の略で、わが国では国際住宅・都市計画連合と呼ばれています。前身は田園都市を提唱したかのSir Ebenezer Howard(都市計画の教科書には必ず出てくる名前です)が1913年に設立した国際田園都市・都市計画協会であり、これを含めると80年を超える歴史を有する伝統ある機関で、現在は50カ国以上のメンバーが加盟する国際的な組織です。

コンペは約20年前の1983年から隔年で開催されているもので、都市計画・都市デザインを学ぶ学生を対象としてその年の国際会議のテーマに合わせてコンペのテーマが設定され、応募者はそれぞれ独自の対象地を選んで、このテーマに沿った提案を応募するという方法で実施されています。

今回のテーマは「都市ネットワークと建築のリサイクル」というもので、25カ国89作品が提出さ

## 建築系学科同窓会総会と校友会総会が開催

### ■工学院大学建築系学科同窓会・第37回総会開催

2002年(平成14年)5月26日。

午前11時、工学院大学新宿校舎11階・第5会議室。

平成13年度事業報告及び収支決算。平成14年度事業計画及び収支予算。出席者31名の中、田野邊幸裕会長の説明後、全員の拍手で承認されました。

### ■講演会開催

同日12時30分

工学院大学新宿校舎3階・0312教室にて「政策次第で景気は良くなる」のテーマで講演会開催。講師は日本証券経済研究所主任研究員・紺谷典子氏。『今こそ景気について入れる時期』と指摘しながら、その理由を歴代総理の判断能力を具体的に示し

ながら、政界の裏話を豊富に説明。さらには、郵政民営化など当面する多様な問題を軽快に分析し、リズミカルな話題の展開は、井戸端会議に参加しているように、分かりやすく思わず聞き入ってしまいました。漫才のやり取りのように、時には笑い声が上がる中で1時間15分が過ぎました。

### ■工学院大学校友会・第46回総会

工学院大学校友会の第57回評議員会及び第46回総会が午後3時から引き続いて開催。

181名の評議員中、出席111名、委任状35票、計146票で評議員会成立。第1-2号議案:平成13年度事業報告、同収支決算報告並びに財産目録承認の件、監査報告が全員の拍手で承認。第3-4号議案:平成14年度事業計画

(案)、同収支予算承認の件が決算報告並びに財産目録承認の件が、全員の拍手で承認されました。

### ■工学院大学校友会・懇親会

午後4時10分から7階食堂で21名の来賓と同窓生172名の参加のもと、開催されました。会場一杯に懐かしい顔がそこそこで話題を開き、来賓の挨拶、万歳三唱など賑やかに時間を過ごしました。

(記:同窓会会長・田野邊幸裕)





■左より今村亮輔さん、鶴見忠大さん、  
原本智紀さん、吉田敦さん

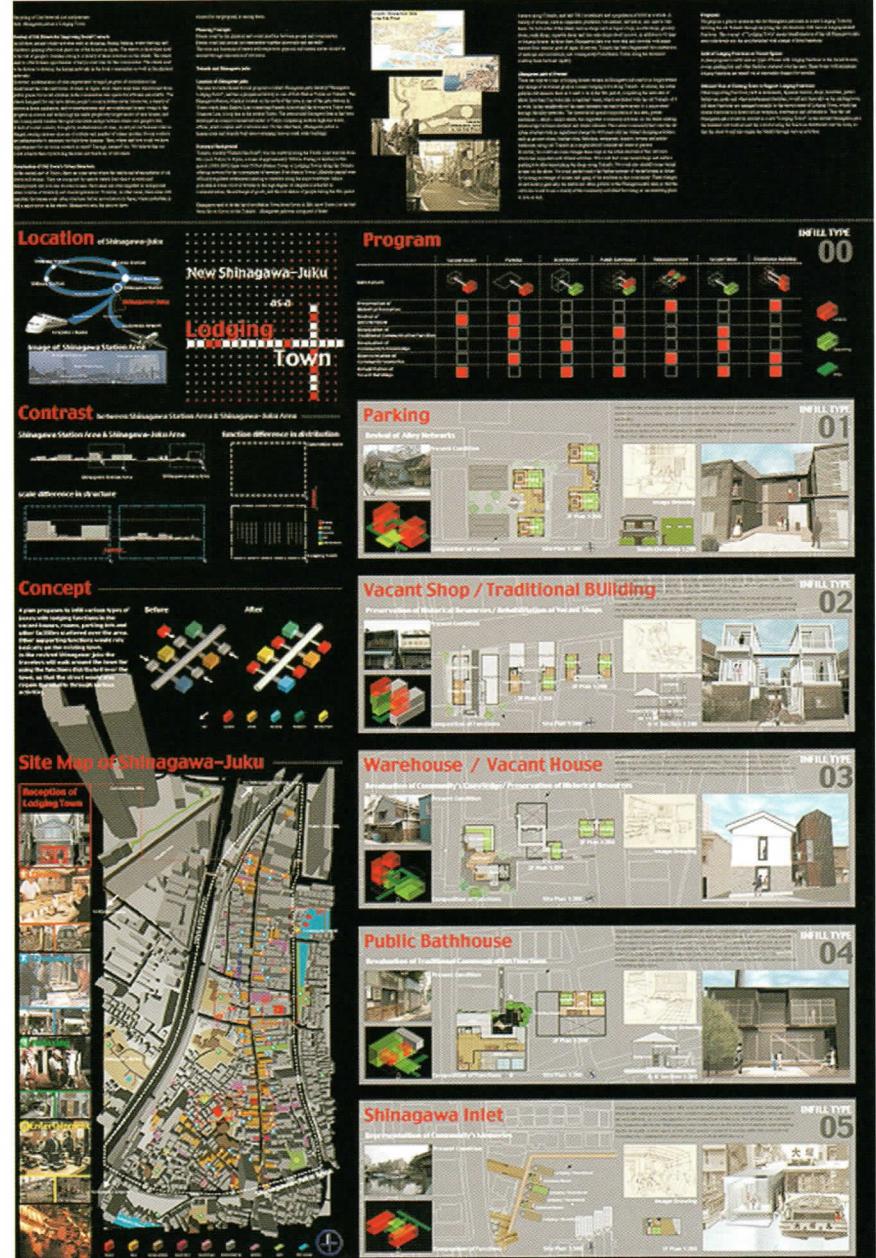
れました。内訳は、ポーランド10、日本9、チリ9、ドイツ7、フランス6、アルゼンチン6、香港5、ユーゴスラビア5、ベネズエラ5、ブラジル4、ギリシャ4、マレーシア4、ロシア2、ウルグアイ2、スウェーデン、英国、コロンビア、サウジアラビア、南アフリカ、イスラエル、スペイン、チェコ、オーストリア、クロアチア、ラトビアから各1と、非常に幅広く世界各国から作品が応募され、提案とプレゼンテーションの優劣を競いました。

本学チームの提案の概要は、旧東海道の品川宿を対象として、かつての宿場町が持っていた機能とさまざまな付加的機能を、現代の街並みの中の空き店舗や空地、駐車場、老朽建物などをリサイクルリユースして埋め込み、街全体に広がるこうした各機能をネットワーク化して、街全体で現代の一つのホテル機能を担うようにする、というものでした。

なお、作品の詳細は野澤研究室ホームページ  
([http://giants.cc.kogakuin.ac.jp/nozawa\\_lab/](http://giants.cc.kogakuin.ac.jp/nozawa_lab/)) でご覧いただけます。

このコンペの審査は、IFHPの前会長の他、地元バルセロナ市の都市計画担当者などで構成される審査委員会によって行われました。その中の一人で、わが国から審査員として参加した鳥栖那智夫氏(日本都市総合研究所代表)によると、本学チームの作品は審査の早い段階から審査員の関心を集め、高い評価を得ていたとのことでした。

特に、この作品のテーマ展開の新鮮さ、解決方法の発想の豊かさと個性、説得性の高い十分なプレゼンテーションといった各点を評価されての受賞だったようです(『新都市』



都市計画協会／2001年12月号の鳥栖氏報告より)。

この結果を受けて、2002年3月には大橋秀雄学長にもご臨席いただきて公開プレゼンテーションを行ったり、外部で開催した研究会で発表したりするなど、内外への発表も行いました。

本学学生のこうした国際的な舞台での活躍は、何よりも後輩たちに刺激を与え、今後大きな目標となることでしょう。この結果に満足せず、追隨してさらに高いレベルを目指して活躍する学生がどんどん出てくることを期待したいと思います。

(記:野澤康／建築都市デザイン学科助教授)

# 本校・建築都市デザイン学科の3年生が最優秀賞、 ——「1,500万円の快適住宅コンペ」

## ◆「豊かな環境で子育てを」

島根県安来市は2002年(平成14年)1月19日、学生を対象に募集した住宅コンテストの入賞作品約70点を開示した。応募総数は264点。最優秀賞に、工学院大学建築都市デザイン学科(萩原智宏、保倉徹さん=現在学部4年)、この他に広島工大大学院環境デザイン学科、筑波大大学院芸術研究科の3点が選ばれた。

このコンテストは同市汐手が丘の住宅団地「ハーモニータウン汐彩」のPRの一環として行われ、「生活スタイルの提案」「ローコストの手法」などの木造住宅がテーマである。建築本体と外構工事の合計で約1,500万円程度。最優秀賞3点は、入札により安

来市が発注して同団地内に建設。秋に開催する「手作り住宅フェア」(仮称)で3棟を公開展示する。

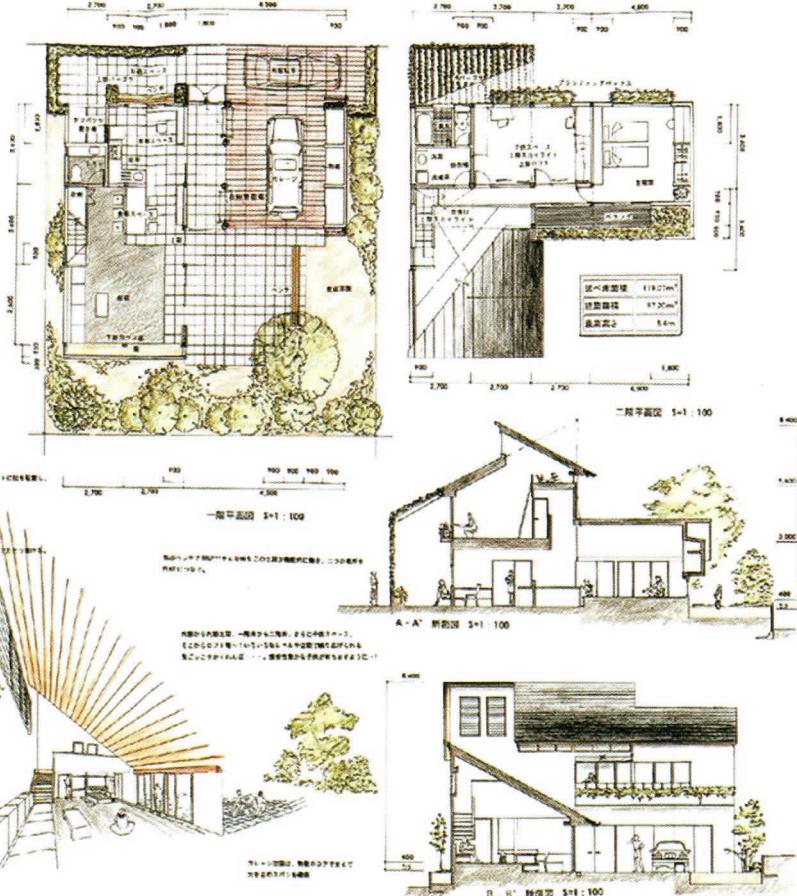
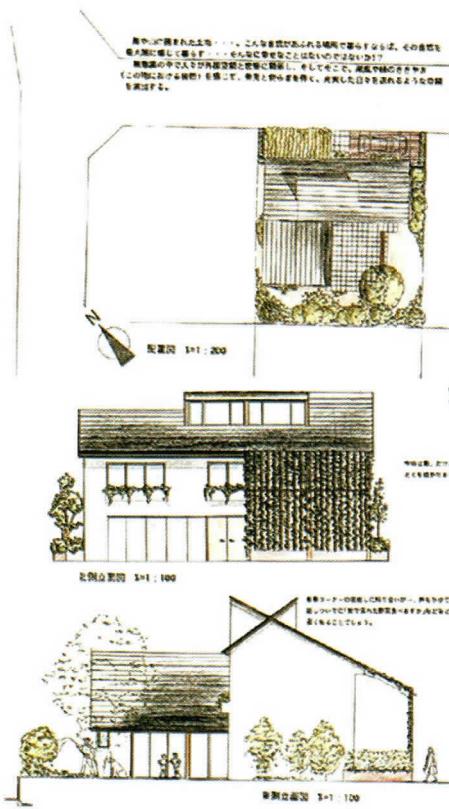
萩原さんらの案は「豊かな環境で子育てを」のテーマで、受賞の理由として次のように評価されました。「感情豊かな人間形成のための生活を提案。1階は土間のあるLDK、2階には3室+浴室。室内に土間を設けることにより、内と外とのつなぎに広がりを持たせ、庭のほか建物にも多くの緑を取り入れ、自然を感じさせる行動的な生活スタイルを演出。全体の立体を長方形のL字型配置の単純なものにするなどでコストを押さえる。建物と庭との関係」が審査委員に評価された。

◆まだ学ぶべきことはたくさんあるさて、今回の二人の印象的な体験をいろいろ聞いてみましょう。

——本当に、まだ信じられないような経験です。学生のうちに住宅が1棟建ってしまうなんて……。今回の応募の切っ掛けは3年生の時に谷口研のデザインゼミで、みんなで学生を対象としたコンペを選択し、全員で応募しました。5チームが応募しました。

まず、プランを考えるにあたって、海や緑や丘、そういったものに、人が積極的に自然に触れていく……activeな生活を演出する住宅を提案したいと思いました。プロジェクトをまとめるのに大学で作業して、1カ月

## Active Life



■コンペ図面

(\*写真および図版の使用に際しては安来市承諾済)



■右: 萩原智宏さん／左: 保倉徹さん

半かかり、図面のみで提出しました。作業中の悩みは、お互いに目標は決まっていたのですが、2人でまとめたので、細かいところで意見の衝突などがありました。相手がどう思っているのか考えたりして、話し合いに時間がかかりました。けれど、反面楽しいこともあります。

と、意見調整に苦労したようです。  
——学生なんだから思いっきり、自分の考えをだしてやりたい。楽しく設計する気持ちが住む人に繋がるようにならね。

と、保倉さん。一方、  
——楽しく設計するなかで、実際に住宅に住む人がいて、それを毎日

見て通る人、町並みとして眺める人、現実も意識して設計することも大切。と、萩原さん。

実施設計は、工学院大学OBの島根県の建築家、江角俊則さんが担当されました。

——打合わせしていて、日照条件、建築の素材、設備、植栽の樹種など



■模型



■実施 PLAN 矩形図



■実施 PLAN 平面図



具体的なことの知識が不足していて困りました。プロの人と、話すのが難しい。あやふやに思うだけでは何一つ分らない。実際の設計に触れて難しさを感じました。そして、自分の知識不足がとても悔しい、納得するだけでは物足りないです。しかし、審査委員長の竹原先生が、生活感や利便性がイメージしやすく、提案にリアリティがある。このプランが一番先に買い手が決まるのではないか。と話してくれました。

そして江角さんのサポートで、屋根や2階の壁面構成などがsimpleかつ楽しげなものへと姿を変えていきました。工事中に、島根の現場で自分たちの考えた設計が具体的な建物になっていく姿を見て、実施設計はすごいと感動しました。今は、プロの建築家に憧れています。早く社会に出て、現場で働いてみたい気持ちで一杯、これからも学ぶことがたくさんあります……と、話します。

#### ◆アクティブなライフスタイルへ

——そして、今回の打合わせの際は、島根県の友達の実家にも宿泊させてもらい、ご家族には大変お世話になりました。島根県の人たちはみんなとても暖かいです。今回は受賞後に、いろいろな人に出会えたことが良かったです。

建築学科の設計課題は、学年が上がるに連れ規模が大きくなります。萩原さんは「住宅の設計が好き、住宅にはたくさん楽しみがあります。楽しくできました」と言います。この受賞を切っ掛けに、保倉さんは「いろんな体験がしたい、さまざまな価値観を持った人とふれあいたい」と、春休みの30日間、タイやカンボジアへの旅を実行し、好奇心旺盛なアクティブなライフスタイルに変化しました。

10月4日の竣工式には、二人で出席の予定です。この記事を読んでいる頃には、設計した住宅が完成しています。きっと二人とも感動してでしょう。そして、「住まわれる方々

に笑顔が耐えないと、楽しい暮らしが生まれたら、とても幸せに思います」と結びました。

授賞式をはじめ2回の打ち合わせには、一人分の交通費しか出ませんでした。校友会から交通費の補助をしていただききました。諸先輩の皆様、大変助かりました。厚くお礼申し上げます。

(取材:大場光博)

#### ■萩原智宏

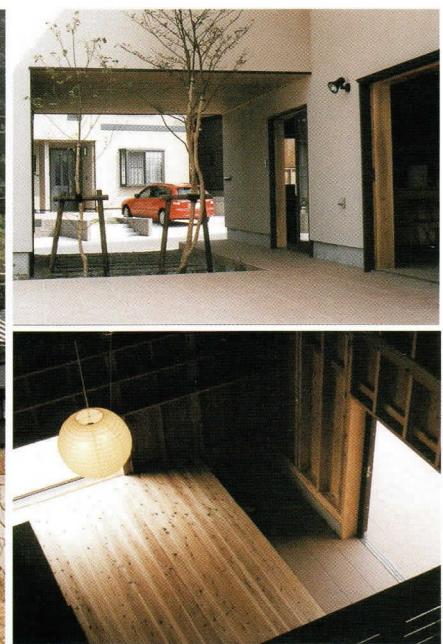
工学院大学建築都市デザイン学科在学中  
卒業予定 2003年3月(谷口研究室)  
群馬県立前橋東高等学校出身  
E-mail:hagi\_tomo\_0401@yahoo.co.jp

#### ■保倉徹

工学院大学 建築都市デザイン学科在学中  
卒業予定 2003年3月(谷口研究室)  
埼玉県立越谷南高等学校出身  
E-mail:toru\_hokura@hotmail.com



■竣工しました!



## 戦後の象徴「米軍ハウス」――

# 本校・大学院生の研究がニュースに



戦後の象徴「米軍ハウス」を研究、「玄関や廊下なし」「入ればリビング」「広々・平屋・浴室内に水洗トイレ」……。戦後の歴史を伝える「貴重な記録になると、期待されています」の見出しで、2002年(平成14年)2月9日(土)の「アサヒタウンズ」に記事が掲載されました。

1950年頃から建てられた米軍ハウスについては、自治体にも資料がなく、老朽化の為に急速に姿を消しています。米国式の住宅に『どんな人が、どんな理由で、どんな風に暮らしているのか』、調査・研究しました。

共同研究者は、工学院大学・建築都市デザイン学科の谷口宗彦教授の研究室に所属する大学院修士課程2年岩下絵美子(現:小田急建設設計部勤務)、学部4年安田光志(現:院生)、同内薗健(現:院生)さんらと、大学院OBで川崎医療福祉大学講師・松本正富さん(40歳/岡山市)。

米軍ハウスは、戦後に東京都内では立川基地、横田基地などの進駐軍

の兵士の家族用賃貸住宅として建てられ、全国に2万戸程度建設されました。1970年頃から、立川、横田基地周辺では兵士が基地内に移動してから、代わりに日本人が居住するようになりました。「戦後、日本人の衣食住は急速に西洋化しました。その契機となったのが米軍ハウスだったのではないかと思いました」と岩下さん。

### ◆余裕のある魅力的な空間・設備

2001年(平成13年)5月から、昭島市中神町を中心に、立川市高松町、同上砂川町などを対象に、外観調査、居住者アンケート、10件については内部の実測や、聞き取り調査を行いました。中神町では、1975年462戸が、昨年には67戸と85%が消滅。上砂川町では1985年222戸が2001年は218戸だが半分が空家で、賃貸にはもう出しません。

米軍ハウスの規模は100坪(330m<sup>2</sup>)の土地に2~4LDK(70~100m<sup>2</sup>)の木造平家建て。ゆったりとしている。庭

には青々とした芝生、低い垣根のフェンスで見晴しがよい。ブロック塀がないので狭さを感じられない。間取りは入口のドアを開けると靴のままでリビング、複数の個室が並ぶ。床はフローリング、キッチンユニットや給湯設備の他、ゆったりしたユーテリティの中にバスユニット、水洗トイレがあり洗濯スペースも余裕がある。戦後間もなくこんなに広い豊かな建物が米軍ハウスには存在していた。

### ◆何故か居住者には芸術家が多い

日本人は、15~20年と長期間住んでいる人が多く、中上地区では66世帯の内、20世帯が写真家、画家、彫刻家などの芸術家。米軍ハウスの魅力は、広々した空間が人気、生活に潤いと安らぎを与えていている。自由な創作活動、子育て、ペット、コミュニティづくりに好影響。賃料が安く、間取りや塗装が自由、リビング中心のプランは家族の交流に最適などという。

今でも住み続けている人々は、きっとこの豊かな空間に魅せられているに違いない。



谷口教授は「ハウスは戦後の住まい方の意識の変遷を探る上で良い素材。豊かな都市づくりの点から学ぶ面も多い」と指摘。調査をまとめた岩下さんは「半世紀前の米国式が、今の日本では当たり前に取り入れられている。米軍ハウスの果たした役割は大きい。姿を消していく中でこの記録が役に立てば嬉しい」と締めくくります。掲載後間もなく研究室に、立川市図書館から貴重な記録なのでこの修士論文を保存したいとの依頼が届きました。

(取材:編集部)

# 博多に、きんしやい

## 工学院大学校友会・福岡大会開催のご案内

冬の気配が日毎につのる今日この頃ですが、皆様方にはお元気でお過ごしのことと存じます。

このたび、校友会の全国大会を福岡で開催してはとのお話をいただきました。初めて海を渡り九州の大会ですから、ぜひ全国の校友の皆様に博多らしい時に来ていただきたい……との思いから、博多の男たちが熱く燃える「博多祇園山笠」の最中に開催することになりました。

2003年(平成15年)7月11日の16時30分から開催予定です。特に建築学科の皆さん、ぜひお誘い合わせの上、博多において下さい。

大会當日前後は、市内の到る所で山笠と行き合うものと思われます。博多の人形師が腕と意地にかけて飾り付けた「飾り山笠」もご覧いただけることと思います。昨年は12本の飾り山笠がたちました。建築に携わる皆様には、博多の人形師の作品がどのようにうつるかが楽しみです。

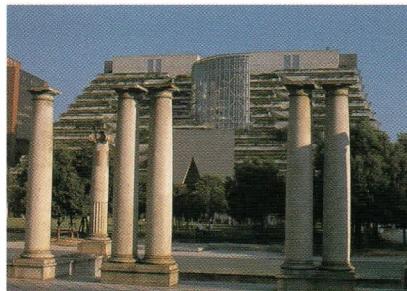
博多は、食通の皆様にも喜んでいただける海の幸を始めスープが決め手の水炊きやもつ鍋、辛子明太子……最後はのれんに誘われて屋台のラーメンでしめくくりとなるのでしょうか?

アジアと世界を結ぶ交流拠点都市福岡の歌い文句通り、見るべき建築物もいろいろあります。アクロス福岡、福岡国際会議場、マリンメッセ福岡、福岡タワー、福岡ドーム、キャナルシティら数多くありますので、開催前までは、一覧表を作成したいと考えております。

ぜひこの機会に建築学科の皆さんぜひおそろいで博多の地へ足をお運び下さい。支部の建築学科の会員一同、心より皆様をお待ちいたしております。

(記)麻生好彦

■博多祇園山笠



■福岡の建築】アクロス福岡



■福岡の建築】キャナルシティ

### ■麻生好彦

1963年●工学院大学建築学科卒業

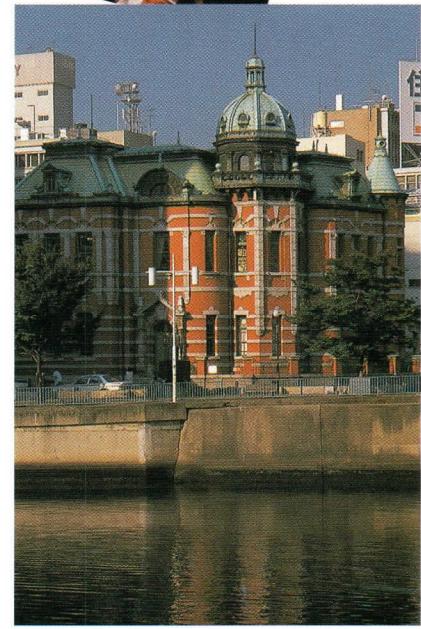
平岡研究室(山下研究室)

1963年～1967年●大野建築設計事務所

1967年～1971年●篠崎建築設計事務所

1971年～1973年●サン建築設計室開設

1973年●サン設計室設立



■福岡の建築\_福岡市赤れんが文化館

### 【連絡先／会社】

サン設計室

〒812-0017 福岡市博多区美野島2-11-18

TEL 092-472-7883 / Fax. 092-471-5681

E-mail : sunarchi@minos.ocn.ne.jp

★工学院大学の卒業生で常務取締役の鷺崎信之が在籍

## 同窓生を訪ねて

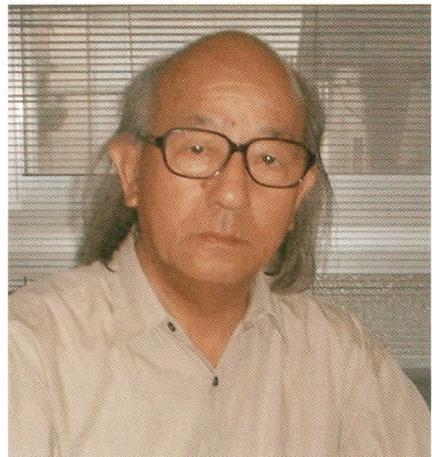
# 山口文象と安野光雅美術館

小町和義(番匠設計)

### 《はじめに》

小町和義さんは1927(昭和2年)生まれ、数寄屋建築で著明な方です。JR八王子駅近くの事務所にて、お話しを伺いましたが、大変膨大な設計活動を行われています。諸活動も雑誌や作品集にまとめられていますのでご覧になられた方も多いと思います。お話しの中で強く印象に残るのは、16歳で工学院に学びはじめた頃の恩師山口文象との出会い、そして昨年、島根県津和野町に竣工しました「安野光雅美術館」とのかかわりです。

紙面の都合上、この2点に話題を絞って記述しました。ご了承下さい。



### 山口文象との出会い

小町さんの実家は八王子の宮大工。子どもの時から、親の仕事を見ていて、そのまま大工になるのには躊躇していました。もっと広い世の中を見たい気持ちが強くなり、1941年(昭和16年)4月、15歳で工学院(現在の工学院大学専門学校)に入学して、1944年(昭和19年)3月に卒業しました。当時の予科は昼間1年間授業の後、本科の2年間は現在の新宿校舎の場所で夜間に授業がおこなわれました。夜の授業が済むと八王子に帰るのが遅くなるので都内の何処かに勤めないといけなかった。義兄が東京の設計事務所にいて、その友達が山口文象(註1)事務所に勤めていた偶然が重なり、その人の紹介で、山口邸の書生となることができました。

山口は当時41歳、若い頃仲間と創字社を創り建築運動を展開していた人です。当時事務所は銀座1丁目にあり、技術者が7、8人いて軍需工場用付属の工員宿舎や住宅などを設計していました。小町さんは昼間そこで働きながら夜は新宿西口の工学院に通学しました。設計計画の教師に蔵田周忠がいました。彼は山口の若い時の友人なので、話しが合い身近な感じがしました。助手には、その後日本のデザイン界をリードした剣持勇がいました。印象的な人でした。

山口邸の離れた書生部屋は、母屋の2階の先生の書斎から見えたので、部屋の明かりがついていると夜中でも山口が見にきました。ガラス窓を叩く『トントン』音がして『早く寝なさい』。ところが設計のスケッチなどしていると部屋に上がって来て、『おまえだけ』声がかかりドンドン自分で図面を描き出します。当時40歳代の山口が、16~17歳の子どもを相手にして突っ込んできました。

山口自身も下町出身、父親も大工でしたから、小町さんと同じ境遇でした。小町さんを早く一人前にしたいという気持ちがあったのでしょうか、厳しく鍛えられました。山口は身近に手本を見せながら、自分の建築への情熱を学ばせました。

戦争が進み仕事もなくなり所員も兵隊にとられ1944年(昭和19年)頃に



■本科での測量実習(1942年)——当時は新宿校舎の近く、淀橋浄水場に低い山があり、そこに全員で実習に出かけた。中央は先生、前列の右から二人目が小町さん。

はついに山口と小町さんの2人になりました。そんなある日ピアノが消える、30帖敷きのサロンの絨毯が消えました。「売り食い」でした。それでも『お前はうちにいろ責任を持つ』といわれましたが、昔の人の凄さがありました。

ある日、小町さんが軍隊に『志願したい』と申し出た時、一晩中、山口に説教されました。『若いからお前の覚悟はわかるが、兵隊検査が済めばいやでも連れてゆかれ、命を捨てることになる。この戦争は負ける、命を無駄に落とすことはない』、赤紙が来るまでは『ここにいて建築の勉強をしていればよい』と諭されました。当時は反体制というか過激な言葉なので、軍国主義時代の意見としてはそぐわなかった。しかし小町さんは『目の前が明るくなった気持ちがしました』。終戦で世界情勢が変わり、五里霧中で何もわからなかった山口の言葉が、本当に理解できました。そして志願した友達の何人かは、帰らぬ人となりました。

戦後は銀座の事務所も焼け出され、自宅での仕事となり、友人の画家のアトリエなどの設計で辛うじて食い繋いでいましたが仕事が少なく、暇な時は近くにいた猪熊弦一郎のアトリエにデッサンを描きに通っていました。1948年(昭和23年)になると全く仕事がなくなり、その年の末に事務所を解散することになりました。そして、翌年3月、山口の旧友の主催していた東京建築設計事務所に世話をもらいました。

ここには当時としても新しい形の4人共同経営の設計事務所で、経営担当の平松義彦、設計担当の今泉善一、経理担当の道明栄次などがおり、3人は創宇社同人で山口の後輩でした。あた今泉と道明は工手学校(工学院の前身)卒業で、小町さんの先輩にあたったのでとても可愛がられました。仕事は労働組合関係の仕事や学校の改修の仕事が多く、事務所の中には戦後建築運動の中心となった新日本建築家集団(NAU)の事務局があり、多くの人が出入りしていました。事務所に茶室の仕事がきて今泉が担当し、小町さんが助手をするようになったのが、数寄屋建築と関わる切っ掛けです。現場では良い棟梁に恵まれて数寄屋のディテールを色々教えてもらいました。

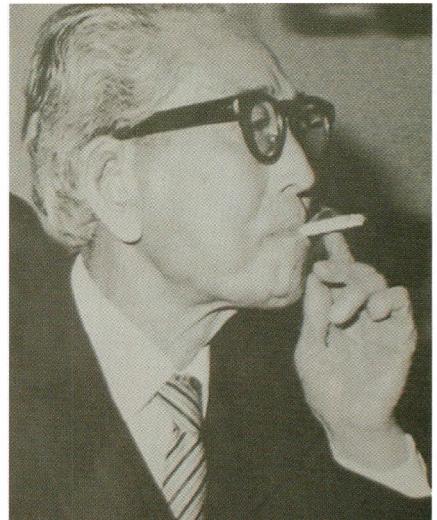
その後の小町さんの設計活動は数寄屋建築をはじめ、寺院建築、茶室、別荘、住宅、医院、疗養院、保育所、記念館など大変多岐にわたっているのが特徴です。紙面の都合上、詳しくは『数寄屋の実践』(註2)を参照して下さい。

## 安野光雅との出会い

山陰の小京都として親しまれ、歴史ある城下町の雰囲気を今も残す津和野町。森鷗外や西周をはじめ多くの偉人を輩出した文化の香り漂う同町に「安野光雅美術館」が2001年(平成13年)3月18日に完成しました。鉄筋コンクリート造、地上3階、一部木造、本館1~2階、別館1~2階、建築面積2,304m<sup>2</sup>、延べ床面積2,901m<sup>2</sup>。

別館には「昔の教室」と「プラネタリウム」があります。美術館に、何故プラネタリウムが必要なのか、昔の教室が必要なのか、議会では問題になりました。安野さんは次のように、説明しています。子どもの頃の世界は見える範囲が世界です。津和野のまちから見えるあの山の範囲までが子どもの世界、ところが山に登ってみると、向こう側にも違う世界が続いている。プラネタリウムは、壮大な宇宙の広さや、津和野の四季を子どもたちに教えたかった。

安野さんは、自分で資料をつくり町に配付して説明された。議会も全会一致で了承した。



■小町さんの師・山口文象



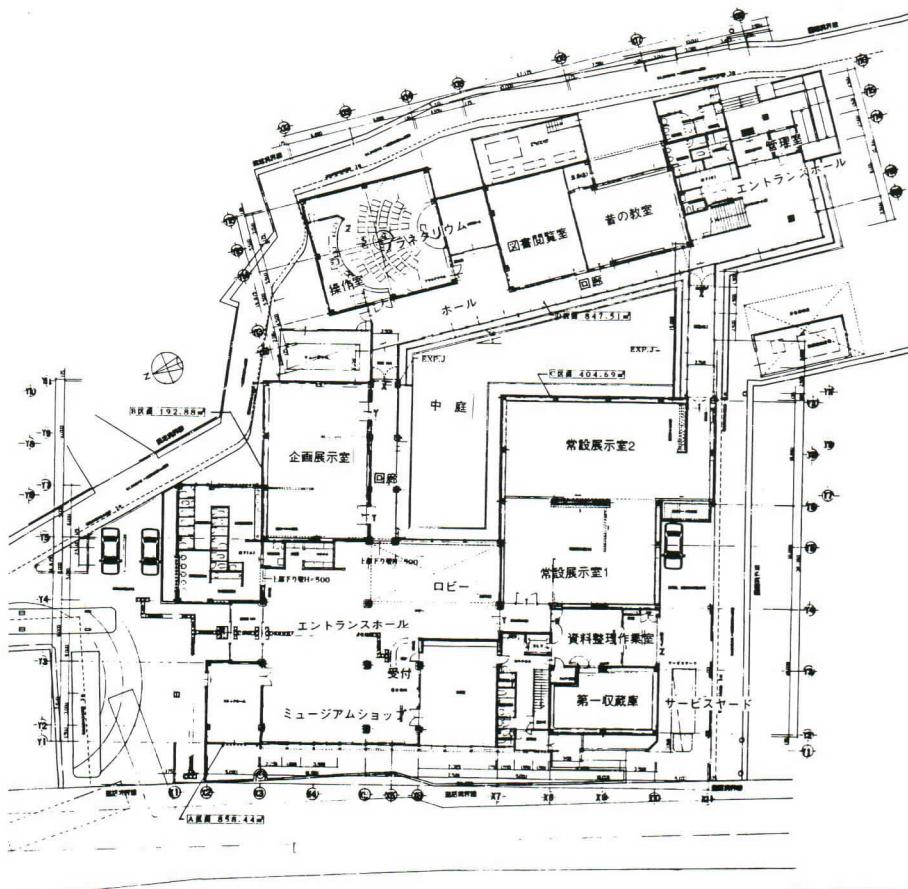
■事務所の先輩たちと(1943年頃)——手前が小町さん



■津和野の町並みと美術館 (\*写真:上田豊幸)



### ■北西側外觀（\*）



## ■ 1階平面図



■南西側外観（\*）



■ロビー夜景(\*)

# 同窓生を訪ねて

■山口文象の言葉——小町さんの机の上の壁には、この言葉が額に入れられて飾ってある。

20年前に安野さんの自宅アトリエを設計したことや、『私の考えを充分に伝え、考えがまずかったら何度も話しを聞いてもらえる人』として寺社、茶室などの実績のある小町和義に、安野さんは設計を依頼しました。



時代を越えて本当に残るものは何だろうか、時代に迎合してはいけない。津和野の子どもたちの心の中に故郷として受け入れられるもの。4,000人が住んでいる津和野の町並みになじむものを作りたい。『津和野の伝統的な町並みを念頭に置き、それを作つた先人たちの技法に学び、新しい町なみを創ることが私の仕事だと考えた』と小町さん。結果として町民みんなに喜んでもらえ、津和野の町の宝物のようになりました。

施工するにあたっては、小町さんが優れた技術者を日本中から選択した。屋根には5色の石州瓦が58,000枚葺かれている。地元の3代続く職人、谷口寛さんの手で葺かれた。そして、彼は地元の生活経験の中から雪止めの数、雨仕舞の問題などを提案してくれました。左官工事は淡路の久住章さん、この建物の見どころは斜格子のなまこ壁と漆喰、現場で模型を何種類もつくり作業を進めた。見ていて安野さんが「彼はすごい人」とつぶやいた。現場所長の川越一幸さんも大勢の職人さんを束ね指揮し、小町さんたちの設計を理解して真剣に現場に取り組んでくれました。またそれを支えたのが副所長の平田誠さん、みなさんに大変感謝しています。

最後に設計から現場管理完成までの4年間、膨大な図面(全て手描き)を描き完成まで何十回となく現場に飛び、小町さんの片腕となって頑張ってくれた阿部嘉典(工学院大学1975年卒業／波多江研)、小林勝(工学院大学1985年卒業／武藤研)、蓮見健二(筑波大1992年卒業)その他スタッフの協力によって町民に喜ばれる建物ができたことに感謝すると同時に、それぞれの4年間の経験はこれからの仕事に生かされることと思います。と小町さんは話します。

## 《おわりに》

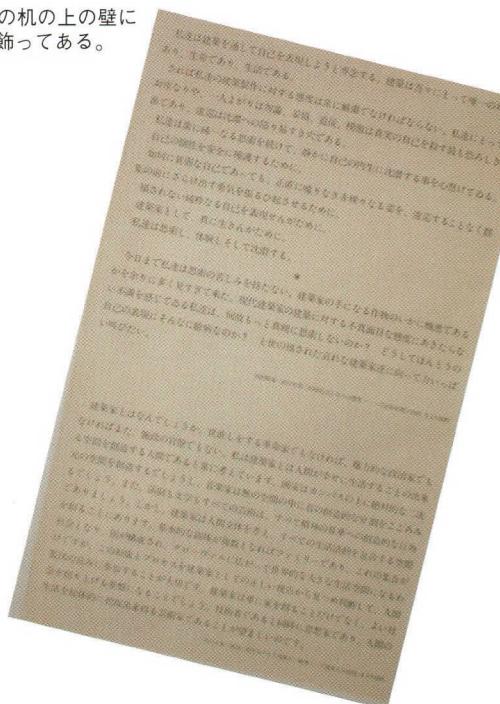
番匠設計の所長机の壁の上に山口文象の写真と言葉が額に入れられて掲示しています。その言葉の一節を抜粋して読んでみましょう。



■展示棟東側外観——中庭より(＊)

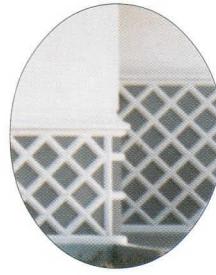


■エントランスホール(＊)



## 住宅建築別冊・42 数寄屋の実践 ——番匠設計の30年——





# 同窓生を訪ねて

## 【ご案内】



■教室（＊）



■プラネタリウム（＊）



■図書室（＊）



■アトリエ（＊）

『私達は建築を通して自己を表現しようと専念する。建築は吾々にとって唯一の対象であり、生命であり、生活である。されば私達の建築製作に対する態度は常に厳肅でなければならない。私達にとってはお座なりや、一人よがりは勿論、妥協、追従、模倣は真実の自己を殺す最も恐ろしき病菌であり、逡巡は沈滯への陥り易いすき穴である。私達は常に純一なる思索を続けて、静かに自己の内生に沈潜する事を心懸けている。自己の個性を安全に擁護するために。如何に貧弱な自己であっても、正直嘘りなき赤裸々な姿を、逡巡することなく群衆の前にさらけ出す勇気を振るい起こさせるために。禍されない純粹なる自己を表現せんがために。建築家として、真に生きんがために。私達は思索し、体験そして沈潜する』。

思い起こせば16歳の小町少年が、生涯の恩師として山口文象の元で建築を学び始めてから今年で59年、今日も恩師の後ろ姿を目標に、淡々と歩き続いている姿が、目に浮かびます。

（レポート：大場光博）

（註1）建築家・山口文象：1902年（明治35年）浅草に生誕。棟梁の父と鳶職の養父。小卒後に職工徒弟学校。清水組雇用（16歳）、通信省経理局營繕課製圖工（18歳）、1923年（大正12年）関東大震災復興の内務省帝都復興院橋梁課嘱託技師（21歳）、創宇社建築会設立。1930年（昭和5年）ドイツに1年半、国立造形学校バウハウスの指導者ワルター・グロピウスに学ぶ。1932年夏帰国（30歳）。日本歯科医専、番町集合住宅、山田邸、青雲荘等の作品で一躍若手建築家。1934年、芝白金に山口文象建築事務所主宰（32歳）。1930年代に洋風・和風建築と土木デザイン質量共充実。しかし戦時中資材不足し軍需工場の微用工宿舎など仕事減少。戦後1949年事務所解散（47歳）。1950年、美術団体の新制作協会に建築部会起こし、翌年建築家集団RIAグループ結成。「ローコストハウス」作品で戦後出発。1960年代にRIA建築綜合研究所体制整う。1978年逝去（76歳）。

（註2）数寄屋の実践・番匠設計『住宅建築別冊・42』212ページ／定価3,900円／発行：建築資料研究社 1995.9.10／03-3986-3239／Fax.03-3987-3256。

小町和義さんの講演会が、以下の要領にて開催されます。会員の皆様、どうぞご参加下さい。

## 工学院大学公開講座 イブニングセミナー

主催●工学院大学生涯学習センター  
後援●新宿区教育委員会

[テーマ3] 喫茶法の流れと茶室の成立

### 第1回：お茶の歴史とわび茶の成立

禅僧栄西が臨済宗とともに持ち帰った茶種と茶法は、その後の禅宗寺院に、北山茶の湯、東山茶道に発展する。さらにわびの開祖・村田珠光に受け継がれ、千利休によって大成される。その過程を学ぶ。

講師●小町和義（番匠設計代表／建築家）

日時●2002年11月22日（金）

18:30～20:00

会場●工学院大学新宿キャンパス

3階0312教室

### 第2回：わび茶室の展開と構造

わび茶室は開祖・珠光四畳半席に始まり、武野紹鷗→千利休へと受け継がれ、利休によって大成される。その組立てと構造を学び、さらに後の茶室にどのように展開されたかを、図面とスライドでたどる。

講師●小町和義（番匠設計代表／建築家）

日時●2002年11月29日（金）

18:30～20:00

会場●工学院大学新宿キャンパス

3階0312教室

受講料●無料

定員●各講座280名（先着順、申し込み不要）

問合せ先●工学院大学・広報部

☎ 163-8577 東京都新宿区西新宿1-24-2

☎ 03-3340-0514 / Fax.03-3340-2440

URL <http://www.kogakuin.ac.jp/events/>

## 同窓生を訪ねて

# 世界の台所アラカルト

宮崎玲子(宮崎建築設計事務所)

祖先が火を制御して以来、台所の発達は環境に対処した火の扱いの向上である。台所をより便利にと願う気持から、常に改善が重ねられ、いつの時代も最新文明の導入口であった。

現在、世界的傾向として欧風化が好まれているが、一見画一的に見ても、ディテールには各地域の伝統が多分に活かされている。台所には伝統を残したい気持ちが最も強く働き、世界の人々の顔や言葉、衣服や家の形が違ように、環境に合わせて発達した地域性、民族性が染み込んでいるからである。

## 北の国と南の国

ここで、近代化のペールを剥いでみると、各地域の台所の根底が明らかになる。調理に欠かせない鍋と火の関係は特に顕著に表れ、グローバルに収集した伝統的な火の使い方を地図に示すと、北緯40°辺りで二種類に分かれる[右図]。

地球の軸の微少な傾きは四季をもたらした。両極近くでは、夏冬の可照時間の差が極端に大きく、全体に低気温である。赤道周辺では1年中昼夜の時間差が少なく概して高気温である。気象は人々の暮らしに最も大きな影響を与えた。北緯40°で北の国、南の国に分けると、鍋の使い方以外に南北でさまざまな違いを見せていている。

古代文明の幕開けは南の国、火で自然を克服し、近代文明が早期に進んだ北の国、火を調理道具として使った南。また水がさほど切実でない北と、汚れはすべて水で洗い流す南などなど住まい方から生活の信条まで、相反する点が挙げられる。南緯40°以南も北と同様な気候であるが、人の住む陸地が微少なので、ここではネグレクトする。



■宮崎玲子(みやざき・れいこ)

1962年●工学院大学建築学科卒業

(十代田研究室)

(出身校:東京女子大学数学科中退)

構造出身なので卒業後は宮崎建築設計事務所で構造に従事、休暇として出かけた国内外の収集資料を基に世界の台所研究にのめり込む。写真展、新聞連載をまとめて『世界の台所博物館』を出版(1987年/柏書房)。さまざまな国の根底にある姿を1/10のミニチュアで分かりやすく表現し、日本各地で展示、作品の写真で構成した『みるずかん世界の台所』を出版(1992年/福音館)【その他の出版】

『台所から覗く北の国南の国』(1992年/原書房)、『台所からみた世界の住まい』(1996年/彰国社)、共著『現代住居のパラダイム』(生活学会編/1997年/ドメス出版)、『民俗建築大事典』(2001年/柏書房)。雑誌掲載多数

1995年~2000年●千葉大学非常勤講師

(比較住居)

【連絡先】

〒880-0841 東京都新宿区北町18

☎ 03-3260-3653 / Fax. 03-3260-3651

E-mail: rmiyazaki@hi-ho.ne.jp

## 北の国の火と台所

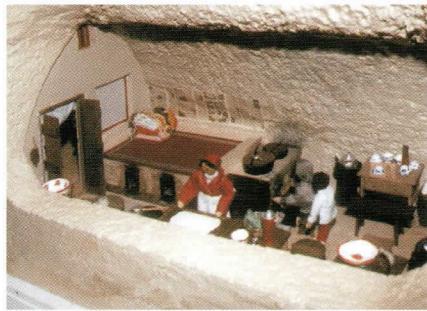
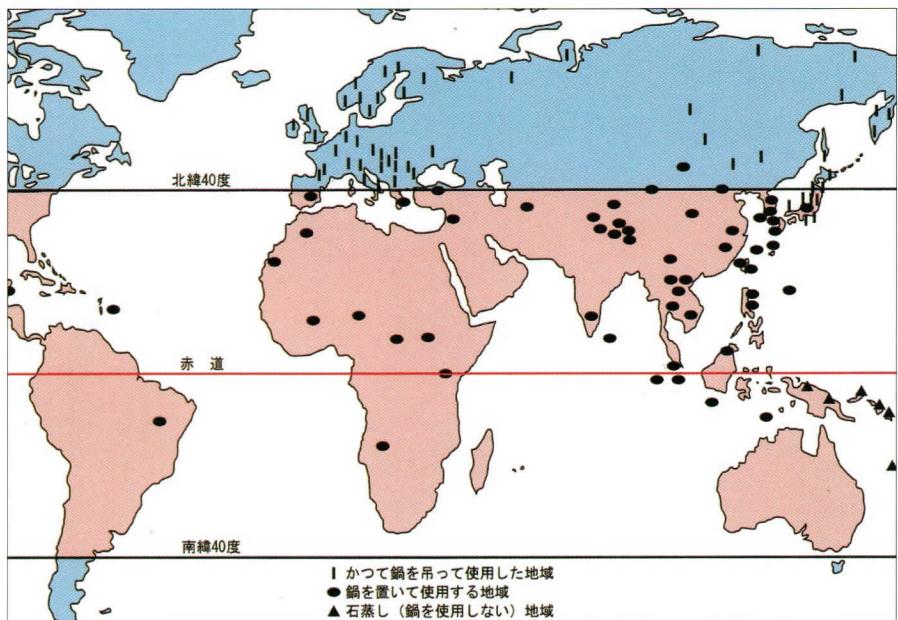
暗くて寒い長い冬を避けがたい北の国では、火を囲む人々の覆いが住いの始まりで、ファミリーの語源は血縁に関係なく、一つ屋根に住む集団とされる。火は常に焚かれ、調理のために火勢を妨げてはならない。鍋は梁から吊して、火加減は火との距離を変えて行った。調節に便利な鍋吊り具(通称:自在鉤)は、洋の東西を問わず世界中の北の国で使われている。

部屋の中央に置いた地炉は、建物の発達とともに壁際に移動し、煙道も発達して熱い煙も利用した。暖炉の自在鉤に鍋を吊す光景は、近代化直前までのヨーロッパの典型的台所である。自在鉤は台所の象徴であった。中世までの庶民の住いは、大きな建物でも家畜舎、倉庫、農機具置き場などで占められ、火のある部屋一室のみが普通だった。キッチンは火のある部屋全体を指し、寝室や客間が独立しても家族の中心であることに変わりはない。因みにダイニングルームは来客のためにあって、女・子どもは座らなかった

寒さを凌ぐために火は大きく焚かれ、一つの火にいくつもの鍋を使った。18世紀頃から家庭にも鉄の使用が広まり、また照明器具の発達も相俟って、裸火は鉄板で覆われ、ついにオーブンや湯沸し機能をコンパクトにまとめた箱形となって、自在鉤が消え始める。小型化した炉は駆体も石からレンガ、鉄板へ、燃料も身近な薪、泥炭などから、ガス、電気などに替わって、今日に至っている。北の国の先進国では、かつて鍋を吊って使っていたのである。

北の国では現在も、調理の火を暖房兼用とする気持が強い。キッチンは火のある部屋を指し、現在も調理して家族が食事をする場所である。因みにダイニング

■伝統的な鍋の使い方の分布



■東京の暮らし——1930年代の中級サリマンの家。



■特殊な台所——ライビに住むアメリカ平原インディアン(200年以上前)。鍋を使わないで調理。皮袋などに水を入れて、焼いた石を投じて煮る。



ルームは来客時に使い、女子どもは座ることすらしなかった。

## 南の国の火と台所

赤道に近付くほど、生活に明かりはいらない。また高地以外では暖房も使わない。火は鍋の下にだけあればよく、やたらにはみ出さない方が快適である。鍋は火が燃え易い高さの三個の石、鉄の三脚(カナワ・ゴトク)などの台に置いた。地域によっては鍋の大半を覆うカマドも発達した(中国から朝鮮半島および日本など)。また、可動小型カマド(コンロなど)も好んで使われる。火を焚く時間が短いので煙も少く、南の国の住まいには一般に煙突がない。

全体に台所の設備は簡素で場所を選ばない。暑い国では屋外でもよく、雨が多い国では屋内に取り込む。南の国は概して文化の発達が緩やかで、現在も三つ石やカナワが活躍している。火から離れた方が快適なので、台所は作業場として考えられ、呼び名はカマドを意味する言葉が多い。

## 北と南の食事の違い

北の国では狩猟採集が主だったので、食事は肉に穀類を添える形を基本とし、現在も変わらない。男が狩りで獲物を獲得し、分配権をもつた。その名残で夫が財布を握る。厳しい気候下では屢々飢餓に見舞われるため、食糧の大部分を保存用に加工した。保存食には主にハム、ソーセージ、チーズ、ビン詰めにした野菜や果物の水煮、砂糖煮などで、常にストック量を調節しながら、日に1~2回は保存食だけの火を使わない食事が習慣となっている。日に一回は調理した食事を家族揃って摂る。体を維持する前者、心を養う後者、は今も変わらない。

吊った鍋では粘りのない麦の粥や、煮込みが適していた。保存し難い内臓や堅い豆などを深鍋でじっくり煮込むシチューは、現在もヨーロッパの家庭の味である。煮込みには深鍋が向き、多口のクッキングストーブ(日本でいうレンジ)にいくつもの鍋や湯沸かしを同時に使う。

# 同窓生を訪ねて

北の国から



■ドイツ・ブランケン地方——古い家の炉に鉄のストーブを置く。約100年ほど前の暮らし(昔は炉に自在鍵を使っていました)。



■イタリア・トスカーナ——炉を使い続ける老夫婦。夏季は暑いので炭の炉を使う(1980年代取材)。



■カナダ——イギリスから渡った開拓者たちは郷里と同じような炉をつくった。200年ほど前の農家。



■イギリス——200年ほど前の小さな家。炉の自在鍵に鍋をかける。シンデレラが寝たカマドはもっと広く、カマドは庶民の寝床だった。



■日本・富山県五箇山——50年ほど前までの暮らし。いろいろにかけた鍋で全ての食事をつくる。

高温の南の国は概して農作物も豊富で、自然からの食糧も求め易く、主食の穀物の保存は容易である。女性が農耕を行って補助に男が狩猟採集を行うケースが多く、権利は男女同等、あるいは女権上位も見られる。食事は穀類を主に少量の味濃い副食を添える。食物保存の必要は少なく、発酵食品などは嗜好品の域であるが、高温下で腐敗や細菌汚染から身を守るために、食事ごとに調理する。頻度が高いので強火で手早く行う。熱の廻り易い球形や平たい鍋を用い、油を使って高温で仕上げる。火は調理人一人に一個の火があればよい。火は調理の折のみ必要とするため、火の管理も煩雑になって、火を神聖し、火伏せの神を祀るなどの信仰が芽生えた。食種の禁忌、祭事の断食、他人の入室や、生理時女



■インド南部——タシール人の台所は神聖で必ず履物を脱ぐ(1980年代取材)。

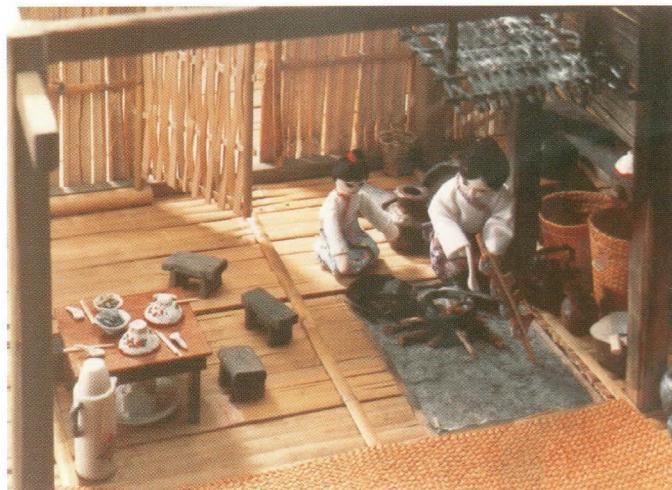
# 同窓生を訪ねて



■ネパール——家のてっぺんが台所(1990年代取材)



■韓国——オンドルに直結したカマド。台所の床をGLより下げ、居室床を上げる。カマドの煙が床を暖める。100年ほど前の農家。



■中国南部雲南省ダイ族——高床の2階床に炉を切って使う(1980年代取材)



性のタッチを拒否するなど、食空間と信仰の関連が深い。北の食空間の機能的発達に比べて、南では精神性の深さを強く感じる。

## 北と南の水

北の国の流しはごく小さく、無い場合もあった。低気温では最近の汚染もなく、土も乾くと落ちやすいので洗う回数は少なかった。

北部ほどこの傾向が強く、南下するに従って、流しが大きくなる。寒冷地の流しは、水の捨て場だった。

汚れは全て水に流す南では、台所でも大量に使うが、手元で簡単に使える地域ばかりではなく、水を得るために過酷な労働に耐えて暮らす人々も多い。台所には水瓶を置く。

## 日本の台所

日本人の多くは台所を人に見られたくないという。日本は、ほとんどが北緯40°以南にあって、南に属する。三度の食事全てが作りたてを原則とし、炊きたてのご飯に熱い味噌汁は庶民の食事の典型であった。全体に南系の食習慣であるが、冒頭の図に見られるように、鍋吊り分布が南に寄っているのは、太古には本州の半分が北の島であったからとの説もある。

季節感を重んじ、また新しい異国文化を好むため、食器や調理器具が複雑化している。また高湿度下で、木や竹の器具を吊して干した習慣は、器具が金属や樹脂になっても変わらない。どれもが片付けてもすっきりしない原因と思われる。直輸入の厨房器具は美しくて魅力的であるが、南型人間には相応しくない点も多い。まず洗うことが大好きなのに流しが小さい。四口レンジをフル活用しているケースは少なく、電気より一瞬にして最大火力が得られるガスの方が使いやすい。暖房兼用のオーブンは、高温多湿のわが国の伝統的調理法にはなかったので、無用の長物化している場合も多い。

私たちの台所は作業場で、火の器具が簡素でも、大きな流しと膨大な収納があれば満足かと思える。



■シリヤ・ベドゥイン——三ツ石で調理する。移動の際には石を置いて行く。現代まで続いている。

社寺建築に独自の道を切り拓いた

## 小林福太郎

[こばやし・ふくたろう]



♪足利来るなら織姫様の赤いお宮を目じるしに、カラリコトントン、カラリコトン、足利絵の街・機の街。

1959年(昭和34年)に発表された「足利音頭」の一節である。ここに歌われている“織姫様の赤いお宮”とは「織姫神社」のことで、まさに詞の通りに朱塗りも鮮やかな堂宇である。

この「織姫神社」を設計した人こそ、わが工学院大学建築系学科の“輝かしき先輩たち”的一人、小林福太郎であった。

### 1 首席で卒業すれば、名門官庁に入省できるのだ

小林福太郎——1882年(明治15年)、東京市神田区橋本町に生まれた。生家は建築業を営んでいた。福太郎は、長男であった。

で、早速、取材を開始する。まず、千代田区役所に電話をして、東京市神田区橋本町とは、現在のどこかを訊ねる。東京都千代田区東神田1丁目～3丁目とのこと。次は、104だ。東神田1丁目～3丁目に住む“小林さん”を調べてもらう。「お一人です」だって。こんなに簡単に遺族ないし親戚筋に巡り合えていいのでしょうか。

期待に胸おののかせつつ「03-38……」する。ご婦人が出られた。声の様子からして、高齢の方である。小林福太郎が急接近してきた予感があった。しかし、「うちは、その方とは何の関係もありません」の返答であった。福太郎が、眼の前から消えた。やはり、取材とはそんなに甘いものではなかった。でも、このくらいで挫けてはいられない。——この不屈の根性が、ついには福太郎のご遺族に引き合わせてくれることになるのである。

福太郎は1899年(明治32年)、工手学校造家学科を卒業し、内務省に入省する。この内務省というのが、とてつもない役所なのであった1873年(明治6年)、かの大久保利道により創設され、当時“政策は大蔵省、政府は内務省”といわれて絶大なる権力を誇っていた。現在の総務省、国土交通省、厚生労働省、警察庁を統合した行政機構といえば、どのくらい巨大な力を持っていたか想像いただけると思う。その“怪物”故に、1947年(昭和22年)、アメリカ占領軍によって解体させられるのである。

失礼だけれども、工手学校出身の福太郎が、よくこの霞ヶ関に君臨した名門官庁に入省できたものである。

梅檀は二葉より香ばし。今、小林福太郎君の人となりを見るに、これ亦其例にもれざるの人たりしやの感いと深し。君初めて築地の工校に学ぶや。当時、同所に学べる人々は玉石混淆、長幼付選、實に雜然たるの状態なりき。而して君の如きは最も年少の一人たりしにも係らず其学識、技能に於いては遙かに年長者を凌ぐの概ありき。纏て首席を以て業を卒へ、建築界に其身を投するに至り……。

これは1943年(昭和18年)に発行された『小林福太郎氏遺作集』の序文である。書いているのは、大沢三之助。辰野金吾の直弟子であり、東京芸術大学の最初の建築学科教授である。わが母校にも関係するのだが、それは昭和に入ってからのことである。

ことである。ちなみに福太郎の在学中の教務主理には、片山東熊、辰野金吾、妻木頼黄がいた。

本当に、失礼しました。福太郎は首席で卒業していたのだ。在校生諸君、頑張れよ！。首席で卒業すれば“超一流官庁・超一流企業”に就職できるのだ。というわけで、福太郎は内務省社寺局・古社寺保存会に配属となる。主な仕事は、特別保護建造物の実地調査であった。

ここに『内務省人事総覧』なる全3巻の大資料がある。設置から解体までの70年間の全人事を網羅したものである。しかし、『総覧』のどこにも、小林福太郎の名前はない。これまた失礼だけれども、工手学校出身というノン・キャリア故の待遇かと思いもしたが、『総覧』はどうも“職員録”ではないのだ。古社寺保存会の欄には、会長、幹事、委員の名前しかない。この布陣が、凄い！

たとえば、福太郎が退省する1908年（明治41年）には、委員として妻木頼黄、伊東忠太、関野貞、木子清敬、前田健次郎、そして高村光雲、岡倉覚三（天心）などが並んでいる。

だが、『総覧』に名前など載らなくとも、福太郎は首席に相応しく、エリート・コースをひた走る。1908年（明治41年）、宮内省内匠寮技手に任じられる。宮内省は、仇や疎かな身分では就職なんてできないところである。その宮内省で、福太郎は、日本趣味を基調とする建築の設計製図を担当する。内務省で貴重な歴史的建造物に直に触れてきた9年間は、後の福太郎の建築界での特異な位置の基礎を固めるのだが、宮内省での17年間は実施の設計によりその基礎に骨格を築いていったといえる。

この時代の主な担当作品として、「福岡県官幣中社・光雲神社本殿・中門・拝殿」（1909年）、「同社・風浪神社拝殿・総門・透屏」（1910年）、「同社・太宰府神社樓門・回廊・東西門」（1914年）などがある。

風変わりな仕事として、1912年（大正元年）と1914年（大正3年）の両御大喪に際しては大喪使書記を拝命、また1915年（大正4年）の御大礼の際は大礼使書記を拝命している。さらに、1913年（大正2年）には新造御料車内部装飾設計の嘱託を受け、両陛下御同乗車賢所奉安御車を担当している。

1919年（大正8年）、日光廟大修理工事主任技師として彼の地に赴任する。福太郎と栃木県の深き縁の芽はこの時に萌えたと思われる。日光廟大修理の傍ら、「日光二荒山神社社殿修理」、「宇都宮二荒山神社社殿修理」、栃木県唐沢山神社石造神橋造営」、「栃木県村檜神社本殿修理」などの監督技師を嘱託させられている。

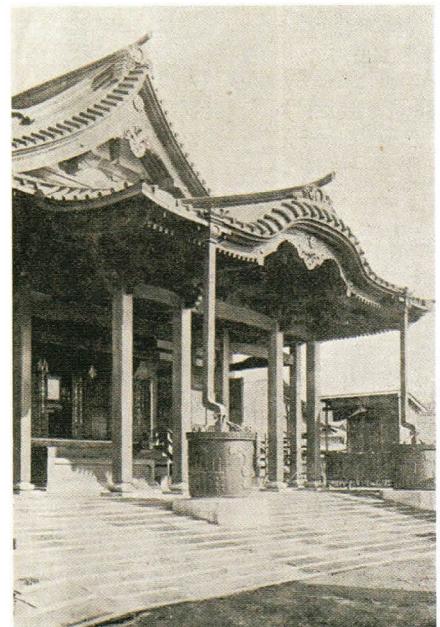
そして1925年（大正14年）、社寺建築を扱う事務所を開設する。ここに小林福太郎をして、社寺——神社仏閣を専門とする建築事務所の嚆矢とする。

## 2 あなたの町にある社寺を、いっぱい設計している

小林福太郎の独立第一作——すなわち事実上の処女作は「深川不動堂」（1925年）である。林立する角柱と唐破風の屋根が織りなす風情が何とも粹で、土地柄を見事に捉えた佳品である。

福太郎の代表作の一つに「浅草寺・觀音堂昭和大修理」（1933年）がある。「觀音堂」、つまり「本堂」である。あの誰でもが知っている「浅草寺」を、私たちの先輩が設計監理しているというのだから嬉しいじゃありませんか。

「本堂」は、関東大震災で焼失は免れたものの、堂宇の傾斜および損傷がひどく、



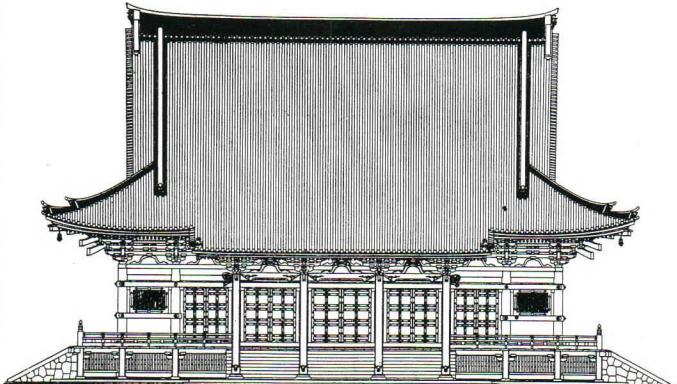
■深川不動堂



■浅草寺・觀音堂（本堂）の鬼瓦



■浅草寺・觀音堂（本堂）



大修理を余儀なくされた。この国宝建築の歴史的大仕事を、福太郎がどういう経緯で請負ったのかは詳らかにしないが、とにかく福太郎の手にかかることになったのである。

その損傷の状態は、建物大半の解体を行ひて、施工する設計を編成し、昭和4年4月、其工を起こし、上屋足代の建設より始めて、建物解体に及び、構架部材には一々適當なる補強を施し、再用に耐えざると認めたるものは新材を以て取替へ、構造の不完全なるを改善し、傾斜歪曲を正して、順次其形態を複し、昭和7年2月を以て、上棟の式典を挙行せり。

と、福太郎は報告している。歴史関係者のみならず一般の人々が注目と期待の眼を注ぐなかで、福太郎のプレッシャーはいかばかりであったろう。

この福太郎、畢生の大仕事「浅草寺・觀音堂昭和大修理」は、第二次世界大戦により灰燼と帰した。「深川不動堂」も東京大空襲で瓦解した。全く、戦争とは残酷なものだ。地震は天災だが、戦争は人災だ。アフガニスタン紛争で、バーミアン石仏が無惨に破壊されていくのを見て悲しい思いをしたのは記憶に新しい。世界中の皆さん、戦争は止めましょう。そして、建造物は大事にしましょう。

「浅草寺・觀音堂」は1958年（昭和33年）に再建され現在に至っているが、その姿は、福太郎の「昭和大修理」の面影を色濃くとどめている。



福太郎の作品で、現存しているものはないのか？

——ご案内しましょう。

まず、冒頭に紹介した「織姫神社」（1937年）がある。JR 足利駅より北西に歩くこと30分、畳々する山の中腹に建立されている。新緑の海のなかで、本殿の朱が鮮やかに映えていた。朱塗りのお宮さんというと、どんなに派手かと思われそうだが、意匠、木組みなどストイックといえるほどに抑えている。

ストイックといえば、「織姫神社」をさらに北西に下った所に「長林寺」がある。実は、竣工はこちらのほうが10年早い1927年（昭和2年）。福太郎、最初の鉄筋コンクリート造作品である。神社と寺院では表現手法が異なるのであろうが、「長林寺」は「織姫神社」よりさらに軒を低く抑え、装飾も抑え、そのファサードは哲学的な様相を漂わせている。

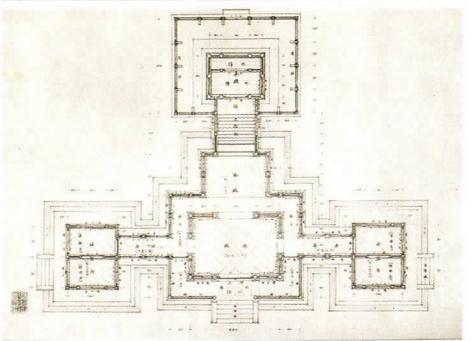
内部は様変わりしたが「華厳滝エレベータ昇降場」（1929年）も残っている。昇降場という公共施設を、神社仏閣の建築家に頼むほうもほうだが、引き受けた福



■大鳥居のスケッチ

社寺建築に独自の道を切り拓いた

# 小林福太郎



■織姫神社

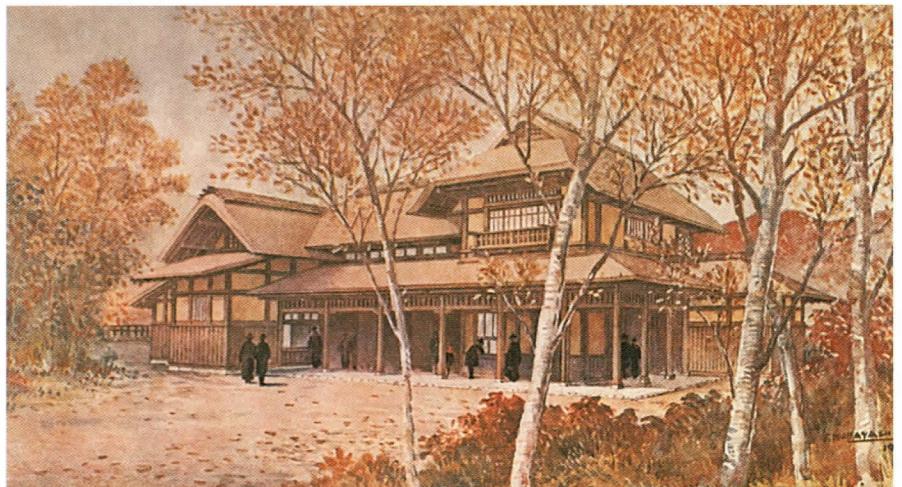
太郎も福太郎である。このあたりの福太郎の好奇心の旺盛さ、仕事に対するポジティブな姿勢は、実にカッコいい。……そういえば福太郎は、「日本万国大博覧会会場配置設計図案」(1911年)を始めにコンペには果敢に挑戦し4度の当選を得ているし、「50銭銀貨図案」(1917年)にも応募し当選している。

「昇降場」は民家風でもあり、数寄屋風でもあり、個人的な好みを言っては申し訳ないけれども、筆者はこの手のカオス模様の“近代和風”が大好きなのである。

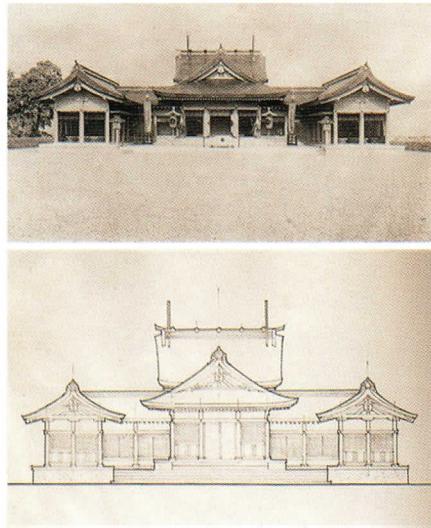
筆者の好みなどどうでもよく、当の福太郎は、自作のなかでどれが最も好きだったのだろう。

「長林寺」です——と答えてくれたのは、小林謙一さん。福太郎のご子息である。当年92歳。東京芸術大学建築学科を卒業され、福太郎の跡を継いで、社寺建築の設計に携わってこられた。その謙一さんのご子息、つまり福太郎のお孫さんの小林良太さんも、こちらは現役で社寺建築の設計事務所を構えておられる。ということは、福太郎の父親も建築業を営んでいたから、小林家は4代に渡る建築業ということになる。初代がどの分野の建築業であったのか判らないのだけれども、少なくとも3代に継承されている社寺建築の設計業というのは間違いない。いかに福太郎の存在が大きかったかの証である。

……と何気なく記してはいるが、この福太郎のご遺族である謙一さん・良



■華厳滝エレベータ昇降場



■招魂社（山形県／1932年）

太さんの東京都世田谷区のお宅まで行き着くには、それはそれは語るも涙の糸余曲折・波乱万丈があったのです。しかし、主役は筆者ではない。残念だが、その件は省略にするしかない。

### 3 抑制された美学だと…こちとら生つ粋の江戸っ子だよ

『小林福太郎氏遺作集』に、謙一さんが次のように寄せている。

父は仕事をするのに随分熱中した。朝から夜半1時、2時までもするようなことも往々あった。けれど一度考へが躊躇くと、良い考へが出るまで1月近くも何も手がつかないようなことも度々であった。所謂コリ性なのである。こんな工合だったから、設計も遅れ勝ちで、催促を受けることも多かった。従ってお役所の勤めは性格に合はなかったようである。

内務省に9年、宮内省に17年間。仕事にも身分にも恵まれていたように思うのだが、性格的には本当にどうだったのだろう。

深川の不動堂の様な方が父の性格に合って居た様に思ふ。幼い時に聞いた神田祭の囃子は、頭の何処かにズッとリズムを打って居たのかも知れない。

とも謙一さんは書いている。

福太郎の作品に共通する抑制された……それは地味というのではない、質素とも違う独特の美学は、謙一さんのおっしゃるように、東京・神田に生まれ育ったという生つ粋の江戸っ子の血がつくらせたのかもしれない。さらに筆者の個人的な分析を許していただけるなら、やはり建築を技術だけでなく理論としても学んだからだろう。つまり、福太郎の神社や堂宇は、建築家の作品になっているのだ。宗派によりいろいろと戒律があり、建築にも厳しい決めごとが求められているのかと思ったら、「そんなことはありません」と良太さん。福太郎は、自分の造型を自由に創作していたのだ。



■別格官幣社佐嘉神社（佐賀県／1929年）



# 社寺建築に独自の道を切り拓いた 小林福太郎



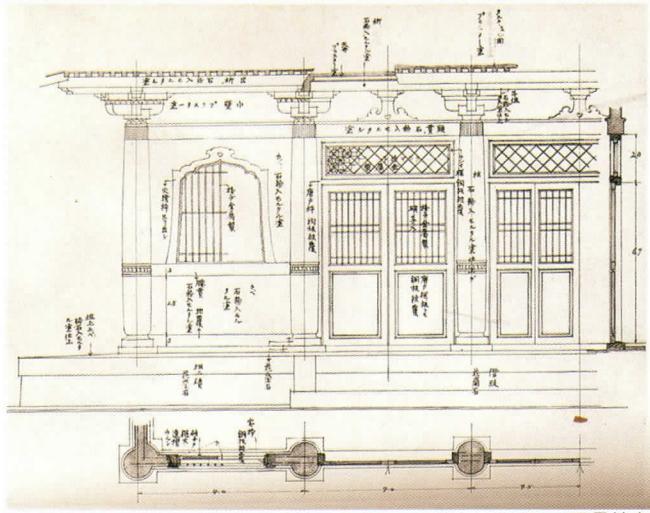
いたずら 小林君は徒に過去に捉はれず、独特の創意を加へて、日本建築設計ならびに監督に従事せられた日本建築界の一偉才であった。幾多の懸賞設計に応募しては毎時優賞を授与せられ、就中日本建築設計に関しては、優秀なる素質と弛ゆまざる研鑽努力、卓越せる技能などを以て、多数の建築物に其手腕を揮ひ、千歳の下と嘆賞するに値するもの歟からず、就中織姫神社、長林寺、華厳滝昇降器館其の他に鉄筋コンクリート構法を採用し、巧に様式的特徴を躍動せしめ構造的美観を増加せしめたるは吾人の甚だ喜びと為すものである。

これは、やはり『遺作集』に載っている小野武雄の言葉である。

それにしても首席で卒業したばかりに、同窓生とは違う道を歩むことになってしまった福太郎。一般建築に対しては、どんな想いを抱いていたのだろうか。同世代の建築家たちが発表してマスコミを賑わす新しい近代建築を目の当たりにして、焦燥みたいなものはなかったのだろうか。「作品目録」には住宅や店舗が8件ほど記載されているが、写真がない。一体、どんな形態をしていたのだろうか。とても気になるところである。

1938年(昭和13年)3月26日、小林福太郎は逝去する。享年57歳であった。世に送った神社73件、寺院11件。倭ノ国でありながら西洋建築を範とした近代建築を主流とする日本建築家山脈に、小林福太郎の名前は刻まれていない。しかし、他に追随を許さない社寺建築の独自の道を開拓した福太郎の業績は日本建築史上に永遠に刻まれることだろう。

(レポート:類洲環)



■長林寺

## ◆引用文献・参考文献

- ①『小林福太郎氏遺作集』(洪洋社／1943年)
- ②『日本建築士:第23巻・第2号』(日本建築士会／1938年)
- ③『日本建築士:第12巻・第6号』(日本建築士会／1933年)
- ④『内務省人事総覧』(日本図書センター／1990年)
- ⑤『内務省——名門官庁はなぜ解体されたか』(百瀬孝／PHP新書／2001年)
- ⑥『図面でみる都市建築の昭和』(鈴木博之・初田亨／柏書房／1998年)
- ⑦『ふるさとの文化遺産:郷土資料事典』(栃木県)(人文社／1997年)

## 中国あれこれ



**石川晴雄**

(天津日中大学院・東京事務所・事務局長)

### ■はじめに

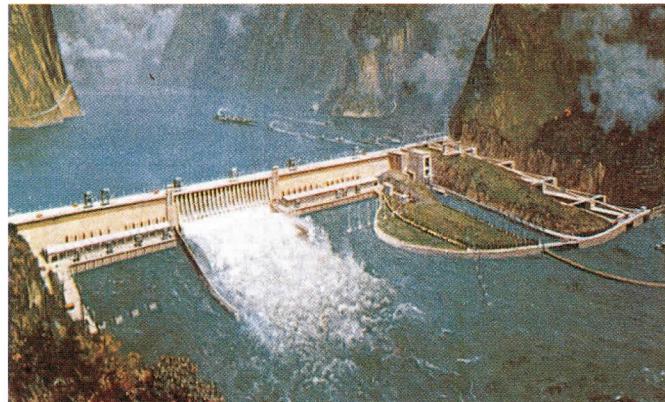
私が中国に関わったのは、1997年（平成9年）9月である。当時、勤務先の財団法人電力中央研究所から財団法人ダム水源地センターに出向していた。私は予てから中国詩歌の杜甫、李白の世界を見てみたいと思っていた。機会は意外に早く訪れ、三峡ダム調査ということで中国に出掛けた。

このことが切っ掛けとなり、中国アルカリ土壌改良プロジェクト（5年間）、そして現在、天津日中大学院に関係し、中国に縁ができた。私は本来、ダム・河川の水理、建築が専門であるが、このところ農業、教育に関係し、雑多に通している。

ここでは、参考に中国三峡ダム、アルカリ土壌改良、天津日中大学院についてご紹介する。

### ①三峡ダム

中国の国家的プロジェクトであり、現在2009年完成を目指し、長江中流部三斗坪に建設中である。治水、発電、航路を目的とした三峡ダムは、ダム高181m、堤頂長2,309m、総貯水量393億m<sup>3</sup>、発電出力は1,820万Kwで世界一、移住者117万人、工期17年（黒部ダムは、高さ186m、堤頂長492m、貯水容量2億m<sup>3</sup>、出力34万Kw）で、その規模の大きさに驚かされる。とにかく、わが国のダムと比較すると桁違いである。昨年、三峡ダムを私たちと一緒に視察された工学院大学建築学科の望月大介教授は、本格的土木



工事を見て感動されていた。

三峡ダムについては、賛否両論あったが、現実に建設中であり、中国側も当然環境問題に配慮し、環境に対してのフォローもきちんと実施すると関係者は言っている。三つの峡からなる三峡は、三国志の由緒ある地で、その風景は天下一品で、ダムが完成すると水位が上昇するので、原風景を見ておこうと観光客が多数訪れている。

### ②中国アルカリ土壌の改良

中国では、土壌劣化が激しく、毎年2,406m<sup>2</sup>（神奈川県の面積と同程度）が砂漠化している。特に塩類土壌の一種であるアルカリ土壌は、雨が降るとドロドロとなり、降らないとカチンカチンに固くなり、始末に困り放置されたままになっている。

この土壌に火力発電所など脱硫装置から副産物として排出される脱硫石膏を用いて、改良できるのではないかということで、1995年（平成7年）研究をスタートさせ、本年3月に終了した。

現地実験は瀋陽市郊外の康平県、面積1ha規模で行なった。その結果、アルカリ土壌に脱硫石膏をわずか0.5～1%混入することで、トウモロコシの正常な生育を得た。しかも1回混入すると脱硫石膏の効果は5年以上継承することもわかった。このことが中国火力発電所脱硫装置設置のインセンティブになり、食糧増産の一助になれば、まさに一石二鳥となる。

私たち関係者は、この方法が中国農民に普及することを願っている。なお、本研究指導は東大・定方正毅、元東大・松本聰教授（現秋田県立大学）に依った。



### ③天津日中大学院

元毎日新聞論説委員長の森田明彦氏が、10数年前から構想し、本年4月にようやく実現した。日中の学生各15人ずつが、同じ部屋に住み、行動を共にし理解し合い、日中両

# 同窓生からの便り



国の懸け橋となる人材育成を目指す。大学院は、環境、経営管理コースを設置する。

大学院は、日本の民間団体と中国の国立大学(天津科学技術大学、孫学長(43歳)、学生数12,000人)で共同運営する。本年9月12日、開校式を迎えた。中国国家環境保護局長(日本では大臣)の解振華氏、在日中国大使館も本大学院の将来に期待を寄せている。

なお、資金は日本の民間支援で賄う。——皆様のご支援・ご協力をお願いする次第です。

## ■おわりに

現在、中国の発展は著しい。しかし、中国とわが国は一花帶水と言われて久しい。この関係を本物の信頼関係に高めるには、日中ともにコミュニケーションを図り、お互いの理解が必要である。そのためには、まず身の回りのできることから社会貢献を実践することが大切である。

幸い工学院大学は、北京航空大学ならびに北京化工大学と国際協力している。この大学に行かれ中国に关心を持たれた方、天津日中大学院に進学されることを願います。

また、中国大都市は建設ブームです。皆様には中国に行かれ、ご自分の目で現地をご覧になり、肌で感じるのが中国理解の第一歩です。天津日中大学院に関心のある方、ぜひご参加下さい。

——ただし、ボランティアですが……。

## ■石川晴雄(いしかわ・はるお)

1964年●工学院大学建築学科卒業(大庭研究室)

現在●天津日中大学院・東京事務所・事務局長

### 【住所】

〒113-0033 東京都文京区本郷5-25-18 メゾン鈴博501

☎ & Fax. 03-3813-8314

E-mail : tenshin@sea.plala.or.jp

## 北国の、おもしろおかしい行政物語



星光彦  
(北海道標茶町役場)

1970年(昭和45年)荻原研究室を卒業し、32年が過ぎました。東京で設計事務に7年、故郷に帰り請負で6年、その後、行政に入り19年となりました。

恩師の東先生から「北国の、おもしろおかしい行政物語」とのリクエストがありますので、わが町と私の仕事について紹介します。



標茶町は、北海道東部の内陸に位置し、1,100ha(東京都の1/2)の面積と所管する町道の延長が730kmという広さの中に、1万弱の人口、酪農業を基幹産業にした町です。地方の町が売物とする豊な自然に恵まれ、牧場と湿原(釧路湿原国立公園)など環境や体験型の新しい観光として注目されているところです。

また冬期間には、わが家の前にある児童公園に展示保存

していたSLを復元した「SL冬の湿原号」が運行され、冬の魅力をたかめています。



役場の建設課の仕事は道路・土木・都市計画・建築と広範囲ですが、主に建築について記しますと、営繕・公住の建築係と行政の住宅指導係の2係で私を含めた3人で担当しています。営繕関係は入った当時かなり忙しく、その守備範囲も町の建築物の新築・改修など全部でした。最近は、量も減り委託も多くなっていますから係には製図版も無い状態です。公営住宅の建設は建替団地建設が中心となっています。

集合住宅は学生時代には興味のわからなかった分野ですが、やってみるといろいろな課題や奥の深いところがあり、結構力が入りました。最近は財政難を理由に計画の繰下げなど厳しい状況が続きますが、公住自体のハイスペック化と需要側のニーズとの関係、コストと家賃の関係、民間活用など転換期にあると思われます。

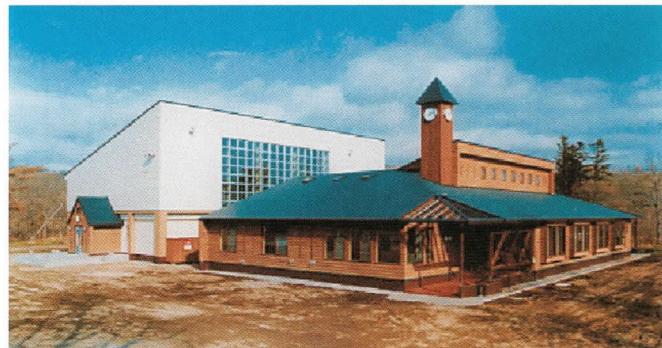


団地計画やまちづくりの指針とすべく、平成6年度から「HOPE計画」に取り組みました。「HOPE計画」を住宅や文教施設など町施設建設の基準として取り組み、公住団地では住宅局長賞も頂きました。また、公共施設のみでなく民間にも計画を反映したいと戸建て向け指針等を作成し普及を図っています。区画整理事業を活用し「戸建てHOPE団地」建設に着手しましたが、やはり昨今の経済状態では長い目での取り組みが必要なようです。



■町営住宅虹別公住・HOPE団地全景(平成12年度住宅局長賞)

# 同窓生から の便り



■沼幌小学校全景(釧路沖地震による災害建築)

この地で建築に關係して避けられない話に、寒さと地震対策があります。寒さでいうと、北海道の住宅には水道に不凍栓という水抜き栓が不可欠です。水道管が凍結し果ては破裂するからです。しかし、わが家では建てて20年水抜きはしたことがありません。そんな必要の無い家づくりが義務と思っていましたし、今の水準ではほとんどがそのレベルに達しています。高断熱・省エネの面でこの地の工務店は優秀です。

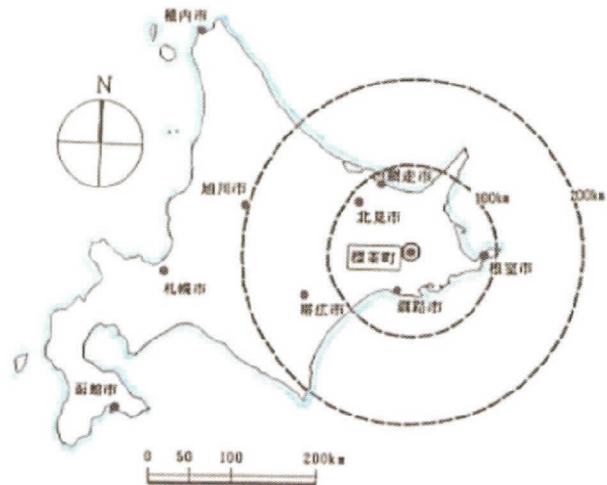


道東地方は地震の多い地域です。平成5年1月、6年10月と1年半の間に2回の大地震がありました。5年の釧路沖地震の際、町内の盛土流失による住宅倒壊が報道されました。この地震の時小学校を1校災害復旧で建設しております。実は建替え計画を立て設計にかかっていた学校でした。現校舎がPC造ということで前年の夏に危険度鑑定を実施したのですが、そのときの北大の先生が横田先生の北大時代の教え子ということで結構盛り上りました。そのときに、大きな地震がきたら危ないと指摘があり、地震調査の結果柱・梁仕口の破壊が見つかりそのとおりとなりました。

その後、含めて4校の建替えを実施しましたが「HOPE計画」に基づき、木造にこだわって計画しております。1年半後の東方沖地震は「50年に一度が来たばかりなのに冗談だろ」という気持ちでしたが、方向が90度ずれたため違う被害がきました。二つの地震とも建物被害は結構ありましたが、人的損害が少なかったのは幸いでした。



北海道では分権の時代へ向け、都市計画を持つ町は限定特定行政庁への移行を進めていたこともあり、平成11年度から限定特定行政庁として4号建築物に限り確認事務を取り扱っています。おそらく全国でも最も件数の少ないクラスだと思います。ある意味では目が届くというか、安全安心推進計画(検査率アップ推進)13年度は100%達成となりま



したが、経済環境悪化は新築申請件数減の傾向となっています。また、人的育成も大きな課題であり、限特向けの限定主事制度をなどと勝手に思っています。



地方では今、財政問題や合併問題など多くの課題を抱えています。今までと違う大胆な見直しを要求されているといえます。変えるべきは変え、守るべきは守りというその判断力を磨かなければなりません。「文明は北をめざす」という言葉を励みに、さらに「文明を文化に」育むよう、頑張っていかねばと思っています。



■明治18年建設の標茶町郷土館とプチホテル・ビルカトウロ

## ■星 光彦 (ほし・みつひこ)

1970年●工学院大学建築学科卒業 (荻原研究室・東先生)

(北海道立標茶高校出身)

玲設計事務所 (東京)

1977年●星工務店 (北海道・標茶町)

1983年●北海道・標茶町役場

現在●標茶町・経済部建設課長補佐

### 【住所】

〈勤〉〒088-2312 北海道川上郡標茶町川上4丁目2番地

☎ 01548-5-2111 (内線231)

Email:yakuba@town.shibecha.hokkaido.jp

〈自〉〒088-2303 北海道川上郡標茶町桜6丁目4番地

☎ 01548-5-1270 / Email:hoshi@sip.or.jp

## 都市再開発——日本と中国の違い



**野中耕太郎**

(大林組)

小泉内閣の目玉商品の一つである、規制緩和を大幅に盛り込んだ「都市再生法」が成立し、建設業界のみならず一般の人々からも経済の救世主となるか期待されている。

### ①都市再開発の現状

私は、入社以来、国内外の現場勤務が多く、現在は六本木六丁目再開発工事に従事している。2,000年5月の解体工事の始めから携わっているこのプロジェクトは、今、躯体工事が完了し、72万m<sup>2</sup>の延べ床面積に1日約4,000人の労働者が従事し、仕上げ工事の真っ盛りである。残り数ヶ月、来年3月にはアメリカの事務所KPF、JPI、コンラン、日本の槇事務所、入江三宅事務所の設計によるオフィス、住宅、美術館などの調和の取れた街が誕生する。

3年という短い工期で巨大プロジェクトは完成となるが、プロジェクト決定から工事着手までには長い年月を要した。

1,000世帯以上の居住者との権利交渉

環境アセス

建設反対住民との話し合い

所轄官庁との協議

再開発組合の立ち上げ……などなど

権利交渉が完了し居住者が転出した後の住宅には、関係者と称する人が居住を続け、その個別折衝は草の根的な血のにじむような努力の積み重ねであり、着工までに14年が費やされた。大企業でも栄枯盛衰が繰り返される年月である。東京の道路新設が進まないことや、成田空港新滑走路問題でもわかるように、このようなプロジェクトは官庁工事では到底できることではない。たとえできたとしても、30年も40年も要することが予想される。

### ②中国の都市再開発

1995年～1998年の約4年間、私は上海浦東地区高層事務所ビルの建設に従事し、その間、中国各地の都市再開発の現況をつぶさに見させてもらった。

当時は南の深川の改革開放が軌道にのり、続いて上海浦東地区の開発が始まったところであった。国の中央で再開発の地域決定がなされると代替住宅の建設に着手し、それが完成すると住民移転が開始され、移転が完了した所から解体工事が着工される。権利を主張したり、住み馴れた所からの移住を拒否する人も多く、スムーズに事が運ばないのは中国でも同ようだ。

私のプロジェクトでは、工事に反対する住民が現場に入り込み、杭打工事中の杭に抱き付き工事をストップさせられたことがあった。反対する人は中国でも多いが、土地が全て国有地であることと、国家の住民に対する権力が強いため、警察力を行使し計画どおり2年～3年で転出が完了する。

その後の建設工事は、昼夜連続の24時間作業のためほぼ日本と同じスピードで進む。条件の違いはあるにせよ、何十年経っても再開発用地の取得が実現しない日本とは相当の違いがあり、経済発展のスピードの違う原因にもなっている。



■上海(1997年)



# 同窓生からの便り

■六本木六丁目再開発工事



## ③開発スピードアップ対策

東京の道路計画や再開発では、地区住民に代替地を用意するのが大変である。計画地に隣接した場所に先行して高層の高級住宅を建てるとか、もっと便の良い所に高層住宅を用意するなど対策が必要である。条件闘争に出て、てこでも動かない人には国民全体の利益を重視し、今まで以上に強権を発動できる法律を整備すべきであると思う。

反対する近接住民に対する対策も同様であり、必要以上の条件を要求できないように、また極左や極右、質の悪い政治屋などの活動を法律でもっと制限する必要がある。そうすることで今回成立した「都市再生法」がより生かされるのではないかと思う。

## ④再開発、質の向上

現在、都内数箇所で再開発や大型プロジェクトが動いている。よくデザインされた品質の高いものばかりであるが、形が見えて来るにつれて何か物足りないような気がする。建物間のスペースが少なく、全体敷地計画があまり良くなないように思える。各建物所有者の要求を聞きすぎるのも理由の一つであろうか。いずれにせよトータルでデザインするシステムを作るべきである。

私はこれまで海外も含め14のプロジェクトに参加してきた。いろいろな国でたくさんの人々と出会い、難しい条件を皆で克服しながら竣工させ、大変な勉強をさせてもらうと同時に建物を建てるこの最高の喜びも味わってきた。その喜びは躯体が完了し、仕上げ工事が始まり、化粧が最終段階に近付くにつれ、次第に大きくなり竣工と一緒にクライマックスを迎える。しかしながら、デザインが悪いと作る感動もなく、竣工して建物を利用するにも喜びを与えることはできない。現在は坪単価の安い工事がほとんどで、設計に従事されている方々の苦労は大変だとは思うが、難しい条件のもとでも感動あるデザインをされることを期待している。

### ■野中耕太郎 (のなか・こうたろう)

1974年●工学院大学建築学科卒業(望月研究室)

(長崎県海星高校)

大林組入社／国内海外の建築現場14ヶ所を担当

現在●六本木六丁目再開発工事に従事

【住所】

〒812-0017 千葉県浦安市入船 6-8-803

☎ 047-351-0547

E-mail : k-onaka@o-net.obayashi.co.jp

# 地方建築家として生きる



**松下重雄**  
(みすず設計・主宰)

## ■学生時代の思い出

17年間の都会生活に終止符を打って信州飯田へ帰郷して早くも25年が経ちました。二部建築科で学んだ私は、波多江先生の助手をされていた鈴木達己先生にお世話になりました。5歳ほどしか違わない生徒の私が長髪にヒゲ面で先生の前で授業を受けると「お前がいるとやり難いからもう来なくていいよ……」と言われたものです。でも10歳以上年下の同級生たちと福島・山形まで集落のデザインサーヴェイについてもらったりキャラバンは今でも数少ない学生生活の懐かしい思い出です。

伊藤鄭爾先生が学長の時「卒業する気があるならいい加減にしなさい」と言われ、やっと決心して卒業設計を間に合わせました。確かに、磯崎新先生の富士見カントリークラブハウスを老人福祉センターに改造するという不埒なものでした。そうそう、製図で山下司先生の課題の時、日比谷公園にオール地中化でアンダーグラウンドの図書館を計画して「こんな馬鹿な計画をした奴がいる」と黒板に貼り出されたこともありますたけ……。その後、先生はポール・ルドルフの所へ行かれ、文句を言う間もありませんでした。

昼は設計事務所に勤めていて、現実的な仕事をしていましたから、夜の学校での製図課題は社会に抵抗するような、あるいは環境や景観を先取りしようとする傾向が強かったかも知れません。こうして劣等生の13年間という記録的な学生生活は終りました。

## ■「古さこそモダン」な民家再生の家づくり

帰郷してみると、たった20年にも満たない都会生活の間に、自然や農村景観の急激な変化は目を疑うほどでした。昆虫少年だったことのある私は、まずギフチョウという蝶の保護活動に着手し小学生からお年寄りまでの地域ぐるみの運動を根づかせました。次に、失われゆく農村景観の保全のため、集落センターづくりや民家の再生の仕事を通じ何気ない風景を次世代以後に継ぐことに真剣に取り組みま

した。「寒く、暗く、だだっ広いこんな古い家は住みづらい、ましてや嫁など来てくっつこない……」こうして信州の農山村にもプレファブや赤や黄色の輸入住宅が建ち並ぶことになります。これらを残すためには、設計者と住まい手に価値観の共有と強い意志が必要です。

そして、民家の再生はサステイナブルの代表格であり、地球規模の環境問題への貢献度では計り知れないものがあります。環境省の環境カウンセラーの資格を持つ私は、「私たち開発側にいる者が、保護側の視点を持った取組みの必要性を！」叫び続けてきました。今も、民家に限らず、「新築や豪邸ばかりが仕事ではない」とリニューアルによる都市の再生を訴え、実行しています。「古さこそモダン」はそんな活動のキャッチフレーズです。

## ■「伊那谷の森で家をつくる会」

緑の列島ネットワークや、近くの山の木で家をつくる運動が全国で活発な展開をしていますが、「伊那谷の森で家をつくる会」も、山の木を育てる人たち、伝統工法により家を建てる工務店や大工さん、建具屋さん、家具屋さんといったつくり手、設計者、そして、木の家に住みたい人のネットワークです。

木に限らず、土壁、石、障子や襖などの紙や畳といった全ての自然素材を活かした健康な家づくりにも“縁の下の力持ち”としての役割を果たしています。



■飯田市生涯学習センター

# 同窓生から の便り

■上高地ビザーセンター(写真:木田勝久)



## ■環境や省エネルギーへの提案

住宅設計の大半がこうした近くの山の木材をはじめとする自然素材を活用したもので、外国産材を使えば輸送中の石油エネルギーを大量消費し、CO<sub>2</sub>を大量発生させ地球温暖化などに悪影響を与えます。地域産の木材もできるだけムク材を使い、丸太の中央の良い所だけ(マグロのトロのような)を使うのではなく、柱や梁などの構造材から板や下地材、時には皮まで使い切り無駄をしないようにします。さらに、自然エネルギーとしての太陽熱利

用空気集熱式パッシブソーラーシステム(OMソーラー)を組合わせることで省エネルギー化に努めています。

これらは住宅ばかりでなく、公共施設にも提案し採用されるようになりました。環境省・上高地ビザーセンター(2001年10月完成)、同インフォメーションセンター(2003年完成予定)と、飯田市生涯学習センター(2001年3月完成)で、今後も普及するものと思われます。飯田市生涯学習センターは今年2月、建築環境・省エネルギー機構より第9回「環境・省エネルギー建築賞(理事長賞)」に選ばれる栄に浴しました。図らずも工大の吉田倬郎先生が審査員をなさつておられ心強い限りでした。この場をお借りして、お礼申

し上げる次第です。この施設は、パッシブなシステム導入と地域産材などのエコマテリアル使用の他に、平均寿命が30年に満たないといわれる公共施設のスクラップ&ビルドに歯止めをかけるためのデザインコンセプトに重点をおきました。それは、意識的にミスマッチなほど、モダンな表現の部分と民家などを想わせる伝統的な表現の部分を同居させ新旧の顔を持たせることにより、いつの時代にも若い世代からお年寄りまでが、世代を超えて地域の自慢として愛し、永く使い続けられる施設づくりを目指したものです。永続性「温故知新」こそ最大の環境への貢献であるはずですから……。

すでに還暦を過ぎた今、まだまだ建築という職能を通じて社会に貢献していきたいと思います。恥をさらしましたが、工学院大学の在学生諸君の一層の可能性に期待しています。お世話になった先生方、不良学生につき合ってくれたクラスメートにもお礼申し上げ、工大のますますのご発展を祈念申し上げます。



## ■松下重雄 (のなか・こうたろう)

1976年●工学院大学建築学科卒業

(波多江研究室／鈴木達己先生指導)

(長野県立飯田長姫高校建築科出身)

現在の役職●JIA(日本建築家協会)長野県地域会会長

長野県住宅審議会会長

環境省・環境カウンセラー

現住所 長野県飯田市時又299 ☎ 0265-26-9050

勤務先 みすゞ設計・主宰

長野県飯田市東中央通り5-15

☎ 0265-52-1638

Fax. 0265-52-2555

E-mail : misuzu@basil.ocn.ne.jp

## ローコストなSN減震基礎構法を 自宅兼事務所に採用



関谷真一  
(結設計室・主宰)

私は、工学院大学大学院を修了して、社寺や茶室などを含め、主に木造建築を設計する番匠設計に12年勤務し、木造の住宅や別荘などを数多く担当してきました。その後、独立し、現在の事務所では、軸組構法による木造住宅の設計を主体として活動しています。最近は、重度知的障害者のグループホームや高齢者の病院も手がけています。

住宅を設計するにあたり、国産の木材など自然素材を使い、自然の日照や通風、地熱利用などを行い、シンプルなデザインを心がけています。

地盤を含め構造を重視し、今回紹介する、SN減震基礎構法をはじめ、木材の収縮に追随できるスプリング入りの座金や込栓による補強、ラス下地材を斜め45度に張るなどさまざまな工夫をしています。

### ■ SN 減震基礎構法とは

2000年の夏に、私のかかわるNPO法人・新日本まちづくりハウジング協会の関係で、表面波(地震波)を利用して地盤調査を行う機械の製作販売と地盤調査を行うビックの佐藤氏から、減震基礎のアイデアをお聞きしました。佐藤氏は、ある住宅メーカーと共同で免震住宅を開発し実際に建てていました。

しかしながら、免震住宅の地震に対する性能は、高く評価できるのですが、コストがかかりすぎるため、多くの戸建住宅に使えない。もう少し単純な仕組でコストのかからない地震に強い住宅をつくれないだろうかと考えたものが、減震基礎でした。SN減震基礎構法のSは開発者である佐藤氏のS、Nは中心となって普及するNPO法人のNをあらわします。

住宅のベタ基礎の下にRC造の人工地盤をつくり、その間に摩擦を調整した塗料を塗った減震ユニットを數カ所入れて、中規模程度の地震では地盤といっしょに揺れるものの、強烈な地震のときには、それぞれが、ずれることで地震のエネルギーを半減することができます。基礎を強化する必要があるものの、基礎から上の構造は、基準法内の通常のつくりで良く、構造の種別も問いません。何よりも、コストが免震の半額で、150万円程度で作ることができます。

免震と違うのは、減震には復元装置がなく地震時に建物がずれた場合、ジャッキで元の位置に戻す作業が必要になることです。シミュレーション上では、地震時のずれは10cm程度ですが、万が一のためにある程度以上、移動しないようにストッパーを設置することになっています。給排水管は建物が移動した際に対応できるように、フレキシブルな継手にしています。現在、3棟目が完成しようとしています。

建築確認申請は、NPO法人・新日本まちづくりハウジング協会が発行する特記仕様書を添付することで対応していますが、民間の確認申請取り扱い機関でもある住宅性能評価センターで、対応していただけることになっています。

### ■自宅兼事務所での採用

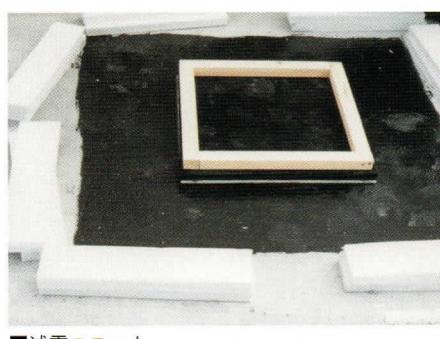
ビックの佐藤氏の話をお聞きした時、ちょうど私の自宅兼事務所を設計中でした。日本で初めて実際の建物に採用することにし、2000年の12月に着工して、2001年7月に



■住宅基礎配筋——中央に減震ユニットがある



■住宅基礎と人工地盤

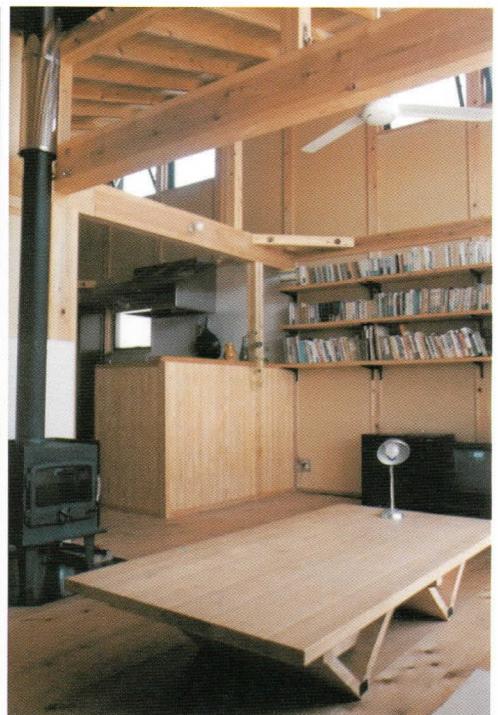


■減震ユニット



■排水管

# 同窓生から の便り

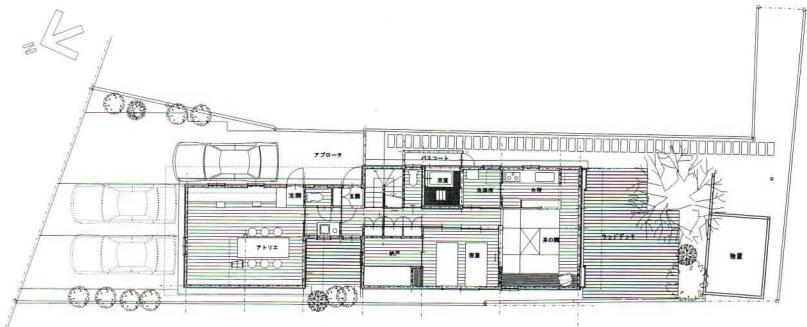


■関谷邸

竣工しました。地盤調査の結果、地表1mが盛土であったため、減震ユニットが設置される下に、深さ1mのラップルコンクリートを12箇所打設し、その上に260mm厚の人工地盤を設けました。人工地盤に摩擦を調整した塗料を塗り、減震ユニットとなる500mm角の樹脂板に塗料を塗布したものをラップルコンクリートの上に12箇所設置し、その上に住宅基礎をつくりました。免震住宅用の鋼棒ダンパーというストッパーを2箇所設けました。建物本体は、国産材を用いた木造軸組工法で、木製筋交プレートの採用、日照と通風の確保、屋根裏換気を積極的に行う、ALC版による外断熱、地熱の活用、自然素材の使用、セルフビルなど、さまざまな工夫を凝らしています。

## ■NPO法人で普及

構法の普及にあたっては、一つの住宅メーカーなどで独占して使用するのではなく、より広く一般の住宅に活用できる方向を目指したいと考えており、ビックだけではなく、私のかかわるNPO法人・新日本まちづくりハウ



ジング協会で普及に努めています。このNPO(特定非営利活動)法人は、地域の建築技術を支援し、市民との繋ぎ役になることを大きな目標として活動しており、全国に30社ほどの会員がいます。

今後も、木造住宅を中心に日本の住環境が、少しでも良くなるよう活動を続けていくつもりです。

## ■関谷真一(せきや・しんいち)

1957年●東京都に生まれる(東京都立三鷹高校出身)  
1979年●工学院大学大学卒業(山下研究室)  
1981年●工学院大学・大学院修士過程修了(山下研究室)  
番匠設計入所

1993年●結デザインアソシエイツ入所  
1998年●結設計室設立  
工学院大学非常勤講師

【主な活動】NPO法人・新日本まちづくりハウジング協会理事長

NPO法人・らいふ舎理事長/自然×住宅の会理事  
工学院大学建築学科同窓会副会長

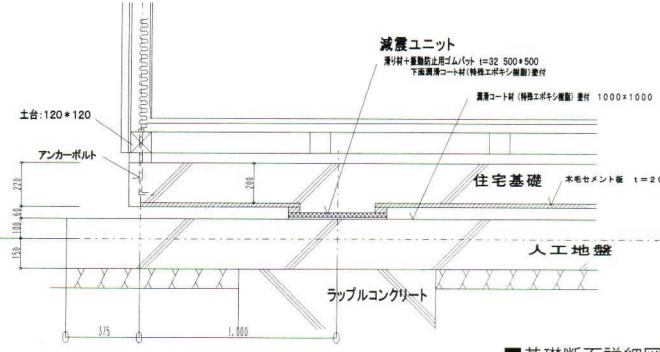
【著書】『基本の家づくり百科』(永岡書店)

『住まいのリフォーム実例集』(日本建築家協会編/鹿島出版社)

【住所】〒192-0041 東京都八王子市中野上町4-4-15

☎ 426-22-4715 / Fax. 0426-22-4714

E-mail: yuis@tky3.3web.ne.jp



■基礎断面詳細図

## 水まわり空間は、住まいの要！



山本みさ子  
(みすず設計・主宰)

中央:山本みさ子さん  
左:今井美智子さん  
(後藤研究室)  
右:清川智子さん  
(望月(大)研究室)

「自転車屋になりたい！」という夢を持って工学部を目指していた私が、どういうわけか建築学科に入学し、環境設備系に進んだことで、住宅設備機器に興味を持つようになったのが、INAXに入社したきっかけです。

建築学科の学生がメーカーのショールームに就職するのを非常に珍しく、まわりの友人からは「どうして？」とよく聞かれたのですが、「学んだ建築の知識と自分の営業力を同時に試せる絶好の場」と考え、この職場を選びました。とはいえ、ショールームに来場される建築のプロの方を相手に、要求される専門的な知識と、技術の進歩やユーザーのニーズの変化でめまぐるしく移り変わる建材・住宅設備機器を前に、12年経った今でも勉強日々が続いています。

■□■

私の勤務しているINAX新宿ショールームL21はJR新宿駅西口の駅前にあり、ひと月約1万人のお客様にご利用いただいているます。

現在、約50名のショールームアドバイザーが交代でご案内していますが、そのうち私を含めた3人が工学院大学出身です。(※上写真)

これまでに、大学でお世話になった教授をご案内する機会も何度かありました。また得意先のお客様の名前を『NICHE』で見つけ、それをきっかけに話が広がり、より関係が深まることもあります。建築の第一線で活躍している先輩方や後輩の話を聞くと、さらなるスキルアップへの意欲が湧いてきます。

□■□

ショールーム・アドバイザーの仕事は、いかに短かい時間の中でその方の生活スタイルを聞き出しながら、現在の不満点を解消し将来の要望点を実現するため、その方にとてベストな商品を提案するかが重要です。

そのために、例えば「トイレで用を足した後、お尻を拭くのは右手か左手か」など少々立ち入った質問をすることもしばしばです。最近ではどのようなニーズに対しても

ご提案をできるようになりましたが、さすがに小便器ご提案だけは今でも苦労してしまいます。

■□■

先日、得意先である工務店様主催の「排水工事の合理化について」のディスカッションに参加した際、「排水ヘッダー配管」と、従来の「継ぎ手合流方式」の排水の流れ方の違いを水理実験で比較しました。また、「二重トラップ」や「通気管」を設けないことでの弊害についてもこの実験で再確認しました。

その際に感じたことは、メーカーの立場として、商品である機器そのものに精通する事はもちろん、施工も含めた正しい知識を持つことで初めて本当の意味でのご提案ができるということです。建築の各分野のプロの方からの技術的な質問に対して、十分に応えられるショールーム・アドバイザーをめざしてこれからも努力していくつもりです。

□■□

建物全体の中で、水まわり空間はほんの一部ですが、実際に住む方にとっては住宅の快適性を左右する「住まいの要」といえるでしょう。だからこそ水まわり空間に満足していただくことで住まいの評価もあがるものではないでしょうか。機器選びの際は、ぜひショールームで実際に見て、触れて、体験してください。心よりお待ちしています！



■展示スペース  
(20階エントランス)



■展示スペース  
(タンクレストイントンサティス)

■山本みさ子(やまもと・みさ子)

1990年●工学院大学建築学科卒業(宇田川研究室)

(福岡県・筑紫女学園高校出身)

INAX入社

【連絡先】

INAX新宿ショールーム L21

〒163-1520 東京都新宿区西新宿1-6

☎ 03-3340-1700 / Fax. 03-3347-1700

E-mail: misako.yamamoto@i2.inax.co.jp

INAXインターネット・ホームページ・アドレス: http://www.inax.co.jp/

# 既存建物への 免震レトロフィット適用例

## —千葉市立郷土博物館耐震改修工事



**中川 理**  
(東京建築研究所)

### 1.はじめに

既存建築物の耐震性能向上のため耐震補強を行う際、耐力および韌性性能の確保には増設壁や鉄骨プレース補強および柱の鋼板巻き補強などの補強を行うのが一般的である。大規模な改修により用途上または意匠上の不具合が生ずる場合や、より高い耐震性能が要求される場合には補強計画が困難となる場合がある。この場合の有効な対策の一つとして免震レトロフィットがあげられる。

免震レトロフィットは、基礎または層間に積層ゴムなどで建物を支持する免震層を設け、大地震時に上部構造への地震入力を軽減する工法である。

以下に「千葉市立郷土博物館耐震改修工事」における免震レトロフィット設計例を紹介する。

### 2.建物概要

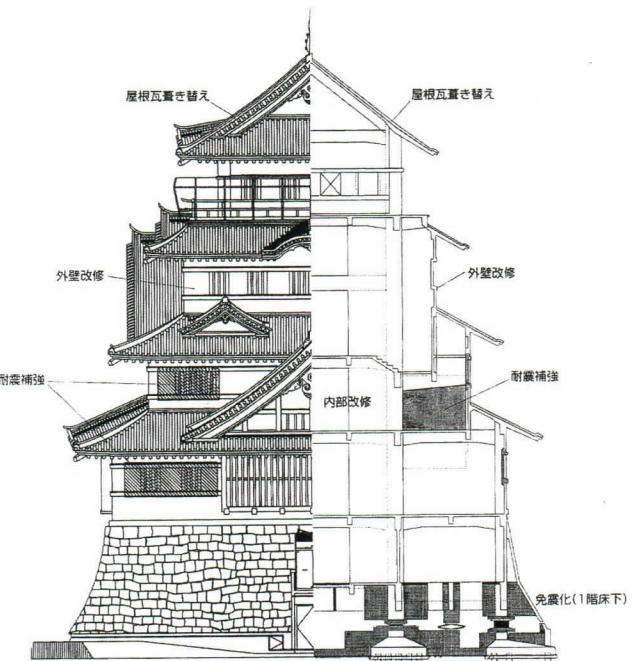
千葉市立郷土博物館は、「千葉城」の名で多くの市民に親しまれてきた建物である。しかしながら、建設後34年(昭和42年4月竣工)を経過し、老朽化のため建物や設備も傷んできており、また、耐震診断結果が要求される耐震性能を下回る結果であったため、本建物の耐震改修が計画された。

耐震補強の計画に際しては、建物外観を損なわないことが条件の一つとしてあげられた。このため、建物内部に増設耐震壁を設ける従来の方法では、展示スペースの細分化、展示面積の縮小により、博物館としての機能が損なわれること、また、プラネタリウムの廃止が必要となることなどの問題が生じた。

これに対して、免震レトロフィットでは、1階床下(石垣内部)にある比較的大きな空間を免震層として利用することで、建物外観を損なうことなく、展示面積の確保やプラネタリウムの存続が可能であり、これらを比較検討の上、免震レトロフィットによる改修が採用された。



■[写真-1] 千葉市立郷土博物館(改修後)



■[図-1] 立面図・断面図

### 3.構造設計概要

#### (1)基礎構造

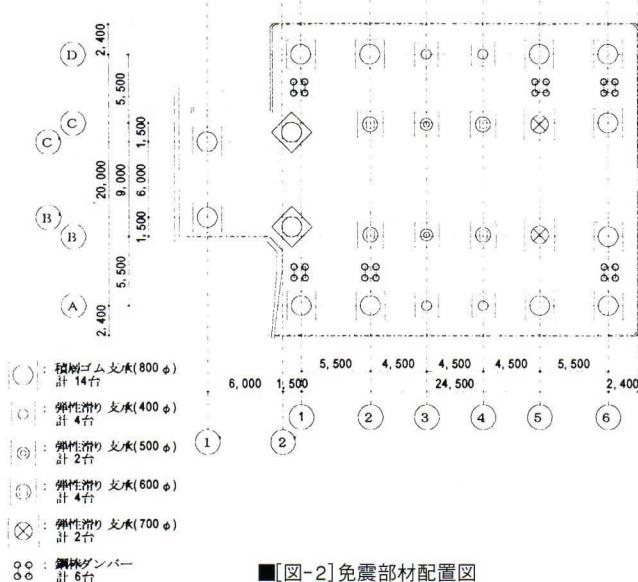
既存の基礎はRC杭による杭基礎であり、設計地震力時の軸力に対しては許容値以下だが、巨大地震時の水平力および地盤の強制変形により杭が破損する恐れがあるため、既存フーチングを囲む形でコンクリートを打設し、補強を行うことで、直接基礎としても成立する計画とした。

#### (2)上部構造

上部構造は、開口閉塞などにより若干の補強を行う計画とした。

また、エキスパンションジョイントで切り離されている

# 同窓生からのお便り



本館棟と玄関棟は、増設スラブ・壁により一体化を図った。免震部材による付加曲げに対して、1階梁および免震部材上部柱廻りの補強を行った。

また、免震部材据付けに伴うジャッキアップ時の上部構造の荷重も十分伝達できるよう計画した。

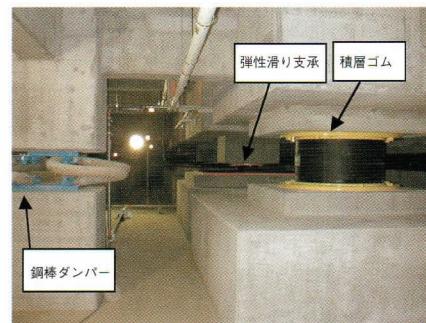
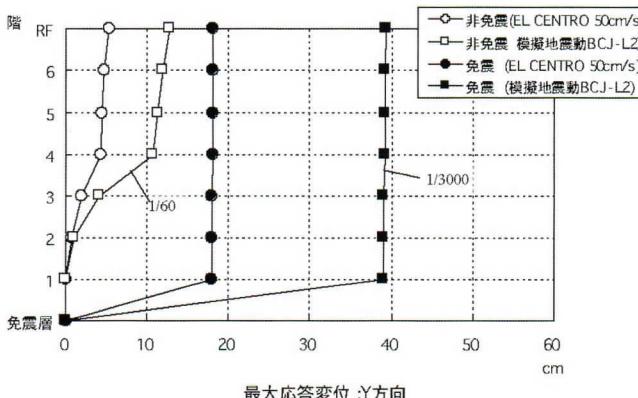
#### (3)免震部材

比較的軽量な本建物の長周期化を図るため、免震部材は、天然ゴム系積層ゴム支承と低摩擦の弾性滑り支承を併用する計画とした。天然ゴム系積層ゴム支承は、変形性能を保持させるため $800\phi$ を用いた。また、滑り支承とともに鋼棒ダンパーを用いることで、安定した減衰機能を保持出来るようにした。

免震部材の配置を[図-2]に示す。改修後の免震層を[写真-2]に示す。

#### (4)地震応答結果

設計に用いる入力地震動は、既往の観測3波を基準化(25cm/s、50cm/s、75cm/s)と、模擬地震動として工学的基盤から表層まで增幅させたBCJ-L2および関東地震を想定した地震動を採用した。極めて稀に発生する地震動(50cm/s相当)で本建物に対し影響が大きかった地震波の応答解析結果を[図-3]および[図-4]に示す。



加速度については、25cm/sの解析結果も示す。非免震では上部構造の層間変形角が1/60程度とかなりの損傷を受けるが、免震構造では免震層で40cm近くの変形が生じるが上部構造の層間変形角は1/3000程度で軸体は許容応力度以下となっている。加速度では、非免震建物と比較した場合、1階では地震入力が1/5程度となり、また、上部構造の加速度の上昇が免震構造では小さいことが分かる。これは上部構造に既存耐震壁が多く、さらに若干の局所的な補強を施すことによって上部構造の剛性と耐力を確保し免震らしい挙動(1自由度系に近い挙動)が実現できていることを意味している。

なお、75cm/sおよびバラツキを考慮した場合についても軸体は弹性範囲内に納まっている。

#### 4.免震工事概要

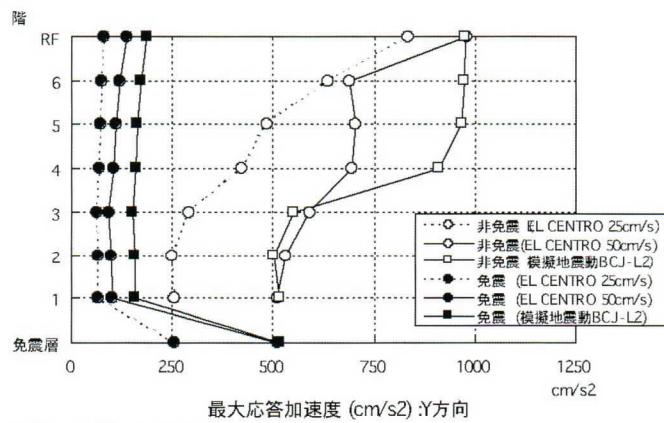
免震層の施工手順を以下に示す。

##### STEP-1:山留め、床下掘削

- ①土間コンクリート撤去／②山留め親杭打設
- ③1階床下を基礎底まで掘削

##### STEP-2:補強軸体の構築

- ④耐圧盤の構築／⑤免震部材下部補強軸体の構築
- ⑥擁壁の構築／⑦免震部材上部補強軸体の構築



# 同窓生から の便り

- ⑧補強基礎梁の構築
- ⑨エキスパンションジョイント周り躯体の構築
- ⑩サポートジャッキの挿入
- ⑪柱切断(ワイヤーソーにて切断)
- STEP-3:免震部材の挿入
- ⑫免震部材上下架台の構築、免震部材の挿入
- STEP-4:外周部の仕上げ
- ⑬外壁(石垣壁の切断) / ⑭サポートジャッキ撤去
- ⑮土間コンクリートの補修

## 5. おわりに

先人が設計し市民に親しまれてきた建物を用途・外観を変えず残せたことを嬉しく思う。このことは設計者、施工者これに携わる多くの人々の知識、経験、技術力の協力によってなされたことは言うまでもない。日本初の城郭建築物の免震レトロフィットである本建物では、石垣周りに複雑なエキスパンションジョイントが生じたが、意匠設計者の努力もあり、うまく対処されている([写真-3]に玄関階段脇のエキスパンションジョイントを示す)。

地震時の床応答加速度も改修前よりも飛躍的に低減するため展示品の転倒なども抑制できるものと思われる。免震部材の選定においては、建物が比較的軽いため低摩擦の弾性滑り支承を併用して長周期化を図ったが、復元力に比較的大きなバラツキを見込んで設計を行った(バラツキを考慮した応答解析結果を[図-6]に示す)。

これは、低摩擦の弾性滑り支承の摩擦係数は、速度依存、面圧依存の他に経年変化が比較的大きいであろうこと

所在地 ● 千葉市中央区亥鼻 1-6-1

設計 ● [一般] 千葉市都市整備公社

桑田建築設計事務所

[構造] 構築設計研究所

東京建築研究所

施工 ● 大成建設

建築面積 ● 823.75 m<sup>2</sup> (収蔵庫含む)

延床面積 ● 2,416.29 m<sup>2</sup> (収蔵庫含む)

既存建物構造種別 ● 鉄骨鉄筋コンクリート造  
地盤種別 ● 第二種地盤 ( $T_g=0.35$  秒)

基礎構造 ● 直接基礎

(既存建物基礎構造:杭支持独立基礎)

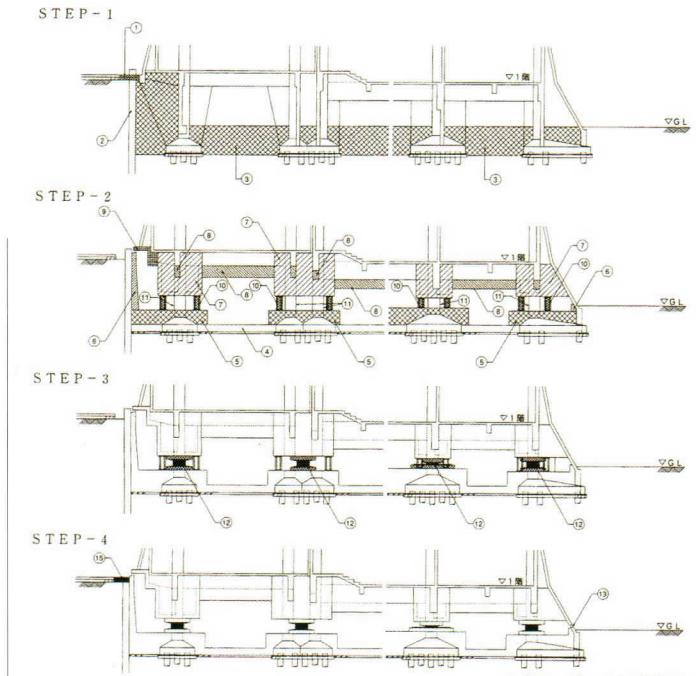
免震部材 ●

天然ゴム系積層ゴム、 $\phi$  800 (14 台)

弾性滑り支承  $\phi$  400 ~  $\phi$  700 (12 台)

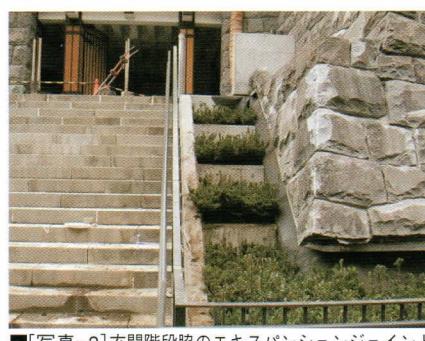
鋼棒ダンパー (6 台)

免震部材周期 (接続周期) ● 4.05 秒

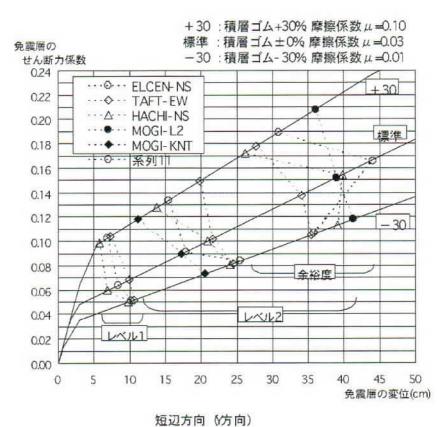


■[図-5] 工事手順図

や、その他の不確定要素への工学的判断である。解析技術が進み、新しい部材も増えている。構造設計者は解析における構成材の建物への適用性を判断し、また、部材の特性やバラツキなどを考慮し設計する必要がある。「プログラムに入力すればよい」、「建築基準法さえ守ればよい」といった考え方ではなく、計算であって、本来の構造設計ではない。私自身、構造設計の先輩方と仕事をする中でこのような考えを持てるようになったが、責任感を感じる反面、やりがいのある仕事もある。



■[写真-3] 玄関階段脇のエキスパンションジョイント



■[図-6] バラツキを考慮した応答解析結果

## ■中川 理 (なかがわ・おさむ)

1991 年 ● 工学院大学建築学科卒業 (宮澤研究室)  
(千葉県立市川東高校出身)

早稲田大学大学院理工学研究科建設工学修了

現在 ● 東京建築研究所・設計主任 / 1級建築士

### 【主な業務経歴】

①新幹線第2総合司令所・構造設計

②日本交通技術(本社ビル)構造設計(免震構造)

③大阪鉄道病院・構造設計(免震構造)

④目黒駅共同ビル・構造設計(高層、制震構造)

⑤品川駅東口駅ビル・構造設計(高層、制震構造)  
……など

### 【住所】

〈勤〉 〒160-0016 東京都新宿区信濃町20番地  
東京建築研究所

☎ 03-3359-6151 / Fax. 03-3359-9714

E-mail : nakagawa-o @ tkse2000.co.jp

〈自〉 〒272-0111 千葉県市川市妙典3-22-2-306

☎ & Fax. 047-357-0822

# いにしえ 古の北京、煌めきの上海 ——拡大企画部会〈中国視察〉

## ①プロローグ

校友会企画部会(部長: 笹原克／1975年建築卒)では、近代化発展の変化が著しい地域を選び、今後の校友会活動に寄与する立場から、海外視察の検討を行っていました。視察期間は夏休み中で、経済的であること。8月初旬までに、中国の世界遺産でもある「北京・蘇州・無錫・上海の旅」に絞り込み、4泊5日の旅を企画。参加者は、建築同窓会の4名(笹原克、谷口宗彦、鯉坂誠之、大場光博)を含む10名です。

## ②光の中に瞬く上海・外灘

8月29日午後、約2時間半で上海虹橋国際空港に到着。若い美人のガイドさんが出迎えてくれました。東京と同じで上海も湿気が高く、クーラーがないと身体が汗ばんでしまいます。上海は北京に比べて比較的歴史が新しい都市です。阿片戦争後の南京条約(1842年)で上海を含む5つの条約港が門戸開放されました。

上海はかつては、外国資本の中国進出の有数の拠点で貿易、商業の中心地でした。現在の人口は約1,600万人と東京よりも多く、日本人が10万人、台湾人が50万人も住んでいます。上海の面積は5,800km<sup>2</sup>です。

### ◆夜空に輝く上海の外灘

マイクロバスで、上海市内の中心部に近づくと、高速道路の車窓から巨大な中高層ビルが乱立して見え、高速道路が網目のように走っている。ちょうど、オリンピック当時の東京のような感じがします。夕暮れのじまが幕を降ろす頃、黄浦江に面した外灘の畔に到着。19世紀列強の共同租界地だった頃に作った欧風の高層建築群が並び、7時からライトアップされとても綺麗。川向こうにはアジア最大のテレビ塔「東方明珠塔」が遠目に輝いている。浦東新区と呼ばれ、上海で一番ホットなエリア、最新流行のレストランやショップがたくさんあり、高層ビルの外資系ホテルも多い。

さて、ガイドの傅詒さん(22歳)が車の中で紹介した上海の生活を思い出してみましょう。上海の3人家族の一般的な生活費は、月1,600元(24,000円)、この内家賃は400元(6,000円)程度。

上海のタクシー代金はまず3Kmが10元、後は1Km毎に2元、ガソリン1Lは3元、軽油は2.5元。

ペットを飼うのは大変。愛玩犬は金持ちの象徴。上海で犬を飼うと毎月1万円以上の贅沢税を払わなくてはいけない。だから小豚を飼う例が多くなった。

## ③水の都・蘇州

翌30日早朝、曇り、蘇州を目指して高速道路(約80Km)を走る。水平線の果てまで平坦地が続き山並が見えない。最近は上海が狭くなり、トヨタ、サントリー、味の素、ハウスカレーなどの日本企業が蘇州に進出している。車窓の外にコンクリート造の2~3階建ての農家が見え、電気製品は揃つ



■上海①——外灘のイルミネーションに輝く夜景



■上海②——市内高速道路、中高層ビルが乱立している



■上海③——初日の軽食、10人テーブルを囲む



■親切な新人ガイドの傅詰さん

ているが唯一テレビがない。衛星放送は受信禁止。発覚すると罰金とテレビを破壊される。共産党は『強いです』。

蘇州のまちは道幅が広くとっても信号が少ない。道路を渡る時はとっても「勇気」がいります。旧時代に栄えた蘇州、杭州は大運河の終点で長江水運の終着地、交通のクロスロード、商業の大集散地でもあった。今でも伝統工芸の盛んなところ。蘇州の人口は約100万人。3,000年前から北京と蘇州や杭州迄の間約3,250kmに運河が掘られている。だから市内には今でも、運河があちこちに走っている。

#### ◆蘇州のシルク工場

シルクロードを支えたものは絹、蚕を育てる桑は中国にしかなかった。だから昔は絹は貴重品。蘇州でも絹織物が外貨を稼いでいる。蘇州運河の小船に乗って下船すると、そこにはシルク工場があった。シルク工場に隣接するサロンでは、ファッショ

ンショーが行われている。黒山の人ばかりで室内に入れない。とってもムンムンしている。軽快なBGMとともに美女6人によるショーが始まる。皆、なんてスタイルがいいの。短いショータイムの度毎に、着衣を替えてショーが始まる。みんなで溜息つきながら見てしまいました。

シルクを販売する店内は小さな体育館のように広い。シルクの肌着、シャツやネクタイなど、どれもスペベとしていて、肌触りが優れている。販売の仕方もとっても上手です。

#### ◆蘇州夜曲の寒山寺

中国は今、観光に力を入れ、受入れ体制も着々と整っている。日本語のガイドも日本では考えられないような高学歴と能力を持っている。外貨を稼ぐにはこれ以上の政策はないだろう。観光資源は国内に豊富、食材も人件費も安い。観光地がテーマパークのように工夫されている。

さて、拙政園に続いてのコースは、目の前に寒山寺の中に五重塔の普明

寶塔が現れる。昨年建設されたというが、まるで何百年も前から建っているような感じがする。信じられない。蘇州市楓橋鎮にある寒山寺は、寒山が草庵を結んだ地に、希遷が元和年間(806~820年)に創建した。唐の張繼の「楓橋夜泊」の詩で有名だが、日本人には渡辺はま子の「蘇州夜曲」の方が親しみがある。今夜は無錫のカラオケスナック「まゆみ」で、誰が歌うか、蘇州夜曲のメロディが流れる。

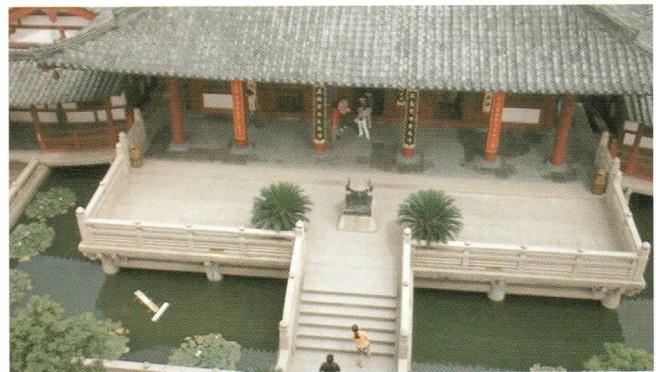
「蘇州夜曲」——♪君がみ胸に、抱かれて聞くは、夢の舟歌恋の歌(中略)涙ぐむよな、おぼろの月に、鐘が鳴ります、寒山寺……。

#### ◆三国志の無錫

30日夜、無錫の錫州賓館に到着。無錫は、大運河と上海、南京間の鉄道沿い。交通、経済上の要地でもあり、有数の米、絹織物の集積地でもある。翌朝ホテルを出発し、ジャングル風の船で三国志の太湖を30分ほど遊覧し、真珠の売店に立ち寄る。



■蘇州1——車と自転車が入り交じる、夕方の蘇州市内



■蘇州3——五重塔から見下ろす寒山寺



■拙政園——蘇州の緑豊かな拙政園



■蘇州2——北京に繋がる運河の残る船着き場



■蘇州4——シルクサロンのファッションショー

上海に戻り、豫園、豫園市場を見学して、上海名物の海鮮料理を味わう。豫園市場は昼夜多数の人々で賑わっている。

#### ◆新空港から北京へ

31日夜になって上海から北京まで空路移動。新しい上海の浦東国際空港に向かう途中に、高速道路に沿って北側を見上げるとリニアの高架路線が走っている。世界初の超高速実用リニアモーターカーは、ドイツ製で最高時速430km、浦東国際空港から上海市中心部迄の30kmを約7分で結ぶ、年末には開通の予定。上海～北京は空路1時間程度です。

#### ④いにしえの古都、北京

9月1日、午前7時半に新大都飯店を出発。北京は『城壁でぐるっと囲まれていましたが、文革時代に撤去』、今は環状道路になっている。『壊さないで残しておけば良かった』とガイドの厳さん。首都・北京は中央政府直轄市。遼、金、元、明、清の古

都。<sup>ペービン</sup>一時期、北平と改称。1938年に北京に戻る。面積17,000 km<sup>2</sup>。北京のガイドは厳安さん、通称「げんちゃん」。角刈り頭で性格はざっくばらんな36歳、憎めない人柄。ガイドになつて5年目。

バスの中での注意です。売り子から買うものは『100%偽物。おつりに偽札が混じっていても、ガイドは一切責任を取りません』。これが今の首都北京の現実。

マンション買っても『70年経つたら國のもの』。土地は國のものなので『親が買っても子供の代で終り』。『何もいえない』です。

厳さんが北京では『電気よりも水の方が高価です』といふ。だからお風呂はあまり入らない。北から南に水は流れる。北は水が少ない。水の値段が高い。中国のある地方は人生で3回しかお風呂に入らないらしい。生まれた時、結婚する時、死んだ時で～す。そう言えば毛沢東のお風呂嫌いは有名ですね。

『上海、北京は中国の中の点』でしかない。他の地域は『みんなとっても貧しい』。

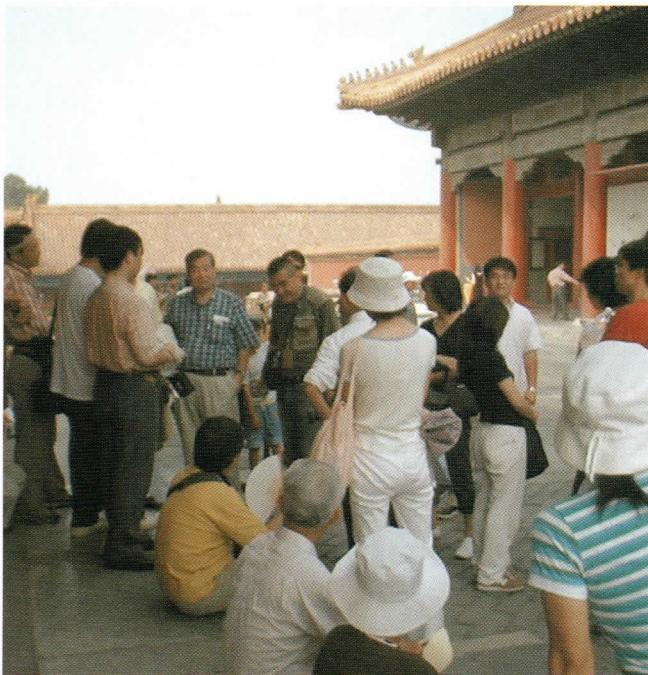
『白い猫でも、黒い猫でも、ねずみを取る猫がいい猫だ』 小平が言い出してからお金持ちが評価されてきた。

今の民の心は、職場を『豚ずらする人が増えている』『給料の良い会社へ直ぐ流れています』

一人っ子政策の結果、一人っ子はわがままで身体が弱い。

吉野屋の牛丼は、20元と高いけれど人気がある。半分以上は女性客で、代表的な日本食と思っている。材料費人件費が安いので儲かっている。北京市内に30店以上。生卵は危ないので売らない。

食事の際はまずお茶を選ぶ、そして中華料理を食べる。油分が体内に蓄積されずに排出される。中国人に太めの人が割合少いのはそのため。お茶葉も食べる。毛沢東も食べていた。ニンニクの匂いが消えます。



■北京①——故宮の中は人で一杯

■北京2——中央は皇帝の甥・愛新覺羅南柯さんと一緒に

## ◆天安門広場

天安門広場は50万人が一度に集まる。毛沢東の遺体が安置されている毛沢東紀念堂の周りを、早朝から長蛇の列が幾重にも取り巻いている。一体どのくらいの人々が並んでいるのだろうか。天安門前の道路は幅員約100m、どこを見ても横断歩道がない。代わりに巨大な地下道が真下を横切っている。天安門広場に、鳶の凧が一つ二つヒュルヒュルと空高く揚がっている。何処から揚げているのだろう。まちは道路一杯に自転車とバイクが走っている。

## ◆巨大な故宮

行けども行けども、同じような建物が続く、さすがに故宮は広い。前回来た時と違って、床が一面整備され割栗石のようなもので敷き詰めている。ずいぶん観光誘致に努力している。故宮の午門の前では、『位の高い者しか処刑されなかった』。赤いベンガラ色の高い門がコの字のように周りを取り囲んでいる。ここで処刑さ

れるのは名誉だったそうだ。清朝の皇帝には3,000人の側室がいた。宦官が使えていて、彼女らしか住めないところが城の中にある。

## ◆ラストエンペラー溥儀の甥

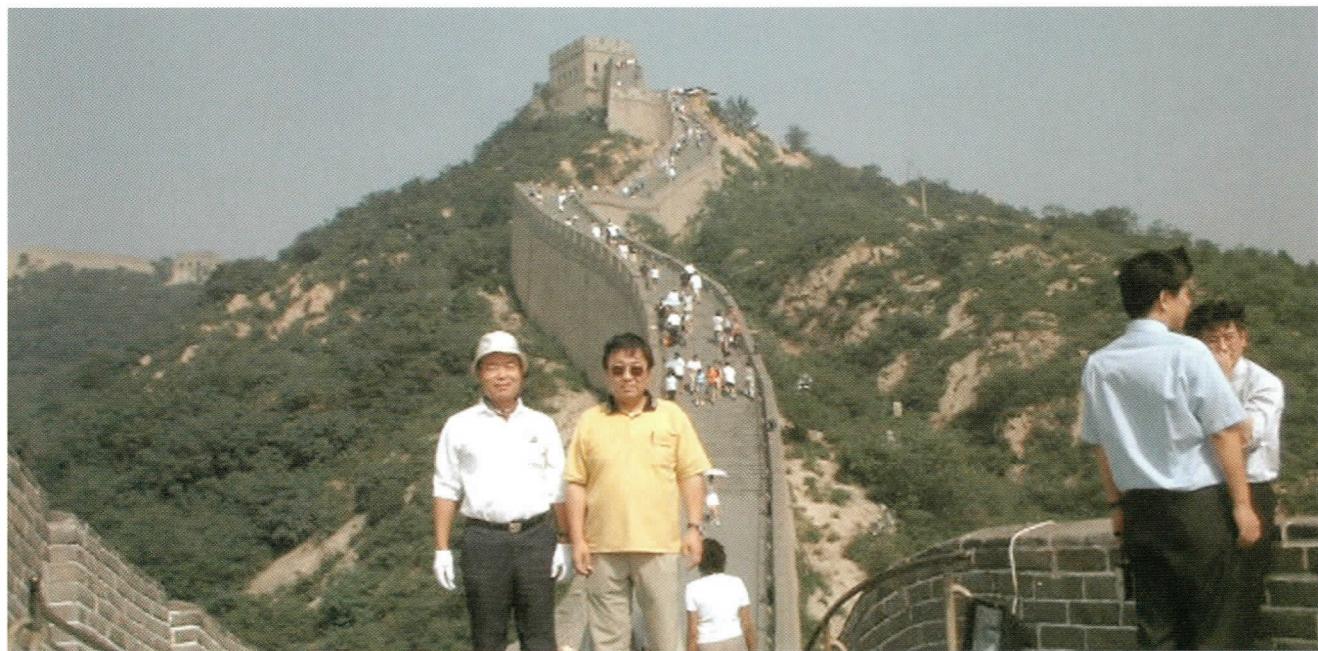
皇帝の書庫が城内に新しく復元されている、中に入ると群青色の中国服を着た宦官のような男が近づいてきて『今日は年間5回しかこられない特別な日です』と、耳元で囁く、しかも日本語でだ。溥儀の弟の子、つまり甥が今日はきている。

室内は飾り棚に高価な中国古美術品で飾られ、穏やかな顔つきをした眼鏡姿の70代前後のお年寄りが、奥の大きな黒檀の机の前に、黒い中国服に身を包み座っている。大人とうに相応しい雰囲気。中国書道会副会長、愛新覚羅南柯さん。豪華な文具三珍に囲まれ白い紙にスラスラと筆を走らせる。『心清事達』、左下に署名落款して涼しい顔でわれわれを眺める。『心清く邪心がなければ、人生は成就する』との意味、同行の高橋

洋光さんが購入、なかなかいい掛け軸になるでしょう。世が世ならば、エンペラーの席近くに座る人なんだね~。

## ◆八達峰・万里の長城

北京市内から車で約1時間程度とずいぶん早くなつた。長城の入口に着くと、右手が女坂、左は男坂と二手に別れる。緩やかな女坂を登る。泥レンガで造られた城壁の高さは約6～9m、上部の幅は4.5m。自家用車2台分の幅がありゆったりしている。尾根伝いに地形をなぞっているので、突然とても急なスロープになつたり階段が現れたりする。水平部分がほとんどのので遠近感が分かりにくい。手すりがないと登り難い所もある。5～6箇所の望楼を越えて麓から最上部と思われた所に辿り着く。山々の峰伝いに、遙か彼方までウネウネと細い紐のように長城が続いている。月からも見えるといわれる全長約2,400km。春秋戦国時代(紀元前)に辺境を防ぐために一部を築き、秦



■万里の長城——何処まで行っても万里の長城は続いている

(前221～前205年)の始皇帝が大増築した。この大土木工事で一体どれだけの人々が犠牲になったのだろうか全く図りしれない。山々の緑が鮮やかな今は、青空の元、長城の上をまるで米粒のように小さく、鈴なりの人々が遠くを歩いている。

#### ◆天壇公園

1420年に天に五穀豊穣を祈るために造られた石造りの祭壇が園内にある天壇。祭壇建築では世界最大。

長い回廊を歩いていると、通路の横木に腰掛け3～4人が胡弓を演奏している。ゆったりと時が流れている、印象的だ。回廊で背の高い一人の男が販賣している。鳶の販賣を買う。50元。組み立てると翼長が1m近くになる。おまけに連鳶を貰う。

#### ⑤エピローグ

とっても忙しい駆け足の旅だった。毎晩みんなが1室に集まりワイワイ討論会をして、早朝ホテルを出発。

いつも3食を確り食べる、しかもこれが豪華な中華料理ときている。レストランに到着、10分ほどで回転テーブルの真中に10品近くが、ピッタリ運ばれてくる。見事だ。『ア～ア、こんなにたくさん、食べ切れない～』、ピリカラ四川料理、小龍包の上海料理、上海の海鮮料理、広東飲茶……。

ラストディナーは 小平の娘さんが経営する天安門広場前のレストランで北京ダック。毎食メインディッシュそのものの豪華な料理だ。しかし、白いご飯と味噌汁が恋しい。豪華な食事はたまに食べるから美味しい。毎食、食べ続けるのは私には少しきつい。いつの間にか、朝食はバイキングのお粥が美味しいくなってしまった。

中国に視察に行くことになってから、新聞記事が気になりました。帰国後の朝日新聞の記事に、これから中国との関係が象徴的に語られている。

「日産、中国で乗用車生産へ」(朝日新聞9月12日、木曜日)「トヨタ、ホンダに比べて出遅れていた中国戦略を加速するために、日産は中国の大手自動車メーカー東風汽車との合弁事業に、今後3年間で1,000億円程度の投資を行う見通し。普通乗用車とコンパクトカーで年間10万台ペース、車種はセフィーロ、サニー、マークが有力、中国側は需要が急速に高まっている高級セダンの生産も求めている」。製造業に関してみると、中国を征すことのできないあらゆる企業は、これから『21世紀を生き残るのは困難になる』だろう。と私は今回の「中国視察」で強く感じました。そして、とっても有益で楽しい視察旅行でした。企画していただいた校友会および拡大企画部会の関係者の皆様、厚くお礼申し上げます。

(写真：谷口宗彦、大場光博、鯉坂誠之／取材：大場光博)



■天壇①——天壇公園内で、静かに胡弓を演奏している

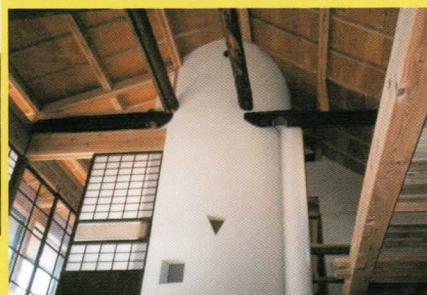
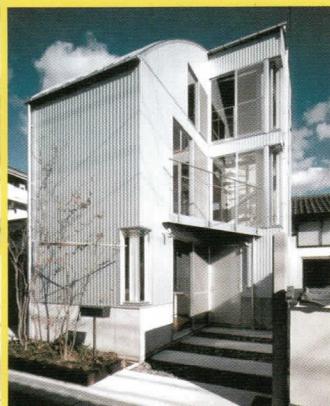
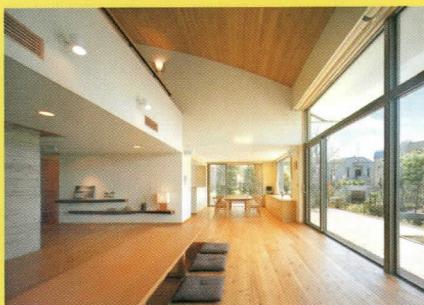


■天壇②——大きな鳶の販賣をする



■天壇③——天壇の前で全員集合

# NICHE GALLERY



このコーナーは、同窓会会員による“誌上作品展”です。

「NICHE GALLERY」を見たマスコミが、あなたのところに取材に行くかもしれません。

「NICHE GALLERY」を見た団体が、あなたの作品に賞を授与するかもしれません。

「NICHE GALLERY」を見た施主が、あなたのところに設計を依頼しに行くかもしれません。

……そうなるように、編集スタッフも頑張ります。

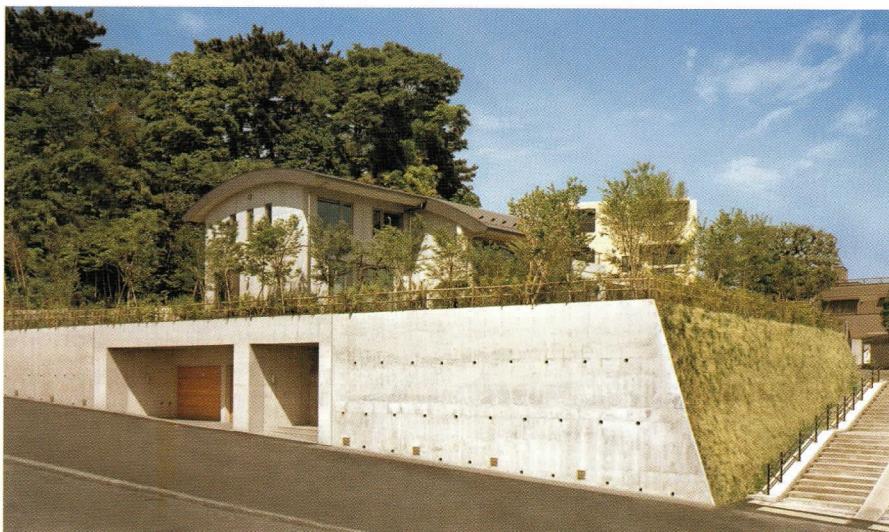
「NICHE GALLERY」に投稿くださることを、お願い申しあげます。

# 等々力の家

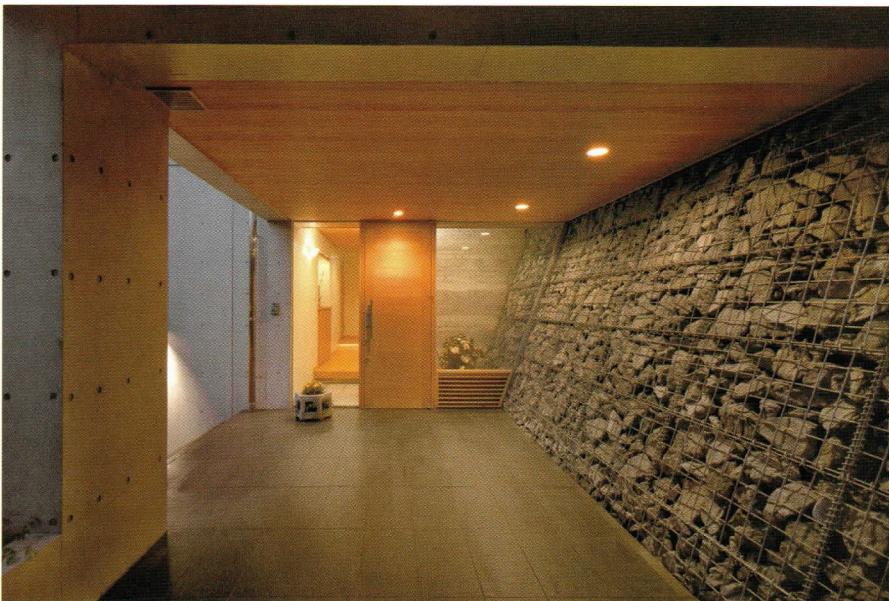
設計: 高木雅行



等々力の家(記憶を継承する住まい)は、日本産業デザイン振興会による「2002年度・グッドデザイン賞」の建築・環境部門においてグッドデザイン賞を受賞した。



■全景——建物後ろ北側の森は古墳。敷地の南は多摩川を望む高台。



■玄関ポーチ——門扉よりアプローチすると、遺跡の内部のような石積みが現れる。玄関回りの木部分は暖かみのあるムク材。



## 記憶を継承する住まい

### ► LOCATION

多摩川下流域にあたるこの地域は、弥生時代後期から古墳時代にかけ、流域の治水・灌漑事業を統率して大和政権と結びついた首長が、多摩川を臨む台地に大規模な古墳群を築造しました。計画地は、その一つの古墳の南側に位置しています。西側には緑豊かな渓

谷があり、南の眼下に広がる多摩川へ注いでいます。

### ► POSITION-DIRECTION

古墳とともに舌状台地の先端に位置する計画地は、都市計画道路の拡幅により敷地の過半を切り取られる形となつた。計画では本来の微地形を復元するように計画し、土で築きあげた土壁は前方後円墳の一部を成すような形

としました。歴史的な不動尊の参道は古墳に敬意を払うかのようにその軸線がとられています。この計画でも建物の中心軸は古墳の頂部から全面開口のリビングを貫通して多摩川を見通せるように計画しました。

### ► RECYCLE

建物は都市計画的に目黒通りが計画地を切り取ることにより、遺跡の地下



■庭からリビングを見る——芝生面を元の地盤より低くすることで囲われる安心感があり、外からの視線を気にすることもなく、落ち着ける庭になった。四季折々の草花が植えられた庭には、前の家の思い出の庭木も移植されている。敷地全体をぐるりと散策できるようになっている。

の入り口が現れたような表現としています。また、渓谷側からは屋根の形状、開口部が埴輪が目や口を切り取られたような単純な形としています。

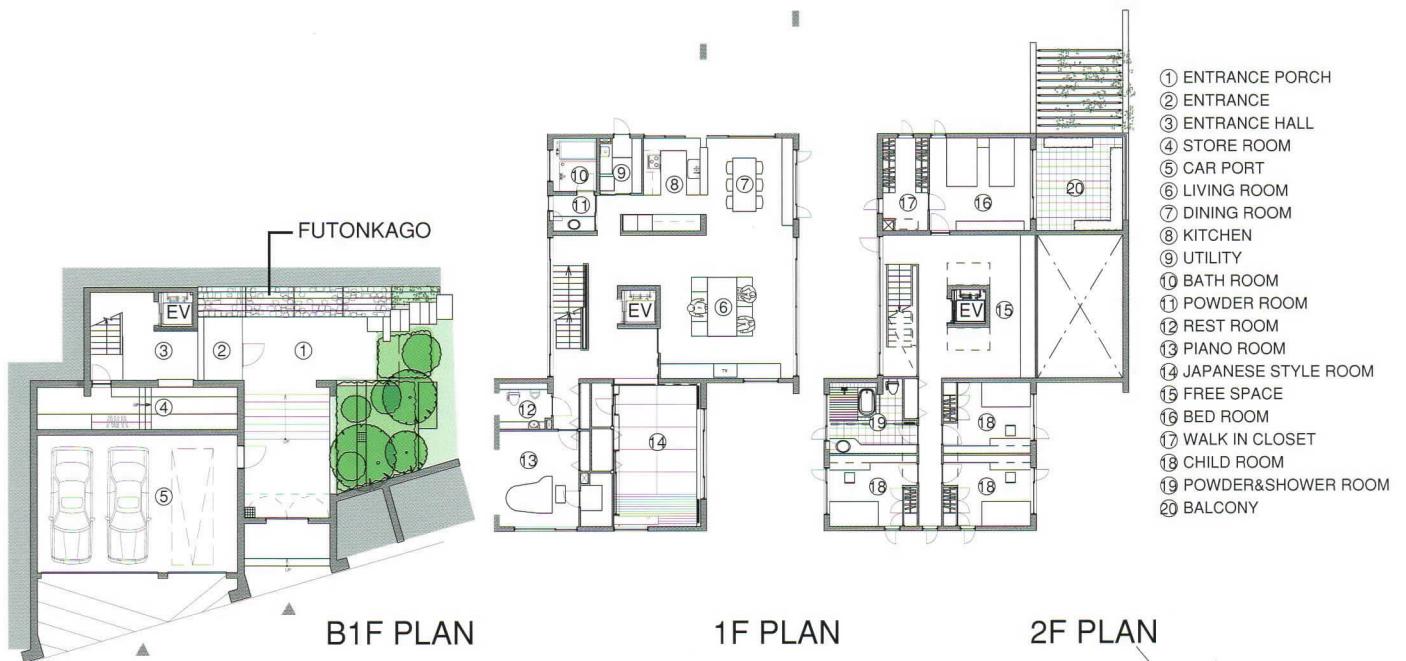
地下からの入り口を入れると、遺跡の内部に入ったような石とコンクリートでできたエントランスが基盤の上にあり、地上への階段を上ると古墳の縁に囲まれた台地の上に出られます。地中から湧き出るように立つコンクリート

のエレベーターシャフトを抜けると開放的な多摩川や富士を望むリビングが広がり、土壁でつくられた立体的な庭園へ抜けられます。

家長は17代目。江戸末期6代前に建てられた美しい茅葺き屋根の民家とそれを引き継いだ次の家から、その大黒柱や梁、上框が形を変え新しい建物に伝承しました。柱は先祖を祀る御厨子の両側の柱や、友人をもてなす照明器

具として、梁はリビングのこの家の歴史を飾る違い棚として、リビングの大テーブルも梁でつくられました。そして上框は新しい玄関で再びお客様を迎える役割を得ています。

庭園には近隣の人々の記憶の一部まで形作る大谷石、間知石、灯籠、手水鉢、庭の木々に至まで、さまざまな形で次の世代へ引き継げるよう計画しました。





■リビングよりダイニングを見る——前の家の軒桁を再利用したテーブルを中心に多くの友人たちが集う。南には庭園が広がり、西の小窓からは富士が望める。素朴な唐松の床は、夏は素足で、冬は床暖房で、とても心地よい。



■書斎と吹抜け——書斎からは1階のリビングと庭が見渡せる。吹抜けにすることで、1階と2階で互いの気配を感じることができる。  
[写真:金子滋]

所在地●東京都世田谷区等々力  
設計●アルキノーバ(高木雅行/川村知嘉)  
設備設計●坪田耕治  
施工●三元建設(西野泰/担当:有薗邦廣)  
ランドスケープ●プランタゴ(田瀬理夫)

敷地面積●704.04 m<sup>2</sup> / 建築面積●174.40 m<sup>2</sup>  
延床面積●363.31 m<sup>2</sup>  
構造●鉄筋コンクリート造  
規模●地下1階・地上2階  
竣工●2001年12月

■高木雅行  
(たかぎ・まさゆき)



1955年●茨城生まれ(都立雪谷高校出身)  
1979年●工学院大学建築学科卒業  
(山下司研究室)  
1982年●工学院大学建築学科修士課程終了  
(山下司研究室)  
1982年~1992年●SUM建築研究所  
1995年●アルキノーバ設立  
1991年~2000年●本学建築学科同窓会会長  
【賞】  
1981年●UIA国際建築家協会主催・国際学生  
コンペ・フランス賞  
1983年●OISTT国際劇場技術協会主催国際  
コンペ・第一佳作  
2002年●日本産業デザイン振興会主催・  
2002年度グッドデザイン賞  
【連絡先】  
〒160-0023 東京都新宿区西新宿4-11-10  
「インタービル」  
☎ 03-5333-6604 / Fax. 03-5333-6605  
E-mail: info@archinova.ne.jp

# 鷹匠まちの家

設計：山根秀明

## ▶▶敷地

敷地は島根県・松江市内、江戸時代には鷹匠が住んでいたことから「鷹匠町」と呼ばれている場所にあります。周辺は由緒ある寺院が並び、緑が多く残っている閑静な地域です。

しかしながら前面道路は幅員4.5m、一方通行の道で抜け道になっており、幅員が狭い割に自動車が頻繁に通る道に面しています。間口5.5m、奥行き11m、面積約18坪と極端に狭い敷地です。

## ▶▶建て主の要望

この住宅に対し建て主から出された要望は、①風通しがよく、光があふれる家にしたい。②限られた敷地を有効に活用し、広がりを感じる家に。③限られた予算の中で、こだわりの感じられるモダンな空間に。④都市の中のセカンドハウス的な隠れ家のような家にしたい——ということでした。

\* 設計の基本コンセプト

建て主の要望を受け、まず私が主眼においたことは、限られたスペースながら狭さを感じさせない、できるだけ広がりを感じる住まいとすること。無駄を省き、建て主がこの住宅の使い方を発見する楽しみの余地を残すことをした。

## ▶▶構造

メインストラクチャーを鉄骨造とし、サブストラクチャーを木造とし、構造を露出させ、インテリアの大きな特徴にしています。

## ▶▶プランの特徴

最低限の間仕切りとし、既成の住宅の観念を取り外し、限られたスペースの中で大切にしたいことだけをはっきりさせました。玄関の踏み込みがないのもその主旨からきています。

1階はエントランスコートを内部の



■上・右：外観

延長として感じられるようにし、2階、3階は周辺の緑を借景として採り入れ、窓を大きく開けています。3階は吹抜けでつながっていますが、個室化したい場合は縦型ブラインドで仕切ることができますようにしています。

## ▶▶外観

ガルバリウム銅板と、コンクリートの素材感を生かした建物としました。

屋根に円弧を用いスカイラインを柔らかく切り取ることにより、周辺の町並みのスケールとのなじみを図っています。プライバシーを考慮し道路側に面してはあえて大きな窓をとらず、植栽の背景としての壁面を創っています。北側には風が通り抜けるよう、ルーバー窓を規則的に配置し、壁面に特徴を与えました。

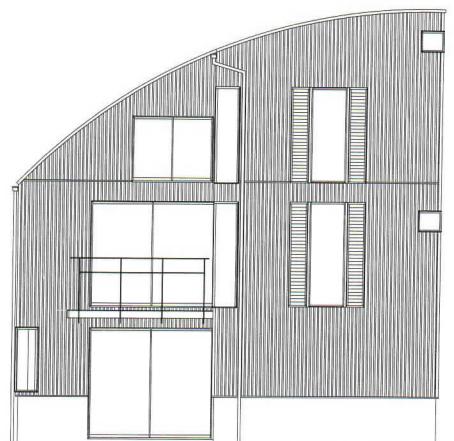




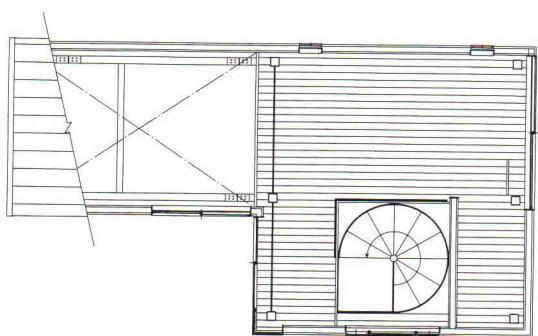
■3階から2階を見下ろす



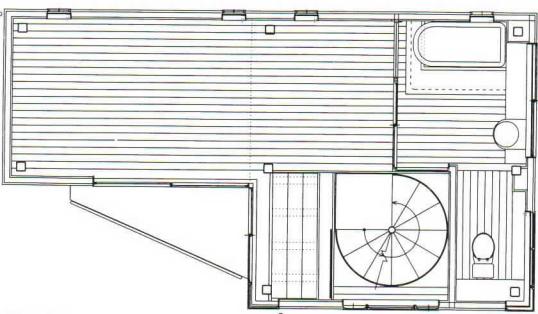
■2階・居間



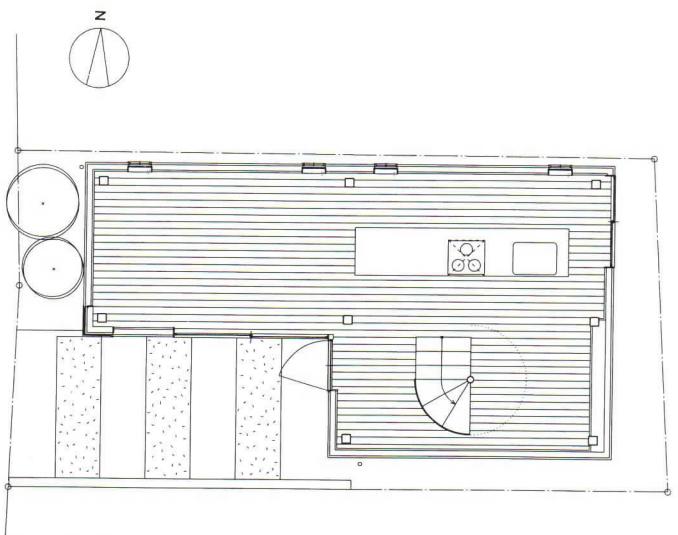
■南側立面図



■3階



■2階



■1階平面図



■2階・螺旋階段回り



■1階・食卓およびキッチン回り



■2階・居間

所在地●島根県松江市  
設計●IMU 建築設計事務所  
施工●相互建設  
敷地面積●60.09 m<sup>2</sup>  
延床面積●84.53 m<sup>2</sup>  
1階●33.02 m<sup>2</sup>  
2階●31.46 m<sup>2</sup>  
3階●20.05 m<sup>2</sup>

構造●鉄骨造、一部：鉄筋コンクリート造  
規模●地上3階

### ■山根秀明 (やまね・ひであき)



1958年●島根県生まれ  
1983年●工学院大学大学院修士課程修了  
(波多江研究室)

1983年●PAL インターナショナル  
1984年●小沢明建築研究室  
1993年●島根県へUターン  
1993年●NAK 建築事務所  
1996年●IMU 建築設計事務所設立  
【連絡先】  
〒690-0061 島根県松江市白潟本町33  
出雲ビル3階  
☎ & Fax. 0852-28-1125  
<http://www.joho-shimane.or.jp/cc/imu>  
E-mail : [imu@joho-shimane.or.jp](mailto:imu@joho-shimane.or.jp)

# 作品3題

設計: 小林将夫

## ① UNREST



■外観

今年の3月、私は映画会社の依頼で公開前のある映画のコメントを求められた。その映画は「海辺の家」(原題は「LIFE AS A HOUSE」)。住宅の建設を通して繰り広げられる死に直面した男の生き様と家族の心の再構築がテーマである。

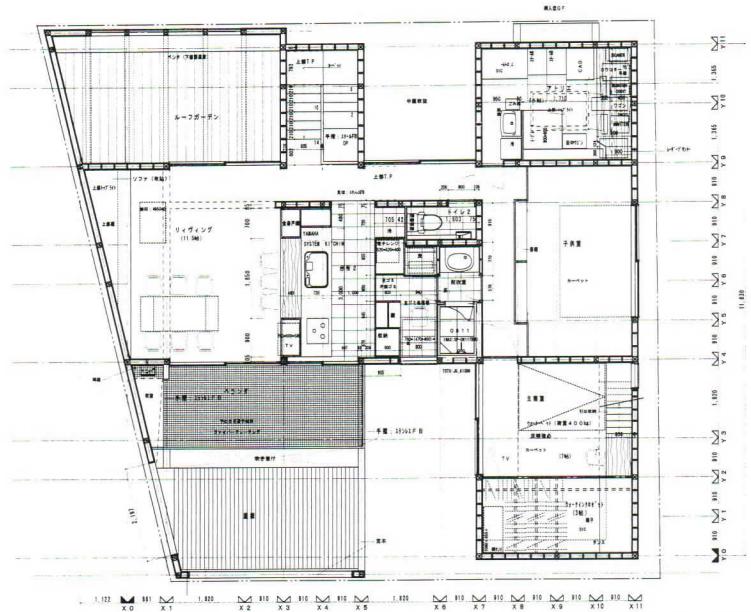
私はその映画を試写室で観ながら学生時代に先生の口から発せられた言葉を思い出した。それは「どんなに才能が無くても最低一つ建築をつくることができます。それはあなたの家です」と。そして、私は2年前に竣工した「UNREST」のことを考えていた。



私の設計はそれぞれの立場から異なるテーマを持ち込み、お互いの領域を尊重したり、踏み込んだり刺激し合いながら、設計や建築が進んでいく場合が多い。私の設計する建築は約9割が住宅関係。その中でも狭小・ロー



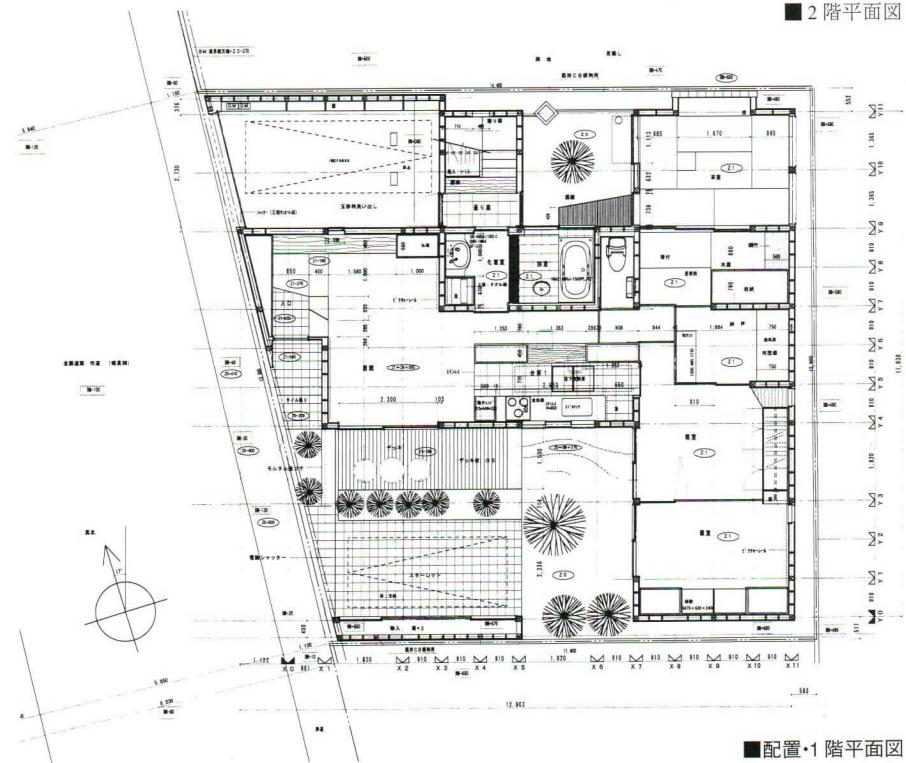
■2階・子ども室吹抜け



■2階平面図



■2階・居間とサンルーフ



■配置・1階平面図

コストの依頼が多く、濃密な夢や希望、建築的MM思想(スペース・マキシマム、コスト・ミニマム)の実現がさり気なく求められる。それらをプログラミズム化し、微妙なバランスの中で理想となる建築の構築を試みている。その過程の中で完成した「花井邸」と「関根邸」

という二つの作品がある。

これらの住宅の基本テーマは、上昇である。上へ上へと住人を誘い、物語を奏でるような空間を目指している。



花井邸はさいたま市の低地に位置しているために、常に床上浸水という水

害に悩まされてきた。そのためには基礎を1M上げ、その上に住機能をアットランダムに配置し、それぞれをステップで結ぶ。結果、スキップフロアによる変化ある空間が創出された。そしてその中心部に浮かんでいる黄色いキューブが客人を迎える。モンドリア

## ②花井邸



■2階・居間とキューブ

ンを意識したことはないが、この住宅を絵画のようだと表現される方も多い。

関根邸もスキップフロアの家である。この住宅の核は真ん中にポッカリと空いた吹抜けである。この吹抜けを囲むようにスラブが並べられ、そして

各部屋は吹抜けに向かって開かれており家族の気配や温もりを感じるよう意図されている。また、吹抜けの上部は大きなトップライトがあり、太陽や雲、月、雷、自然の光を空間全体に与え住み手にインスピライする住宅である。



■外観



■中3階・個室



現在、離島でのプロジェクトが進んでいる。島独特の住環境の対応や、資材の輸送、作り手の確保など内地では考えなくても良かった要素が山積みとなっていく。この5年がかりのプロジェクトは今年の夏の着工を目指し

### ③関根邸



■1階・居間から食堂＆キッチンを見る



■中2階・化粧室

て、今、設計の最終段間を迎えている。このことは折を見てまた報告したいと思う。



■吹抜けと中3階のワークスペース

■小林将夫  
(こばやし・まさお)



1983年●工学院大学建築学科卒業  
(山下司研究室)  
(工学院大学付属高校出身)  
1985年●工学院大学建築学科修士課程修了  
(山下司研究室)  
故・林雅子氏に師事(～1989年)  
1990年●ネクサス建築研究所設立

#### 【賞】

1983年●工学院大学卒業制作(最優秀賞)  
1984年●静岡県住宅設計コンペ(最優秀賞)  
1987年●相模湖観光ゲート・コンペ(佳作)  
1989年●讀賣新聞社主催住宅設計コンペ  
(優秀賞)  
1991年●松下電工主催快適住宅コンペ  
(水廻り部門賞)  
1992年●松下電工主催快適住宅コンペ  
第2回(優秀賞)  
1998年●TOKYO GAS あたかな住空間  
コンペティション(特別賞)  
……など

#### 【連絡先】

〒191-0061 東京都日野市大坂上4-2-3  
☎ 042-589-7521  
E-mail:nexus.kobayashi@nifty.ne.jp

# 長生村の家

設計：植木秀視



■外観——バルコニーの先端に太陽光発電パネルで、太陽熱による空気を送風するファンの電源としている。

## 大正・昭和時代の古い住宅を解体して再利用

このところ住宅設計の仕事で旧宅を生かした家造りを数件手掛けてきたことがきっかけとなり、住宅の建て替えに際して旧宅の再利用を施主に提案するようにしています。

しかし、施主たちは旧宅に対してそれぞれの思いがありますので、一概に賛成であるわけではないので、再利用するかしないかは、いずれにせよ、施主の意思を尊重しています。

以前は私自身、建て替えの仕事で

は、この点に関して疑問を持ちながらもスクラップ・アンド・ビルトで進めてきました。しかし、旧宅の存在は、単に、施主が不必要との考え方であっても、再利用の方法についての説明をすることも設計者として意味あることだと考えるようになってきました。

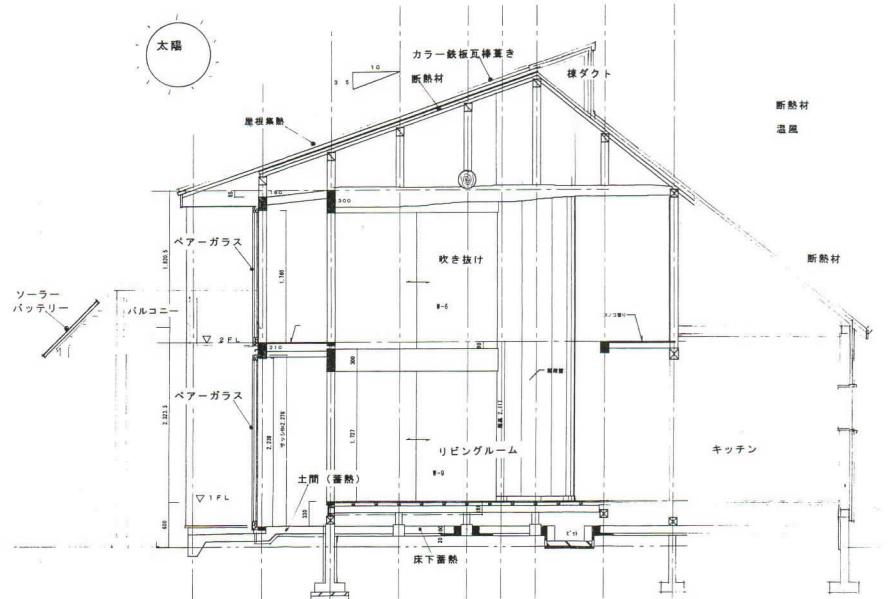
### ►大正・昭和時代の住宅の個性

この時代の住まいは中廊下式住宅が市民住宅の典型でしたが、戦後、この

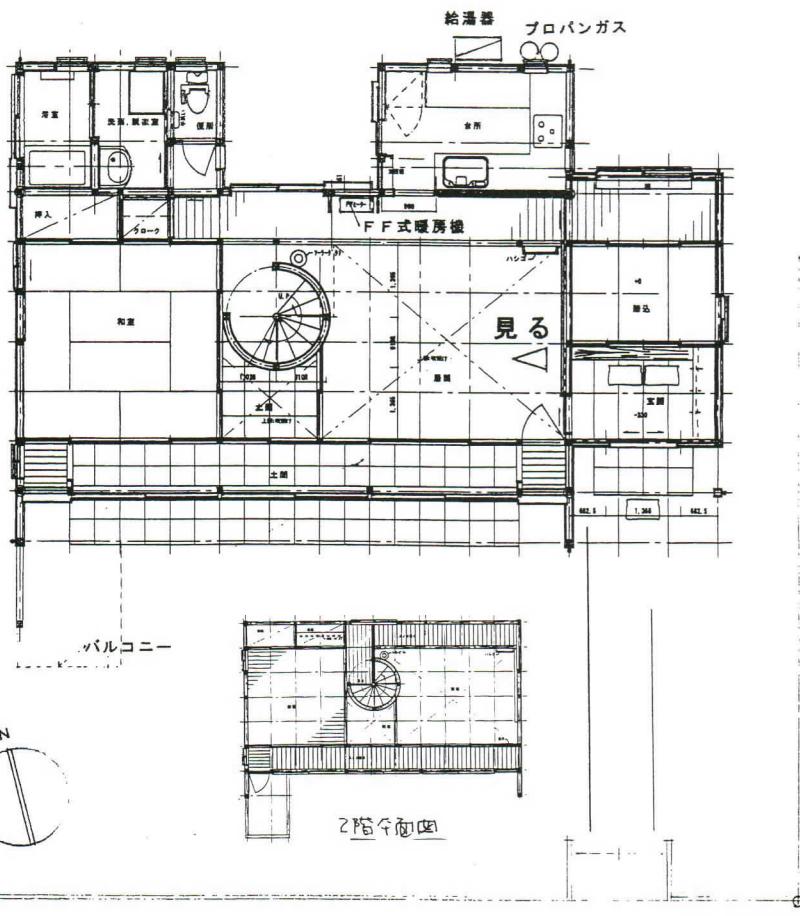
形式は不合理な点が多いと評価され、より合理的、機能的住まいが専門家によって提唱されてきました。

しかし、それは旧態化した住まいですが、客観的に見て、外部周りは日本の気候を受け入れた形態であり、庭と一体化し、内部は格調高い座敷やアットホームな茶の間があり、住宅そのものはほとんどが自然素材でできているなど優れた点が多くあります。そこに私は単なるノスタルジーだけではなく、捨てがたい魅力を感じています。

でも、こうした家に暮らす施主は、現在「寒い、暗い、住みにくい」などの



■断面図(外断熱&太陽熱・光利用システム図)



■1階平面図

理由をあげ建て替えを希望しています。こうした現象は、一時代前、古民家が消滅していったように、歴史の証である大正・昭和の住宅も、また、失われていくことを物語っています。

## ►再生住宅の事例

建て替えの際、施主はリフォーム(増改築)か新築かと悩み考え込んでしまいます。ここで、私たち設計者も

おっくうがらず、その旧宅を如何に生かすことができるか良く検証をしたいものです。

結果的に解体する判断をするにしても、旧宅に使われている材料や機器類などリスクはありますが、再利用するよう私は施主に提案しています。その解体材はそのまま建築廃材であれば単なるゴミですが、これを適材適所で使用すれば資源の有効利用になって生き

てきます。

その事例として、旧宅の玄関まわりの解体は手壊しでおこない、新築の住宅の玄関にその材料を使い旧玄関を再現した「世田谷の家」。柱、梁、造作材、ガラス戸、板戸、障子、襖などのうち、特に主要構造部材の大部分に解体材の柱、梁、を使い再構築した「長生村の家」。そして、解体にあたり使用できそうな材料はできるだけ確保して、それらをさまざまな部位に再利用した「杉並の家」などがあります。

こうしたセッティングによる住まいには、施主にとっては旧宅でのかつての生活の思い出や、祖先からの伝統の継承などの有形無形の形態が内在しています。

## ►古材、解体材の再利用にあたり

旧宅の材料を再利用した家造りには、新規木造住宅の造りとは違い現代の建築生産方式の観念と一致しない点多々発生してきます。それは、①建築生産の経済方式にのりにくい、②材料の質や強度的安定性が掴みにくい、③施工に関する技術が不充分(未開発)、④工務店、職人さんにとってはさまざまリスクなどがあります。そのため、現在は、工務店、職人さんの意欲と興味と心いきに助けてもらわなければならぬ現状です。

## ►再生の意味

建築や街が無秩序なスクランブル・アンド・ビルトの結果、古い建築物とともに「伝統的技や様式の継承」や「家族の思い出・記憶」と「子孫に生活様式を伝承」など、生活文化が同時に失われて行きつつあります。古い建築物の保存や再生はこうした問題を過去、現在、未来へと継続する重要な時空間だと、私は考えています。

再生住宅(建築)の具体的問題点は、①経済性、②建築廃材の軽減、③材料



#### ■居間の天井回り——旧宅の松梁を再利用

のリサイクル、④技術継承と開発……などが挙げられます。

#### ►循環型(リサイクル)住宅

この再生住宅のもう一つの観点は、単なる個人の古材の活用だけの意識におわらずに、再生文化として認識し社会に定着化、住宅(建築)生産としての循環型(リサイクル)システムの具体化が重要だと考えています。

私が手がけた再生住宅は大正・昭和の時代に建てられた旧宅の材料は言うまでもないですが、柱、梁、造作材などの木材、障子、ふすまなどの建具、玄関の鉄平石、埠の大谷石、瓦な

どはいわゆる自然素材でできています。そして、この時代の木造住宅は材料も建物の構成がシンプルなシステムででき上がっていますので、再利用材は旧宅を解体しながら必要な材料を取り出しが可能でした。

しかし、現在の建物は、多品種でかつ建材が複合化、接着材の多用、複雑な工法になっているため、今後、再利用はますます困難になるでしょう。同時に建築廃材が大量に発生することになるのは自明であり、大きな環境問題がさらに深刻化していきそうです。そのためにも、今後、循環型(リサイクル)住宅(建築)の可能性を探っていきたい

と考えています。

※①「長生村の家」は、第6回TEPCO「快適住宅コンテスト」に佳作、住まいのインテリアコーディネーションコンテスト2002に特別賞、第5回日本木青連・木材活用コンクールに住宅部門賞を受賞しました。

※②下記の雑誌に「杉並の家」と「長生村の家」が掲載されています。

日経アーキテクチャ(2000年9月4日号)に「手壊し解体、再利用材を21カ所に活用」。

日経アーキテクチャ(2001年11月12日号)に「無名住宅を解体して再利用」。

日経ホームビルダー(2000年11月号)に「挑む住宅・築40年の旧宅部材を建で替えて徹底活用」。



■居間——白い壁のところは丸階段。障子、ガラス戸、柱は旧宅のものを再利用

■植木秀視  
(うえき・ひでみ)



1964年●工学院大学建築学科卒業(武藤研究室)  
(新潟県柏崎高校出身)  
木曾三岳奥村設計事務所などを経て

1986年●植木設計事務所を設立

【住所】

〈勤〉〒171-0022 東京都豊島区南池袋2-8-5  
ライオンズマンション南池袋1004

☎ 03-3590-2133

E-mail : xbox.ueki@nifty.ne.jp

〈自〉〒336-0923 埼玉県さいたま市大間木  
1545-5-301

☎ 048-873-7845

◆「長生村の家」設計コンセプト

Aさんは兼ねて手当てしてあった房総の敷地にリタイヤー後の住まいを計画していました。

その生活スタイルは現役の時と違い、経済的にも体力的にも損生したスタンスをとることになるため、家づくりに当たり下記の点について、ぜひ実施したい考えでした。

①旧宅を解体した材料を再利用、②

暖かく涼しい家、③省エネルギー化、④バリアフリーの家、⑤自然素材使用、⑥ローコスト化……など。

①については、住みなれた旧宅(築70年ほど経過した)が事情により解体することになりました。その家にはとても愛着があるため、解体し廃棄してしまうにはもったいないし、かわいそうなので、その材料を再利用したいとのことでした。新しい家に松梁、梅の柾目の柱、造作材、棚板、杉や檜の縁甲板などの解体

した材料をできる限り利用しました。

②、③は日当たりと通風が良いように、南側に大きな開口部を確保し外断熱工法を採用、外断熱の屋根面の通気層を利用して太陽熱を屋根より集熱しソーラーパッテリーを電源としたファンをまわし、室内に暖気を送風するシステムを組んでいます。

④は玄朋、土間を除き床面はフラット。⑤、⑥は、床板と補足材は千葉産の山武杉を使用しています。

# 建築系学科の新しい風に聞く



## 私の事務所と大学の研究室を、できるだけ近いものに……



**山本理顕**

建築学科教授

つい最近まで、かなりの数の大学で非常勤講師をつとめてきたから、建築を学びたいと思っている学生たちの気持ちはある程度分かるつもりです。きっと、かなりのフラストレーションだと思う。私自身、学生時代、建築の勉強をしながら、こんなことやっていいんだろうかという疑問がいつも頭をよぎった。まるでリアリティーを感じられな

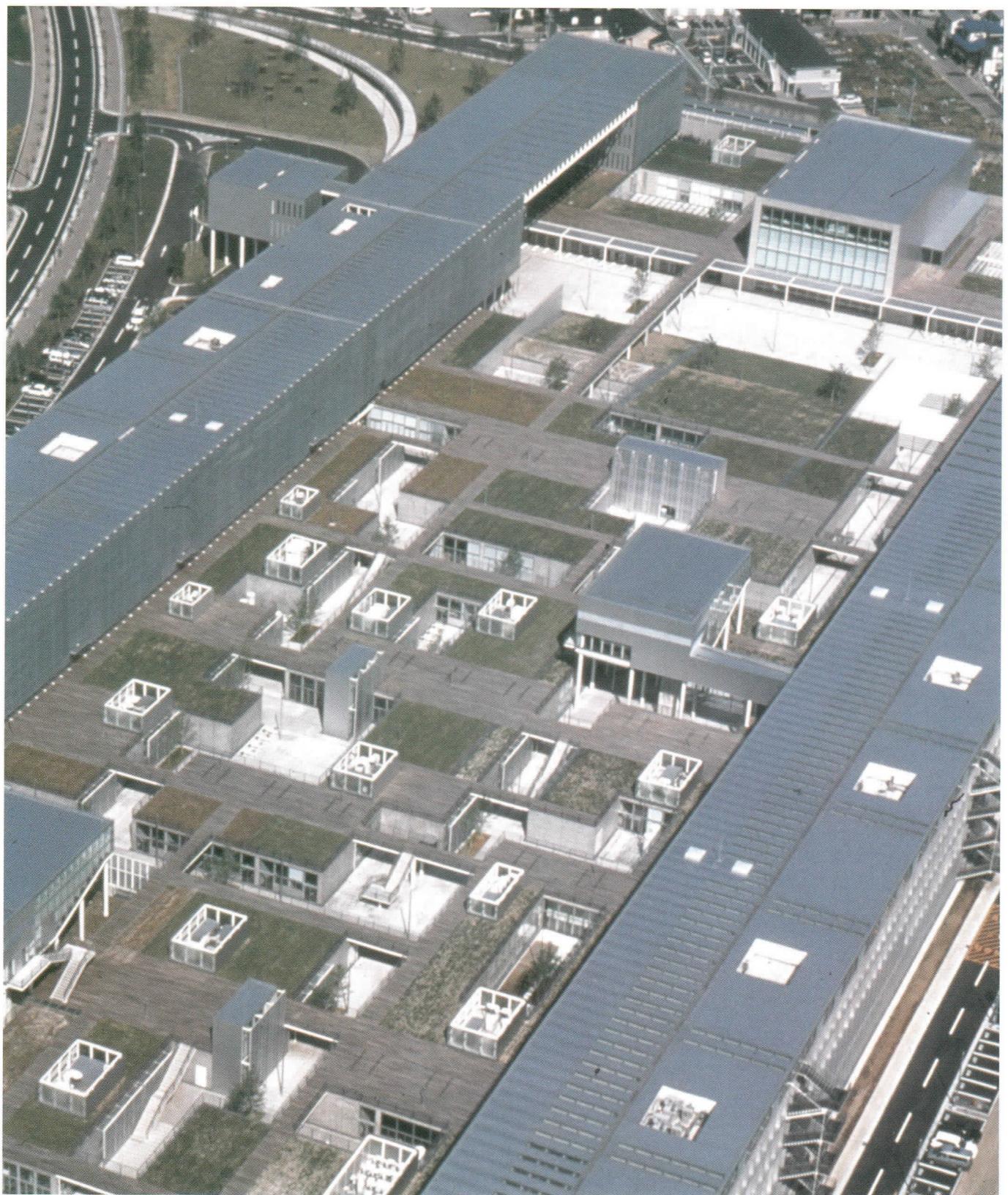
いのである。構造力学、設備、設計製図、もちろんそうした授業が将来、建築を設計するときにきっと役に立つだろうということは分かる。頭では理解できる。でも、実際に建築の設計をする自分というのがどうしてもイメージできないのである。それは遙か彼方の未来の出来事で、それが自分にやってくるのかどうかも分からぬ。どうしたらその未来が現実になるのかも分からぬ。今、多くの学生たちの持っている不安のようなものは多分、当時の私と同じような類のものだと思う。

建築史の勉強をするつもりで大学院に進学したら、大学院研究室で住宅の設計をしている先輩がいた。わずか一年先輩が実際の設計をしている。それを見たときに、なんだ設計なんてこんな身近なものだったのかと思ったのである。小さな住宅だったけど、その小さな住宅にその人の思いがすべて詰め込まれているような住宅だった。その住宅がかっこいいと思った。その人もかっこいいなあと思った。



■公立はこだて未来大学

建築系学科の  
新しい風に聞く



■埼玉県立大学

# 建築系学科の新しい風に聞く



その住宅はその後、当時、学生たちに圧倒的に支持されていた『都市住宅』という雑誌に掲載された。建築の設計があつたという間に私にとって現実的なものになっていた。

できるだけ現実の設計のプロセスを学生たちが体験できるようにしたい。私がここでできることはそうしたことじゃないかと思っている。私の事務所と大学の研究室をできるだけ近いものにしたい。事務所の活動をできるだけ学生たちにも体験してもらいたい。建築が身近なものになってもらいたいと思っている。そのためには研究室で具体的な設計活動をしたいと思う。

## ■山本理顕(やまもと・りけん)

1968年●日本大学理工学部建築学科卒業  
1971年●東京芸術大学大学院美術研究科建築専攻修了  
1973年●山本理顕設計工場設立  
2002年●工学院大学建築学科教授

### 【主な作品】

1991年●熊本県営保田窪第一団地(熊本市)  
1992年～94年●緑園都市駅前商業街区計画  
1996年●岩出山町立岩出山中学校 | 1999年●埼玉県立大学  
2000年●公立はこだて未来大学／広島市西消防署

横浜市営住宅三ツ境ハイツ

2001年●東京ウェルズテクニカルセンター／バンビル

### 【主な受賞】

1988年●1997年度日本建築学会賞作品賞  
1997年●第38回BCS賞 | 1998年●第39回毎日芸術賞  
1999年●1999年度グッドデザイン賞金賞 | 2000年●第41回BCS賞  
2001年●第57回日本芸術院賞／第42回BCS賞  
2002年●2002年日本建築学会賞作品賞／第43回BCS賞

### 【主なコンペティション】

1993年●最優秀賞受賞:岩出山町立統合中学校建設基本設計競技  
1995年●最優秀賞受賞:埼玉県看護福祉大学(仮称)エスキースコンペ  
1996年●最優秀賞受賞:広島市西消防署設計提案競技  
1997年●最優秀賞受賞:(仮称)函館公立大学整備事業設計構想提案  
1999年●最優秀賞受賞:東雲地区開発事業簡易公募型プロポーザル  
2000年●最優秀賞受賞:(仮称)和歌山市立大学設計構想提案競技

最優秀賞受賞:Jian Wai SOHOマスタープランコンペ

2002年●最優秀賞受賞:(仮称)横須賀市美術館・横須賀型資質評価方式  
建築設計候補者選考

最優秀賞受賞:邑楽町役場庁舎等住民参加型設計提案競技

### 【主な著書】

1993年●細胞都市(INAX)／住居論(住まいの図書館出版局)  
1999年●Riken Yamamoto(Birkhauser)  
2001年●システムズ・ストラクチャのディテール  
PLOTO 01(エーディーエー・エディタ・トーキョー)

### 【連絡先】

山本理顕設計工場  
〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸2-7-10 高見澤ビル7階  
☎ 045-323-6010 / Fax. 045-323-6012

## 歓迎！——感性と頭で全力投球できる学生たち



**窪田亜矢**

建築都市デザイン学科講師

### ◆こんにちは、初めまして

2002年4月より、建築都市デザイン学科で新たな研究室を持たせていただきました窪田亜矢です。どうぞよろしくお願いします。大学を出てから、都市計画・設計の実務にも携わりましたが、もう少し「保全」のまちづくりをしたいと思うようになりました、また大学院に戻りました。

### ◆歴史的環境とまちづくり

そういうわけで、この10年間は、主に、歴史的環境の保全を通じたまちづくりをしてきました。歴史的環境といつても、文化財保護法で守られるような地区(たとえば伝統的建造物群保存地区の対象となるような場所)だけでなく、より一般的な市街地にも、継承すべき特質がさまざまあることに大きな関心を抱いています。

たとえば何気ない町並みに散在する、趣のある建物やまちかどを大事にしたり、まちを大きく包み込んでいるような山並み、そのまちのアイデンティティを左右している地形などが、とても大事なことだと思っています。

ニューヨーク市にあるコロンビア大学の大学院で学ぶ機会に恵まれ、ニューヨーク市にあるヒストリック・ディストリクト制度というものに出会いました。これは地区を決めて、その中のすべての建築物を対象として、建築デザインの公開審査を行うものです。まさに今、日本でも、いやすべての都市で求められている、協議型のまちづくりが、あのニューヨークで行われていることに驚きを感じました(拙著、『界隈が活けるニューヨークのまちづくり』／学芸出版社／2002年2月刊にまとめましたので、ご興味がある方は一読していただけると幸いです)。



まちのなかの何気ない良さを継承していくまちづくり、という考えは、現在は広く社会的に共有されていることの

# 建築系学科の 新しい風に聞く

ように思います。しかし、実際の都市計画制度の枠組みではなかなか拒否され、実現しないことが多く、たとえば今回の都市再生法をとっても、開発事業者が少しでも拙速にそして大規模に開発行為を進められるような改正ばかりで、住民からの要望が全く考慮されていません。いくつかの特定のまちの方々とおつきあいしながら、どうすれば、各々のまちに合ったまちづくりが進められるのか、思案しているところです。

## ◆環境問題とまちづくり

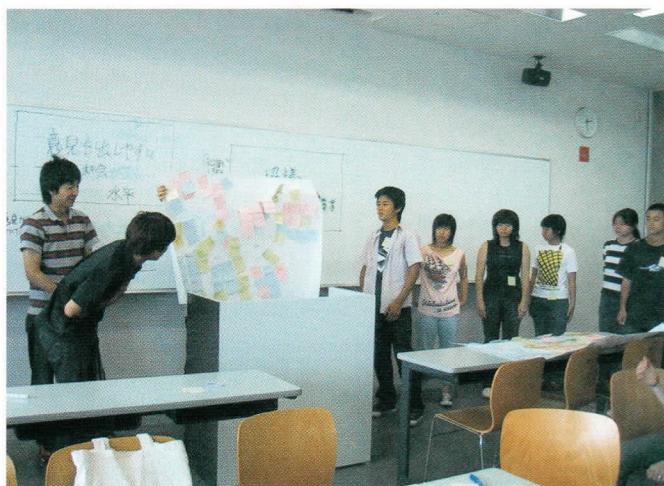
最近は、環境問題を背景として、まちづくりの分野でも持続性をどのように捉えるのか、が問われていると思います。私自身の関心も、そちらに広がりつつあります。特に、昨今、紛争が各地で起こっていますが、超高層マンションなどの新たなビルディングタイプが市街地に及ぼす影響も調査していきたいと思っています。

しかしご存じのように、環境問題をどのように解けるのか、五里霧中の状態です。まずは環境問題を、都市計画・都市デザインの分野において、如何に課題化できるのか、というはじめの一歩を今何とか踏み出したいと考えているところです。

## ◆研究室のテーマ・姿勢

研究室で取り組んでいるテーマは、大きく四つです。

ひとつは、環境都市計画。上記の関心です。ふたつめは、他者から考える都市計画の有り様についてです。現行の都市計画は、それなりの収入を持つ家族層を対象としていて、たとえば路上生活者や外国人、子ども、高齢者、障害者から考えると全く不備なものです。如何に改善の姿があり得るのか、非常に難しい分野ではありますが、野心的に取り



■授業風景より

組みたいと思っています。

また、外部空間の有り様とそれを実現する制度との関係についても研究します。特に路地をはじめとした街路空間の良さは、現行の枠組みでは全く評価されていません。地道な調査を基に大胆な提案を行っていきたいと考えています。

最後に、神楽坂界隈をフィールドにした実践です。やはり現場でひとと話をし、まちを歩くことがすべてのはじまりだと思っています。

□ ■ □

さて、研究室の姿勢ですが、都市計画・都市デザインの分野は、多くの方の合意が欠かせません。たとえ自分の意見が正しかったとしても（なかなか絶対正しいということはありませんが……）、それを多くの方が賛同してくれなければ、実現しません。多くの方の合意を得るためにには、非常に、普遍的な正しい部分と、そのまちに合った特殊解の両方が含まれなければなりません。そのために必要なことは、自分の感性つまり心と、頭だと思います。自分の感性を磨きつつ、その前提となる知識や情報の収集と組み立て、両方をきちんとやる必要があります。

研究室では、そうした両方を全力かけてやりたい、という学生さんを歓迎します。また、OB・OGのみなさまも（まだ全くいませんので！）、こうした問題意識や趣旨に共感していただけたら、若い学生さんに話にいらしていただけると大変ありがたいと思っています。

26階に研究室はあります。どうぞよろしくお願いします（現在、HP作成中です）。



■窪田亜矢（くぼた・あや）

1968年●東京都生まれ（桜蔭高校出身）

1991年●東京大学工学部都市工学科卒業

（都市デザイン研究室）

1993年●同大学院修士課程修了

1993年～1995年●アルテップにて計画、設計業務に従事

1998年●コロンビア大学大学院建築・計画・保全学部修士課程修了

2000年●東京大学大学院博士課程修了

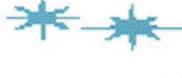
2000年●東京大学都市工学科助手

本学へ講師として着任（4月）

日本不動産学会・湯浅賞受賞

E-mail: ak@cc.kogakuin.ac.jp

# 建築系学科の新しい風に聞く



## Régimeの二つの意味……



中島智章

建築学科講師

本年4月より、建築学科建築コースに西洋建築史など担当の講師として赴任した中島です。私が建築を専攻として選択したのは大学2年生の半ば、建築史の道を選んだのは4年生で鈴木博之先生の研究室に入ったときですが、今にして思えば、あまり大きな声では言えないことに、高校時代、授業の合間に机に寝殿造の鳥瞰図を落書きしていたなんてことも伏線としてあったのかもしれません。

ここ数年は大学院生、また、日本学術振興会特別研究員(PD)として、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻やリエージュ大学コミュニケーション人類学研究所(ベルギー王国)で、フランスおよびベルギー近世建築史研究にあたってきました。一分野として歴史学が確立されているというのが建築学の大きな特徴であり、そのおもしろさを少しでも伝えていきたいと考えております。

この西洋建築史については、現在(2002年8月記)、西洋建築史学の諸先輩方の末席に連なさせていただいて(計7名)、彰国社の『図説テキスト西洋建築史』の企画に参加しています。私の専門外のブツについての諸先生方の知見はもちろん、建築のいろいろな見方に触れることもでき、本の現物はまだですが、後期から始まる西洋建築史の講義でもそういったものを活かしていく予定です。

また、この企画に私から盛り込みたいこととして、建築だけでなく絵画彫刻から劇場芸術や音楽といった諸芸術の輪の中で建築作品を捉えようという狙いがあります。もともとバロック建築なかんずくヴェルサイユ宮殿を研究対象として選んだのも、高校受験の頃よりバッハなどバロック音楽を聴くようになり、特に太陽王ルイ14世の音楽監督リュリの世界に惹かれていたことと無関係ではありません。最近、それが高じて、本年8月16日の朝7時20分からNHK-FMで放送される「あさのバロック」特別編「バロック見聞録」第5回にゲスト出演させていただきました。もちろん、自分の講義にもこういう視点を取り込めたらと思いま

す。

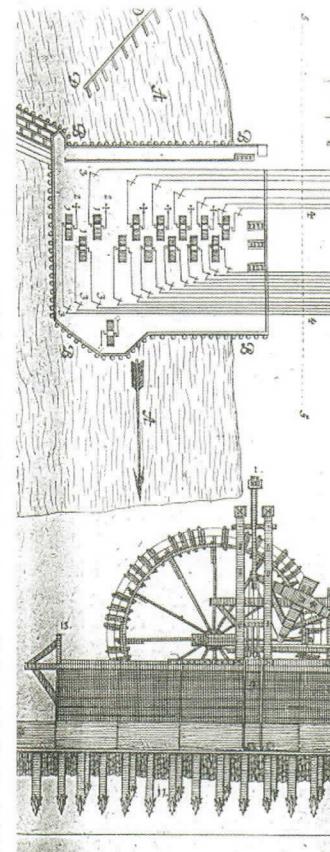
大学教員の今ひとつの活動の柱である研究の方の内容を多少説明させていただくなれば、建築活動が、それを推進しようとする何らかの意志の表れという社会の営みの一つであり、建築家など建築関係者の意図の及ぼすところで展開する場合さえあったことを明らかにするという視点から、ヴェルサイユ宮殿をはじめとするアンシャン・レジーム(旧体制=絶対王政)下の建築と諸権力との関わりに注目しつつ、以下のように系統立てて研究していることになっていきます。

### I. ルイ14世治下のヴェルサイユ宮殿研究

- 1)城館の天井画や庭園彫刻の研究
- 2)ルイ14世自ら編纂した「ヴェルサイユ庭園案内法」に基づく庭園のランドスケープ研究
- 3)宮殿中心部の国王や王妃が使う部分の設計論的研究

### II. 近世ベルギー建築史研究

- 1)当地出身者たちが建設したマルリーの揚水装置(ヴェルサイユ宮殿の噴水のため)についての研究
- 2)ベルギー各地の近世城塞建築や都市防御施設、また、それらの立体模型についての研究



■ヴァイドラー博士によるマルリーの機械の図解(一七三三年)

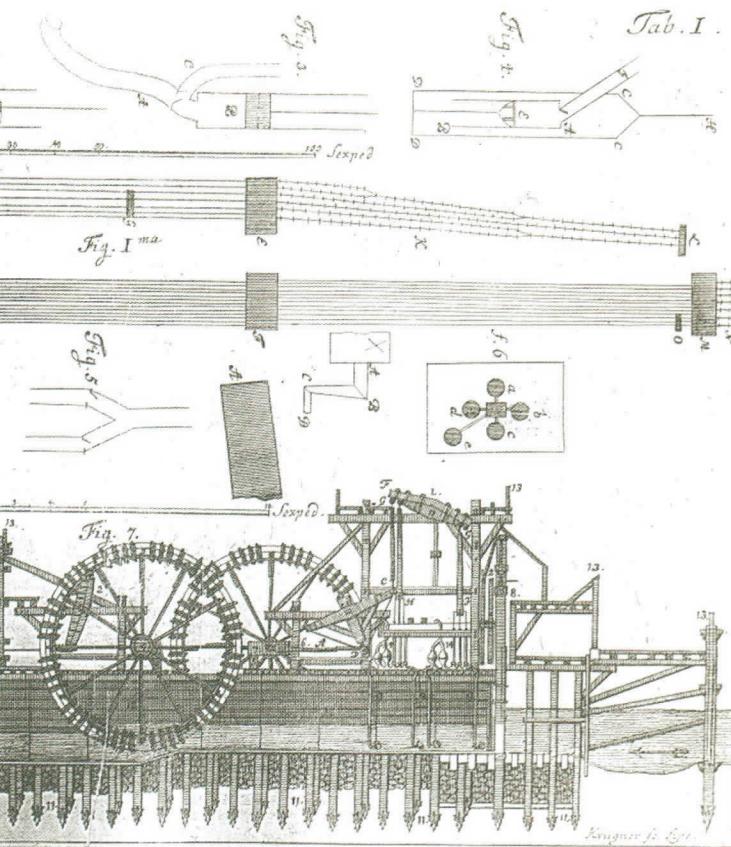
# 建築系学科の 新しい風に聞く

3)リエージュの司教宮殿など現地近世建築についての研究

IとII-1)については日本建築学会計画系論文集や年次大会学術講演などで公にしつつ、それらをまとめて博士論文を執筆しました。それらの大まかな概略として、『週刊朝日百科／世界100都市／第25号／シャルトルとヴェルサイユ』に寄せた「太陽王の権力の館」で2,300字程度にまとめて解説しましたし、本年8月末に発行された日仏工業技術会誌『日仏工業技術』にII-1)についてもう少し詳しく書きましたので、機会がございましたら御覧下さると幸いです。

II-2)と3)は年次大会学術講演ではちばちば発表し始めたところで、これから課題です。これらは実は比較的最近のベルギー留学時代からのテーマで、博士論文はヴェルサイユでいくとしても、その後の研究の柱がもう一本欲しいと目論んで始めました。ベルギーに行ったきっかけは流れの中で得られたものですが、フランス語圏留学というとどの分野でもパリ組が優勢な中、パリ・セントリックではない眼差しを身につけたいと望んだこともあります。

ビールとチョコレートで有名なかの国は、天気が悪いのと日本語が通じないことをのぞけば、酒も甘いものも好きな人にとって天国に近いところで、フランス料理の質とド



イツ料理の量を兼ね備えるというベルギー料理の罠に落ちたこともあり、結果としてとても太ってしまいました。本職に就くにあたって節制を心掛け、今では当時より12~13kg程度減量した、つまり、Ancien Régime建築研究者が、別のregime=ダイエットも研究してみたというわけで……。

以後もこれを維持しつつ、研究・教育活動にあたっていく所存でございますのでよろしくお願ひいたします。

## ■中島智章(なかしま・ともあき)

1970年●福岡市生まれ(ラ・サール高校出身)

1993年●東京大学工学部建築学科卒業

鈴木博之研究室/学士(工学)

1995年●東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士過程修了  
修士(工学)

1998年~2000年●ベルギー王国のリエージュ大学留学

2001年●東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士過程修了  
博士(工学)

2001年~2002年●東京電機大学工学部建築学科講師  
(非常勤)(近代建築史、卒業研究補助)  
日本学術振興会特別研究員(PD)

2002年●工学院大学工学部建築学科講師(西洋建築史など)

【審査付論文(全て単著)】

①「ルイ14世治下のヴェルサイユ宮殿第2次増築の沿革について一関連史料の位置付けと解釈をめぐる諸問題ー」(『日本建築学会計画系論文集』No.522、pp.307-311、1999年8月)

②「ヴェルサイユ宮殿鏡の間の天井画の図像主題の変遷が城館と庭園の関係に及ぼした影響について」(『日本建築学会計画系論文集』No.526、pp.259-263、1999年12月)

③「ルイ14世治下のヴェルサイユ宮殿第2次増築計画の着工案について」(『日本建築学会計画系論文集』No.530、pp.229-233、2000年4月)

④「ルイ14世編『ヴェルサイユ庭園案内法』にみる庭園鑑賞法」(『日本建築学会計画系論文集』No.532、pp.263-267、2000年6月)

⑤「マルリーの機械の構想者をめぐる問題」(『日本建築学会計画系論文集』No.539、pp.271-275、2001年1月)

⑥「ヴェルサイユ宮殿新城館の国王のアバルトマンと太陽神神話一天井画と広間の間取をめぐってー」(『日本建築学会計画系論文集』No.543、pp.275-279、2001年5月)

⑦「ルイ14世編『ヴェルサイユ庭園案内法』に基づいた同庭園の構成分析」(『日本建築学会計画系論文集』No.544、pp.289-293、2001年6月)

⑧「ヴェルサイユ宮殿の王妃のアバルトマンとスペイン領低地地方帰属戦争」(『日本建築学会計画系論文集』No.550、pp.275-279、2001年12月)

【住所】

〒113-0023 東京都文京区向丘2丁目10-12 ユニット202号室

☎ 03-3812-6184

E-mail: dt13029@ccs.kogakuin.ac.jp

URL: http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt13029/

# 建築系学科の新しい風に聞く



**村上正浩**  
建築学科講師

本年4月より、建築学科環境コースに赴任いたしました。昨年3月に学位を取得し(論文題名:木造密集市街地の防災まちづくりの計画手法に関する研究)、その後の1年間はというと、九州大学(福岡県)から山口大学(山口県)そして本学(東京都)への転勤、また本学へ転勤する1週間前に結婚と、慌ただしい日々でした。本学に赴任して4カ月が過ぎ、初めての東京生活と私学勤務にも少しずつ慣れて参りましたが、負うべき責任の重さと自らの非力さを痛感する毎日です。

専門分野は都市防災です。そもそも、『防災』に興味を抱いたのは、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災がきっかけでした。その日、テレビ画面に映し出された、消火のための水がなく大規模な延焼火災が木造密集市街地(以下、木密)のあちこちで拡大を続けている映像、目前で燃え上がる住宅の下敷きになった家族を助け出すことができず泣き叫ぶ姿などは、私の胸に強烈な印象を残しました。そして、「あんな悲惨な都市災害はもう起こしてはならない」、「防災に関わる研究職や仕事に携わりたい」と思ったことを今でも憶えています。

こうした経緯から、木密に現存する消防活動困難区域の解消方策、耐震性貯水槽の最適配置とそれに基づいた木密の改善手法、木密の地震火災の危険性を評価するエキスパートシステムの開発、GIS(地理情報システム)を活用した木密の防災まちづくり支援システムの開発など、地震災害を対象に木密の防災まちづくりについて研究をして参りました。

## ◆研究について

わが国は、有史以来、国土固有の風土的特質からさまざまな自然災害を受け、また伝統的に「木と紙」でつくられた市街地は幾多の大火で壊滅してきたため、防災分野に携わる研究者たる多くの人は、これまで自然災害や火災を中心として、

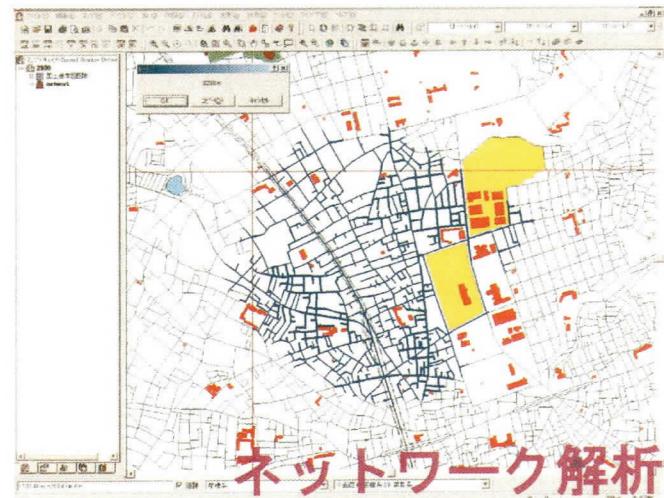
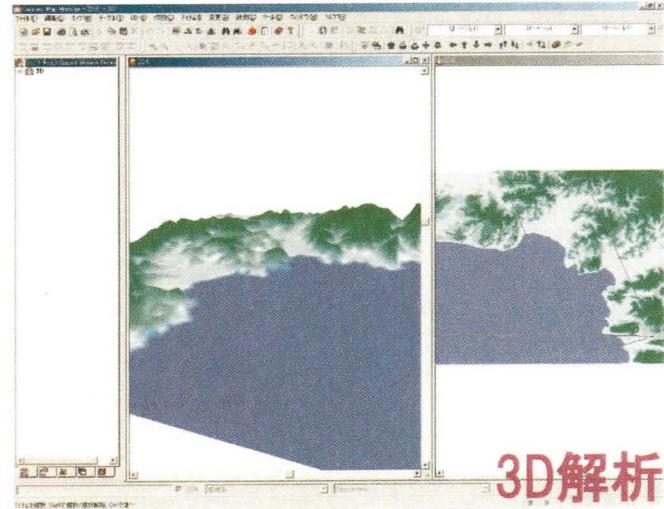
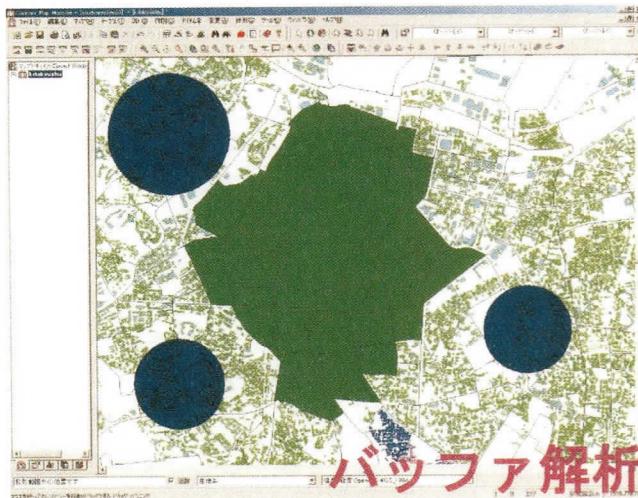
社会的な要請が強いもの、日本に固有のものに主眼を置き、日常的に起こっている災害や事故にはあまり目を向けていませんでした(私自身もそうですが……)。しかしながら、近年の文明や都市の著しい発展に伴い、われわれの身の回りでは、犯罪、交通事故、ヒートアイランド現象、大気汚染、シックハウス症候群といった日常的な災害や事故が増加・多様化してきていますし、また高齢化社会を迎え、高齢者の事故も非常に目立ってきております。安全で安心して快適に暮らせる居住環境を創出していくには、自然災害のような突発的な災害だけでなく、こうした日常災害・事故や時代社会的な要請への対応も含め、総合的かつ学際的に『防災』について考えていく必要があると思います。

本学では、このような視点から研究を進めていき、安全で安心して快適に暮らせる居住環境を創出していくための具体策を導き出していきたいと考えております。現在のところ、警視庁に情報公開の申し立てをし、東京都の犯罪や交通事故に関するデータを収集したり、東京都のホームページから大気汚染や都市内の気温などに関する観測データを収集したり、都庁の情報公開ルームで関連する資料をコピーしたり、区役所に直接赴き自主防災組織に関するデータを収集したり、また東京都の都市基盤デジタルデータを加工・修正し、収集したデータと都市基盤デジタルデータをGIS上で統合したりと、こうした作業に追われております(まだ卒論生が少ないこともあり、私一人では限界がありますし、また犯罪などの個人情報に関わるデータは情報公開をしてもできませんし、なかなか進まないのが現状ですが……)。当面は、犯罪・交通事故・ヒートアイランド・大気汚染および自主防災組織を研究対象として、GISを利活用しながら、マクロな観点から、災害の発生と市街地特性の関連、また自主防災組織の活性度と市街地特性の関連について分析を行っていき、災害や事故が発生しやすい『場』の特性、自主防災のための組織活動が活発化しやすい『場』の特性を明らかにしていきたいと考えております。

## ◆教育について

本学での教育目標は、総合的かつ学際的な防災知識を備えた建築技術者を育成することを目指しています。「地域防災工学(2002年度後期より)」「建築防災(2003年度前期より)」「防災工学(2003年度前期より)」の担当講義では、災害全般を対象として、建築学的側面、都市工学的側面、防災工学的側面、都市社会学的側面、環境心理学的側面、さらに高齢化社会やIT社会への対応といった時代社会的要請を含む、幅広い視点から講義を行っていく予定です。なかなか講義の準備は大変ですが、現在がんばってやっている最中

# 建築系学科の 新しい風に聞く



■ GIS の基本機能

です。

講義内容の詳細などにつきましては、私の研究室のホームページをご覧ください。

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1028/index.htm>

ホームページは作成したばかりで大したものではございませんが、これから修正を加えながら内容を充実させていきたいと思います。今後とも宜しくお願ひいたします。

## ■村上正浩 (むらかみ・まさひろ)

1972年●福岡県行橋市生まれ (福岡県立京都高等学校出身)

1997年●九州大学工学部建築学科卒業

(アーバンデザイン研究室:萩島研究室)

日本建築学会優秀卒業論文賞受賞:論文題名「消防活動困難区域の解消方策に関する基礎的研究」

1999年●九州大学大学院人間環境学研究科修士課程修了

2001年●九州大学大学院人間環境学研究科博士課程修了  
博士 (工学)

2001年～2002年●九州大学大学院非常勤学術研究員

山口大学大学院講師 (中核的研究機関研究員)

### 【住所】

〒182-0021 東京都調布市調布ヶ丘3-2-2 エクセレンテ調布310号

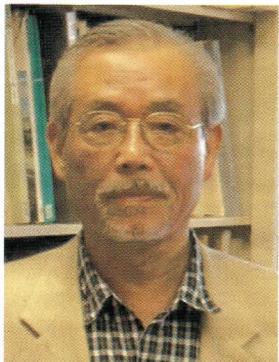
☎ & Fax. 0424-99-2530 / E-mail: murakami@cc.kogakuin.ac.jp

また  
逢  
う  
日  
ま  
で

来春、渡邊定夫先生、水野宏道先生が、定年で退職されます。

永い間、本校のために尽くされたことに感謝を捧げるとともに、  
いつまでもお元気でおられることを、お祈り申し上げます。  
また、お逢いできる日を、楽しみにしています。

## ■渡邊定夫先生



### さあ、建築屋の出番だ 町の棟梁になっていこう

早いものです。私が工学院大学にお世話になって10年がたちました。この10年は、私たちの建設業界の話題でいえば、不景気でバブルの後遺症、つまり見向きもされない土地や借金を抱え、企業倒産の怖れにおののき、仕事量は減り、ろくな時代ではなかったようです。

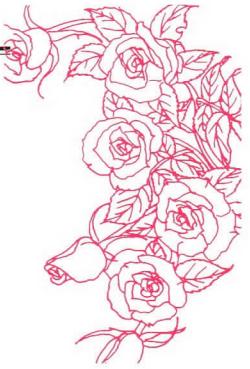
しかし、一方で国民の貯金はこの間に増えました。増えたお金の使い道がなく、物づくりの能力が過剰に余っているのが今の状況のように見えます。尤も、私たちの膨大な貯金は、いつの間にか無断で政府に借りられて終いました。国債に化けたわけです。

最近の話で、都市再生が話題に上っています。都市再生というと、不要になった埋め立て地、工場や政府機関の跡地に、都市計画の規制を撤廃してビルやショッピングセンター、住宅をたくさん建設し景気を浮揚させることのようです。そのためにたくさんの税金を大盤振る舞いするのではありませんから、いまいち盛り上がりに欠けているようですが、悪いことではありません。何しろ建設業界が多少とも潤えば、当座は生き延びられるからです。

わが国は先進国といわれ、経済的生産技術的に依然確たる地位を占めています。しかし、こと住宅、住宅地になると、欧米には敵いません。現在5,300万戸の住宅がありますが、大都市の住宅では、遠距離通勤を強いられる郊外住宅、それでも広い庭園があるわけではありませんが、あるいは都心の狭いマンションが当たり前になっています。それ以外の住宅地では、狭い道路に密集した住宅が防災上の問題を抱えながら、低層木造住宅が普遍的にみられます。このような住宅事情は尋常ではありません。この50年、産業優先、とにかく、金持ちに成りたい一心で築きあげた結果なのです。

国民の大半は中流で、今のところ欧米や幾つかの国にみられるような、所得格差が極端にあるわけではありません。国民に多少の貯金や少しの財産があり、物づくりの能力は十分あるのに、中流の普通の都市住宅は見劣りがする、こんなおかしなことはありません。本当の都市再生はこの当たり前の問題を解決することです。友達や子ども、孫たちを呼んで、時には仕事上の大事なお客さんを呼んで、楽しい集いをもてる程度の住宅が普通の中流です。この程度の住宅と住宅地に造り替えることこそ正に都市再生です。何故なら、社会を主に支える中流のサラリーマンが、住宅ローンを払い続けても、住宅を使って仕事の機会を持ち、生き甲斐を家族と共有し、生活と仕事にやる気がでるからです。

残念なことに、都市再生政策は産業構造を転換し、新しい職業を育てることに関心を持っています。かつてのように重化学工業を育て就業機会を増やし、結果として所得を増やし国民生活を向上させる経路を未だに踏襲しているように見えます。時代は個人の能力を發揮させ、それが経済的活力をもたらす原動力だと、呼ばれている割に政



策の手法は変わっていないのかも知れません。私たちのなげなしの、それこそバブルの時代に蓄えたお金がまたぞろワークホリック社会の再生に向かうかも知れません。

ここは建築屋の出番です。心豊かに安心して住める住宅と住宅地の再生に責任と誠意を持って応えられるのは、建築屋が一番です。建築屋は少々人がよく、少々使命感があり、人付き合いに長け、人の話が聞け、お金はないけれどその方面的の知り合いはあり、理屈っぽいけれど何とか説得しようとする、そのような特徴を持っているからです。

住宅地の小さな街区を美しい住宅環境にしようとします。建築屋はプロジェクトが好きですからすばらしい提案を造るでしょう。住民に見せても結構ですね、言われるだけでしょう。多少話に乗ってくれたとして、地権者は一筋縄ではいきません。中にはおっかない人もいます。権利変換は、その資金は、公的資金助成は、開発主体は、その責任と権限は……などなど、すばらしい提案はことごとく貶され、みるも無惨になります。少しでも再開発の仕事を経験した建築屋なら、先刻ご承知です。

しかし、これで終わりでは建築屋の沽券に関わります。これから建築屋はこうした仕掛けをうまくすることで仕事を獲得するのですから、そのためには仕掛けができる環境を作らねばなりません。この環境づくりこそ都市再生の政策の役割ということになります。そのためには、再開発的、区画整理的手法、あるいは他に用意される事業制度が、既成住宅市街地の再生に必要です。事業の可能性が見えるようでしたらもちろんのことですが、制度運用に必要なわゆる事業経費が賄われなくてはなりません。駅前再開発事業では事業費の2割がこうした費用で

す。ここに政策的な補助費が投入されれば、建築屋は周りにいる人々を糾合して頑張ることができます。

ゼネコンを例に取ると、こうした事業を手がけた人材はたくさんいます。昔取った杵柄の方々は、多くがこれから定年を迎えるいわゆるベビーブーマーの世代で、バブルを担ったベテランです。経験、知識、技術、人脈、何れとっても豊富な経歴を持っています。これから年金生活という自己発見の時間帯を持つわけですから、これらの住宅地型都市再生にとってこれほど適切な人的資源はありません。建築屋は、自分自身もそう言う立場かも知れませんが、半ばボランタリーでまず都市再生の現場に入り、区役所を動かし、あわよくば事業に持ち込み、住民の幸せを創るやり甲斐を仕事にするでしょう。要は町の棟梁になることです。

建築都市デザイン学科の卒業生が平成15年3月に新しく誕生し、世に出ます。卒業生が、先輩たちが築きあげた建築屋という土台の上に、新しい仕事のスタイルを建てあげ、都市の住民に幸せをもたらすよう心から願っています。

## ■水野宏道先生



### 工学院大学での思い出

中堅建設会社で3年間の現場管理を努めた後、1962年（昭和37年）国内留学として大学院へ派遣された。2年後に会社に戻るが、やがて大学へ帰ることになる。恩師である早稲田大学・井上宇市教授のもとで建築設備を本格的に研究し、設計活動を始める契機はこの時に始まる。

東京オリンピックを控え、日本経済は高度成長期に移行し建設需要の急拡大で新分野の建築設備は急成長を遂げる。この時期に、早稲田大学理工学部新校舎、ホテル東光園、山口銀行本店、東京海上本館、萩市民館、千葉県立中央図書館、島根県立中央図書館など多くの設計を手掛け貴重な経験を積んだ。竣工後は必ず実態調査を行い、運用実績と分析、設計への反映に努めた。

早大理工学部新キャンパスの設計は1962年（昭和37年）に始まり、敷地面積44,112m<sup>2</sup>、延床面積65,063m<sup>2</sup>の規模に対し敷地全体のブロック暖房として窒素加圧方式の高温水暖房（120／90℃）で外気補償の温水温度制御を採用し、経済性と省エネルギー性の両立を図った。

下関駅前に計画された全面ガラスの山口銀行本店では多様な負荷、変動に追従出来る二重ダクト方式、冷熱源に



いつまでも、お元気でいて下さい。

650冷凍トンの高温水加熱吸収冷凍機を適用するなど当時としては革新的システムの導入を図った。東京海上本館はわが国超高層建築の草分けであったが、美観論争などで設計が遅れ、軒高も100m以下に抑えられた。

早大理工学部新キャンパスの運転解析、調査を纏めた報文により、空気調和衛生工学会より1971年(昭和46年)度学会賞(第1部・論文)を受賞した。技術士(衛生工学部門・空気調和施設)を取得し、設計を生涯の仕事と考えていた。また、温水を熱媒とする暖房用放熱器能力の資料が皆無で放熱実験を実施したが、この研究が後にライフワークとなる。

■□■

本学の専任講師として赴任したのは大阪万博が開催された1970年(昭和45年)4月で、新宿校舎の西側は淀橋浄水場、旧国鉄新宿駅西口の一部は木造で、広場は一部未舗装だった。

本学はロの字型平面を持つ鉄筋コンクリート校舎で、中庭地階部分に体育館があり、その入口近く建築設備実験室の一隅が私に与えられた研究スペースの全てであった。降雨時はトタン葺屋根の雨音が大きく、室内は湿潤で、野良猫やネズミが時折出没する環境であった。従って、整備された施設をベースとする研究は無理で、簡易な設備を利用した実験研究、学外施設を利用した調査研究が主体となった。実験設備が整う間は出身大学の施設利用で実験研究を行った。旧館4階に研究室が与えられたのは2、3年後のことである。

その後、徐々に放熱器試験が実施できるようになり、系統的研究が軌道に乗り出した。新宿校舎再開発を機に八王子校舎11号館実験室が整備され研究環境は格段に向上した。放熱器の放熱特性は伝熱機構が大きく相違するケーシング付対流形放熱器と放射・対

流形放熱器に分けて研究することが可能となり、屋外空間の暖房効果に関する研究が北海道北広島の実験施設を利用して行われた。

一方、大学が新宿にあることから学協会、官庁関係の委員会に参加する機会が多かった。このうち1980年(昭和55年)度より建設省「総合技術開発プロジェクト」に参加し、設備システムの耐久性確保、保全業務の確立などの作業を行う過程で多くの経験と資料が得られた。また、1988年(昭和63年)より日本ガス協会とコーディネレーションの共同研究を行い、既設システムの運用実績、時間電力・時間熱負荷のデータベース化が実施でき、年間の時間負荷をベースとするシミュレーション手法などを開発し、事業性の適否、システム設計に供した。これらに関する研究、解析、実験、調査、分析などの作業は当研究室の大学院生、卒論生の協力によるものである。当時の若い力と情熱に深く感謝したい。

□■□

1994年(平成6年)度より3年間は大橋秀雄学長の下で教務部長を努めた。事務組織の長としてマネージメント能力が要求されたが、大学運営に関し学長、教員、職員の合意と協力を得て何とか責任を果たすことができた。任期中に「大学の先生と楽しむ理科教室」、「全国高等学校理科・科学クラブ論文募集」の2企画を平成6年度に立上げ、情報工学専攻と図書館の配置換えなどを行なった。

また、「大学入試センター」のセンター試験導入もあり、前年度まで減少していた受験生を大幅に回復できた。入試課長と主要都市の予備校訪問を積極的に行った時期である。事務部長、課長を中心に業務改善、サービス向上などに積極的に取り組み、大学を変える努力が徐々に進行していった。

1999年(平成11年)度から3年間は

常務理事に選出され、施設と八王子校地を担当した。新宿校舎は故障の少ない安定期にあり、建物の各部位、設備の主要構成機器、ダクト、配管、配線などの長寿命化、耐久性向上を維持し安定期をさらに延ばす具体的対策を実施し、併せて年間経常費の削減を強力に推進した。

2001年(平成13年)度には新宿校地、付属中学・高等学校がISO14001の認証取得を果たし、新学科編成に合わせ専門学校のフロアを大改修した。八王子校地は整備途上にあり、新教室棟(C<sup>3</sup>)、115周年記念体育館、産学共同研究センター、地震防災・環境研究センター、付属中学校新校舎などが竣工し、敷地全体の生活排水設備、実験排水設備の再整備、給水設備を独立2系統に分割した改良工事、既存体育館その他の解体工事、駐輪場の仮整備、学生寮の解体時期の確定などが実現し、将来対応への準備を整えた。

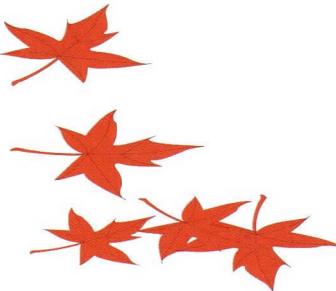
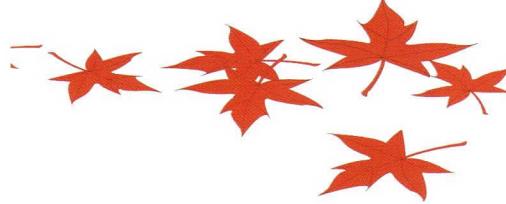
■□■

建築学科は伝統的に明るく開放的で、各教員の個性を互いに尊重する教員組織であり、教員相互の交流を通じ多くを学ぶことができた。「建築は実学である」というのが私の持論であり、教室では実務教育を重視した。若い学生諸君に囲まれた教員生活は大変幸せであった。私の周囲で研究活動を支えてくれた数多くの院生、学部学生であった諸君には深く感謝したい。

教務部長、常務理事を経験させていただき貴重な体験ができたことに感謝するとともに、本学構成員の協力により業務に専念できたことは大きな喜びでもある。

最後に、本学の発展と皆様のご多幸を祈ります。

## 研究室のみんな、元気か~い



●研究室OB・OGたちからの近況です。

### 横田研究室



■ 横田先生近影

横田道夫研究室は、1960年(昭和35年)1月1日、それまで勤められた北大

より来られ、1961年(昭和36年)より1983年(昭和58)3月までの23年間存続し、その内1969年3月までの10年間、杉野福三氏が、後半13年間、大塚毅氏が助手を務め、405名の卒業生を送り出した。

研究室の行事は、山・海・野へのハイキングの後、いわれのある研究室所有の大鍋を囲んでの語らい、横田杯争奪ソフトボール大会などの思い出とともに、今では骨董価値が上がったタイガーパークの「チーン」という音が耳から離れない方も多いのではないでしょうか。

横田先生は1908年(明治41年)4月生まれ、今年で94歳になられます。ヨコタックスはあまりにも有名ですが、

写真のほかスケッチ、陶芸、その他、そして100歳(建築学科教員には100歳まで生きた方がいない)まで生きると、ますますお元気です。

喜寿(120名参加)、傘寿(同80名)、米寿(同60名)、卒寿(同45名)、次は白寿ですが、来年の95歳には、新しい言葉(紅寿)を創り、お祝いしたいと思っています。

(なお、横田研究室についてのお問い合わせは、大塚まで)

記:大塚 毅 (1967年卒業/望月研究室)

【連絡先】

工学院大学建築学科・大塚研究室

〒163-8677 東京都新宿区西新宿1-24-2

☎ 03-3342-1211(代)

### 今泉研究室

今泉勝吉教授は1994年(平成6年)3月をもって、工学院大学を退職されました。今泉研究室の門をたたき、輩出した総数は17期・約300名くらいになると思います。

年齢層も30~46歳以上の方々が、ある人は社長になったり、ある人はまんねり平社員であったり、また建築業界とはまったく関係がない職場で汗を流している方々……きっと、さまざまところで頑張っているのではないかと思います。

また、今泉先生も現役以上に多忙な毎日を過ごしておられます。研究室がなくなりて8年になろうとしていますが、その間2回ほどKZK会(今泉先生を囲む会:写真参照)が開催されたと思います。

この会は継続的な開催を期待しているのですが、期待だけでは難しいもの

です。

当時の幹事たちは、43歳以上が中心であり会社の中枢を担うような立場になってくると仕事などに追われ、ほとんど再会の声がかからないのが現状のようです。

KZK会などの再会を行うにしても、皆さんとの連絡ができることが先決ですので、小生のアドレスに連絡先や現

況などを寄せいただければ幸いで

記:飯島敏夫 (1979年卒業)

【連絡先/勤務先】

日本住宅・木材技術センター

〒107-0052 東京都港区赤坂2-2-19

☎ 03-3589-1797

E-mail:t-iijima@howtec.or.jp





●研究室OB・OGたちからの近況です。

## 保岡研究室

久方ぶりに同期の友人から連絡があり、本誌への寄稿の依頼を受けました。

卒業後はや30年、保岡先生もすでに他界されてからすでに15年が経ち(1987年(昭和62年)10月に亡くなられました)。先輩諸兄との連絡もほとんど途絶えた状況です。

その間、業界の荒波に私も含め翻弄され続けている方も多いと思います。その後皆さんはいかがされているでしょうか?

先日、友人と会ったおりの話ですが、保岡先生が他界された後に同期の仲間でお墓参りに行きましたが、今そのお寺がわからない。すっかり変わってしまった愛宕山界隈を探しに歩こうなどと話しておりましたが、先日その友人から連絡があり、探し当てたとのことでしたので、仲間を誘いお参りにでもと考えています。

子供たちが当時の自分たちと同じ世代に差し掛かった今、改めて当時を思い出しそういうこと自体、歳をとった証拠といわれそうですが反面まだまだとも思うこの頃です。

世の中も復活するべく、がんばっている様子、ここで改めて保岡研究室の会も復活できればと考えています。順次名簿の再作成など整備していきたいと思いますので、本誌を御覧になられた先輩諸兄よりのご連絡をお待ちしております。

### 記:山口秀樹 (1972年卒業)

【連絡先／勤務先】

ホーメスト東京支店・建築課

〒151-8585 東京都渋谷区代々木2-11-17

☎ 03-3370-1346 / Fax.03-3370-1715

E-mail: hi\_yamaguchi@homest.co.jp

研究室のみんな、  
元気か~い

## 中島(康)研究室

恩師、中島康孝教授が工学院大学を退任され、1年余が経過しました。

2001年(平成13年)3月24日に開催されました「退任記念講演(最終講義)」および「退任記念祝賀会」が、総勢250名を超える関係者の出席のもと、和やかな雰囲気のなか盛大に催されましたことは、OBの皆様方にとって記憶に新しいかと思います。

また、同年12月に発刊した記念誌「つのはづの記」は、中島先生の業績、および先生とOBとの交流の歴史の集成として、多くの方々から高く評価いただきました。

なお、中島先生と大橋一正先生の両研究室を中心としたOB会「つのはづ会」はOB全員を対象とした「総会」と、各学年の幹事を対象とした「学年幹事会」を毎年、交互に開催しています。ちなみに、次回の総会は2003年(平成15年)5月が予定されています。

本年5月25日に開催した学年幹事会では、OB会名簿の充実と、会員相互の情報交換システム構築検討ワーキンググループの発足が議題となりました。ワーキンググループでは、会員向けホームページの開設などの検討を予定しておりますので、遠方に在勤のため記念講演・祝賀会に残念ながら参加できませんでしたOB各位を含めまして、中島先生が退任されてなおりますますOB会の発展と会員の結束を期待しております。

### 記:西尾新一 (1990年3月卒業)

【連絡先／勤務先】

三井建設・技術研究所

〒270-0132 千葉県流山市駒木518-1

☎ 04-7140-5207 / Fax.04-7140-5218

E-mail: shin-ichinishio@mcc.co.jp

# 建築系学科 Home Page の紹介

2002年(平成14年)8月現在、編集部で確認できたHome Pageは、建築都市デザイン学科8件、建築学科10件、OB研究室2件がありました。それぞれのHome Pageのアドレスをご紹介しますので、皆様直接ご覧下さい。

追加のHome Page、およびOBの皆様の関係するHome Pageで会員相互の参考になりそうなものがございましたら、NICHE編集部までご連絡下さい。連絡先E-mail : dk01001@ccs.kogakuin.ac.jp



遠藤研究室● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1018/>

## 小野里研究室

Onozato Laboratory

工学院大学  
建築都市デザイン学科

7月21日 Linkにクレモネ橋造研究所を追加  
7月26日 「卒業論文 実験班」についてUPしました



TOPICS  
02.6.15 UP 最新情報  
INTRODUCTION  
02.5.25 UP 研究室  
WORKS  
'02.7.12 UP 学会・論文  
'02.7.01 UP 研究紹介  
掲示板  
望月間研究室OB連絡掲示板  
LINK  
02.7.21 UP Link

小野里研究室● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1026/>



沢岡研● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1021/>

## 大橋研究室 -Ohashi Laboratory-

Last update 2002/7/4

### Contents

2002/7/4 「お知らせ」に大橋研究室説明会の案内を追加しました。

#### 更新履歴

ホームページの更新履歴です。  
大橋研究室の研究の進め方や考え方について、大橋先生と大学院生からのメッセージ。  
お知らせ  
研究内容  
リンク  
お問合せ  
卒業生



【自然エネルギー利用システムにおける大橋放射冷却に関する研究】  
大気放射量短時間測定装置

大橋研究室● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt72069/>

## 工学院大学後藤研究室

東京都新宿区西新宿1-24-2 2672室 TEL. 03(3340)3565

OGOTO lab.

HOME | 研究室紹介 | 優秀助教授 | 師承表 | LINK

最終更新 02.07.31

記事 潤井



■ 特集 一瀬辺彦兵衛商店  
築年 正大、4年  
木造、平屋建、和小屋、寄棟  
道・鉄板葺  
上屋 築年 18世紀末  
土蔵造、和小屋、切妻造、鉄  
板葺  
下屋 築年 19世紀初  
土蔵造、和小屋、切妻造、鉄  
板葺

#### ■ 研究活動

Copyright (c) 1999-2002 Ogoto lab. All Rights Reserved

後藤研究室● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwa1023/>

menu  
Last Update  
2002.07.24

top...  
what's new  
topics...  
people...  
works...  
lectures...  
seminars...  
BBS...  
links...

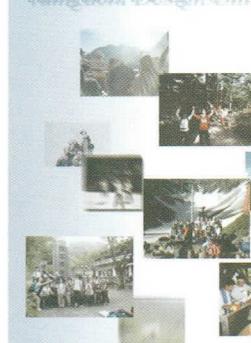
Copyright (C) 2000  
Taniguchi Design Unit  
Department of  
Design in Architecture  
and Urbanism  
Faculty of Engineering  
Kogakuin University  
All rights reserved.  
e-mail: [sawo1022](mailto:sawo1022)

## Taniguchi Design Unit on WWW

Department of Design in Architecture and Urbanism Faculty of Engineering Kogakuin University  
http://www.kogakuin.ac.jp/~taniguchi/

TODAY 42  
TOTAL 49886  
since2000.05.24

### Taniguchi Design Unit



今年の合宿は、八ヶ岳に行きました！  
誰でも、参加OKです。  
日にちは、8月1日㈭～19日㈮。

谷口研究室のみんなもちらん全員参加します！

谷口研究室に興味のある3年生はじめ参加して谷口の先輩と仲良くなつてはいかがでしょうか？

3年生の参加を待ちにしています！

一昨年の楽しかった合宿  
(上高地：貴婦高台)

谷口研究室● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1022/>

# 建築系学科Home Pageの紹介



このページの最終更新は、2002/07/25です。  
Welcome to Nozawa Lab's Homepage



ようこそ野澤研究室のホームページへ

5927

お祝いの訪問者です。

## 【野澤研究室からのお知らせ】

1部3年生のセミナーについては、7月25日に全体説明会がありますが、さらに話を聞きたい学生は研究室を訪ねてみてください。ただし、夏休み期間中は対応できる日・できない日がありますので、あしからずご了承下さい。

2002年7月に行われた、IFHP (International Federation for Housing and Planning: 国際住宅・都市計画連合) 主催の国際学生コンペティションにおいて、野澤研究室と准優秀賞の大学学生で構成される4人グループの提案が、世界1等を受賞しました。本人たちもすばやく喜んでいました。本当にうれしかった快樂！！！です。ここにご報告します。詳説は[こちらへ](#)。

\*\*\*\*\*

野澤研究室は、1995年4月にできました。現在は、建築学科ではなく、1999年4月に開設された建築都市デザイン学科に属し、新宿校舎2階6号室で活動しています（99年4月に2671室から移転しました）。連絡先は[こちらへ](#)。

■学生への連絡事項■	■メンバー紹介■	■論文・設計リスト■
■野澤助教授 講義シラバス■	■IFHP国際コンペ結果報告■	■セミナーを希望する3年生へ■
■野澤研究室2001-2002活動記録■	■2002年二期期試験データ■	■最初のページに戻る■
■最初のページに戻る■	■管理者メールを出す■	

野澤研究室 ● [http://giants.cc.kogakuin.ac.jp/nozawa\\_lab/](http://giants.cc.kogakuin.ac.jp/nozawa_lab/)

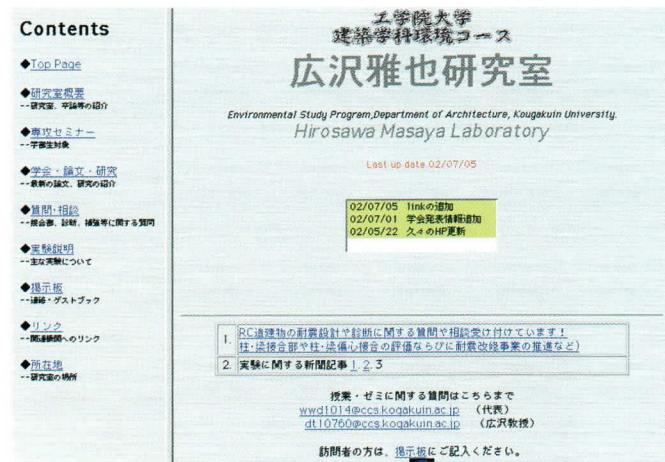
中島研究室 ● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt13029/>



野部研究室 ● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Edt13006/>



初田研究室 ● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1015/>



広沢研究室 ● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1014/>

久田研究室 ● <http://kouzou.cc.kogakuin.ac.jp/>



水野研究室 ● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1013/>

宮澤研究室 ● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1019/>

望月(大)研究室 ● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/wwd1011/>

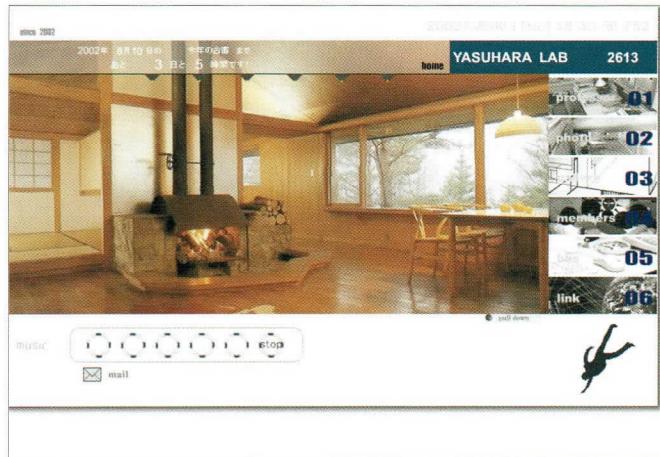


宮城研究室 ● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1017/>

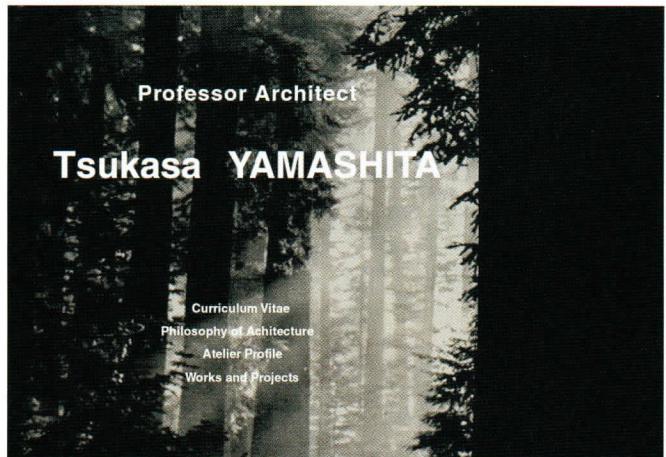
村上研究室 ● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1028/index.htm>

望月(大)研究室 ● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt61124/main.html>

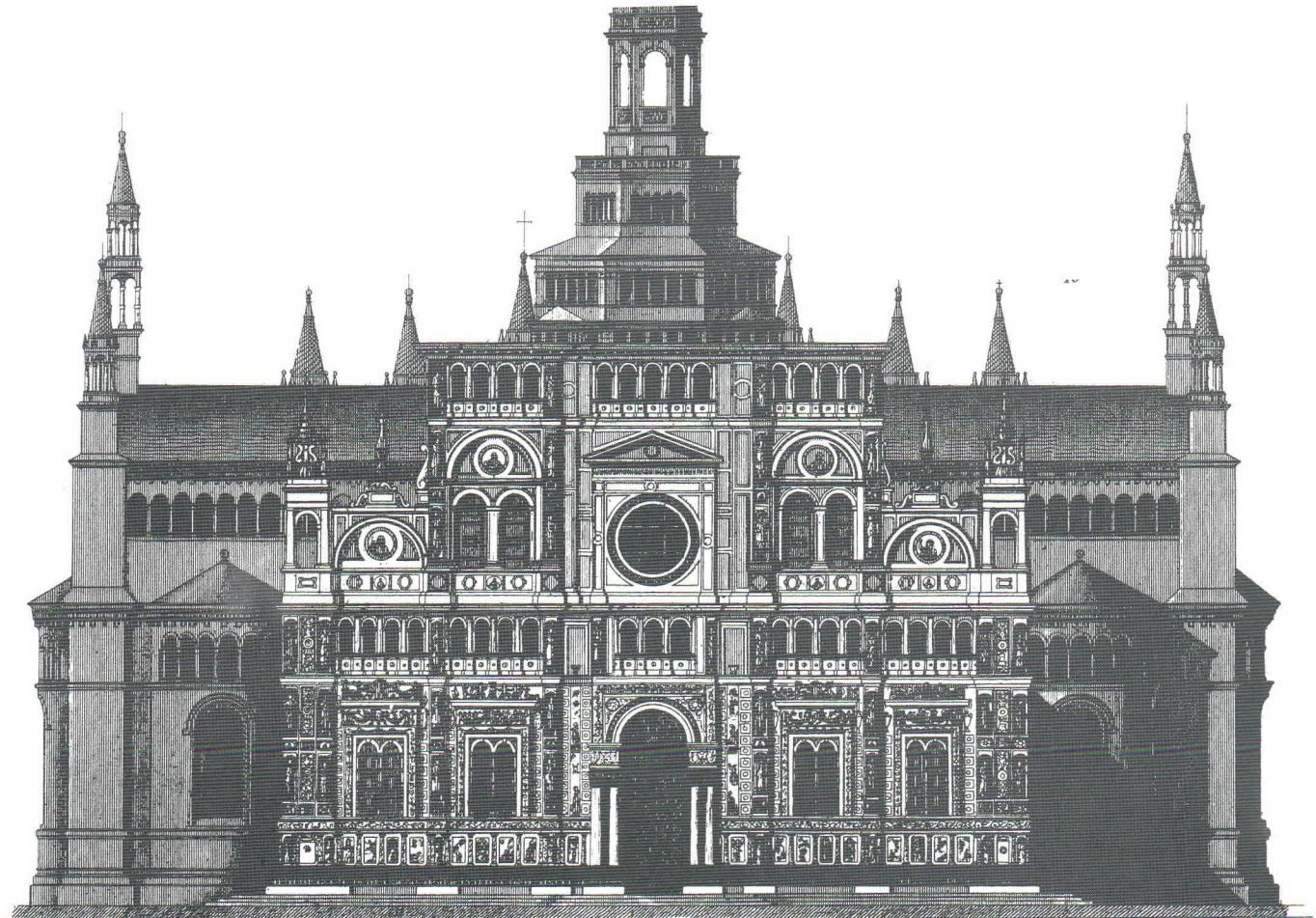
# 建築系学科Home Pageの紹介



安原研究室 ● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/%7Ewwd1016/>



山下(司)研究室 ● <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1023/>



# 学／科／だ／よ／り

校友会のホームページ・アドレス……<http://www.mesh.ne.jp/kkyoyukai/>

●本部役員宛てメール・アドレス……………kkyoyukai@mx5.mesh.ne.jp

●事務局宛てメール・アドレス……………koyujimu@mx6.mesh.ne.jp

建築学科同窓会のホームページもありますので、皆様からのご意見・ご要望をお待ちしております。

## ご無沙汰しています—1

### 建築学科の近況



**吉田倬郎**

建築学科主任教授

#### ●ただいま複雑な建築系学科の構成

建築学科が、建築学科と建築都市デザイン学科の2つの学科に分かれて、今年は4年目になります。また、建築学科に、建築コースと環境コースの2つのコースを設けて、3年目になります。そして、2つの学科に分かれる前の入学生も少なからずいます。当然ながら、それぞれ、カリキュラムが異なります。留年した学生が新学期の時間割をみて、受講すべき科目が見あたらず、あわてて学科事務室に駆け込み、幹事の先生が対応にてんてこ舞いする、といったこともあったようです。

#### ●専任教員の入れ替わり

専任教員の入れ替わりも、昨年に続いて多い年になりました。退職されたのは、山下司教授と、南迫哲也教授です。皆様ご存知のように、お二方とも本学建築学科には、草創の頃からご縁のある方で、しかもお二方が最後です。山下先生は、ご退職後も、相変わらず設計活動に忙しくされています。南迫先生は、長年取り組んできた自由学園明日館の修理保存が昨年完成し、ただいまこれに関連してお忙しそうです。お二方ともこの春、名誉教授になられましたが、今後ともご健在でご活躍ください、私どもを励まし続けていただきたいものです。

新任教員は、建築系全体で4名です。まず、建築学科建築コースに着任された山本理顕教授は、ただいま日本の建築設計界を代表する建築家の一人として、国際的にご活躍中の方です。この4月から本学教授として、設計活動に新たな境地を開いていただくとともに後進の指導にご尽力いたたくこととなりましたが、今後の一層のご活躍を期待し

ています。

後の三方は、いずれも気鋭の若い先生です。建築学科建築コースの中島智章講師は建築史と建築設計、建築学科環境コースの村上正浩講師は防災工学、建築都市デザイン学科の窪田亜矢講師は都市計画が、主たる担当分野です。若い情熱とエネルギーを、教育と研究に存分に注いでくださることが期待されます。そして、昨年を含めると8名の新任教員をお迎えしたことになりますが、これは全体の1/4に相当します。また、窪田先生は、建築系では初めての女性教員です。これらの先生方を含め、建築系の教員一同は、厳しい状況を克服し将来のあるべき方向を見いだすべく、ただいまさまざまな検討を重ねています。

#### ●施設の整備

この数年、八王子キャンパスは、16号館、体育館などの整備が進んでいますが、この春には、11号館の増築と、产学共同研究センターが竣工しました。11号館は、もともと建築系の研究実験施設ですが、文部科学省の学術フロンティア推進事業に全学スケールの態勢で応募し採択され、増築が実現されました。この4月から、地震防災・環境研究センター(EEC)として、早速、活用されています。

建築関係では、構造実験、環境設備実験、材料実験の設備が飛躍的に充実しました。产学共同研究センターは、地域との連携を意識した产学共同研究の拠点となるべき施設としてテニスコートの跡地に建設され、やはりこの4月から活動を開始しました。ただいま化学系や機械系の利用が盛んです。今後は建築系も大いに活用したいものです。

(吉田倬郎:1965年／高知学芸高校卒業)

## ご無沙汰しています—2

### 建築都市デザイン学科の近況



渡邊定夫

建築都市デザイン学科主任教授

#### ●新しい問題

今日の大学教育を巡る大きな問題は、少子化による入学人口の激減です。大学経営の基盤を揺るがす大きく深刻な問題です。幸いにして建築系学科は、現在のところ定員割れしておりません。建築の生産量が減少していくことを考えると、建築技術者の需要は減っていくことが容易に予想できるわけですから、従来と同じような建築技術者を養成していくのであれば、やがて定員割れすることになります。100年をこえる伝統ある建築学科を潰すわけには参りません。

建築技術の業務サービスは、何も建築生産に関すること、設計や施工、維持管理に限られる必要はないわけですから、建築を中心に据えて新しい業務を広げることを予想しつつ、それに必要な人材教育を決意すること、建築教育の間口を広げることが、何より重要になります。建築の経営、街のマネジメント、建築の廃棄物処理や資源流通管理などなど、社会の中の建築を広く捉えた教育プログラムを提供する必要があるわけです。

建築・都市を物づくりの面からとらえ、技術者を育成するばかりでなく、人びとの生活を支えるサービス提供の場である建築が都市のはたらきに注目したことづくりの面を重視します。

一方では建築技術者の資質向上が求められています。国際化の問題です。特に建築家、建築技術者の資格とその内容を国際的に比較してみると、わが国の建築教育の水準は国際的にとり分け高いものではありません。むしろ、教育年限の点からは低いといわれています。また、設計実務に関する教育、職業倫理、英語を含むコミュニケーション教育、いわば専門職業教育に、甚だ不足する部分があることは否定できません。

これから建築職業教育には、国際的に活躍する職業人育成を目指す必要があると考えています。そのため、学部と大学院を繋いだ一貫教育が必須ということになるかも知れません。おそらく、教育年限は延ばすことになるでしょう。



いずれにしても、これから100年、新しい工学院大学の建築は大きく様変わりするだろうと思います。こうした意味で、本大学では技術者、資格者に対して継続的職能研修プログラムを立ち上げます。

建築系がその第1号のプログラムを開設運営します。テーマは、住宅の品質評価です。これから必要になる職能リフレッシュ研修に、同窓生諸氏の意見、提案を歓迎します。

## で無沙汰しています—3

### 第2部の近況



**宇田川光弘**  
建築学科第2部主任

高層ビルの新宿校舎が、完成して今年で11年目をむかえます。今年の1年生は96人で、昨年とほぼ同じ人数です。1学年学生定員の110人より1割程度少ない人数ですが、新生は1年生のみではなく、2年生、3年生の編入学者もおります。編入学の諸君は、他大学あるいは本学他学科の卒業生で、学士入学者です。他の分野の学士号を持ち社会人として自立しながら、2部で学んで建築の専門を修得しようという意欲溢れる学生諸君です。学生の構成として、高校からの直接的な進学者に加え、学士入学者が定着してきたのは、2部建築学科の特徴の一つであり、さまざまな年齢、経験の学生が、同じ教室で授業を受ける雰囲気は、1部にはない活気が感じられます。

学士入学による社会人入学者について述べましたが、入学者選抜、いわゆる入試の方法も変わりつつあります。従来の2部の入学試験は、本学で実施する入学試験1本でしたが、センター試験による入試も導入しました。センター入試は、今年度入試（すなわち現新入生に対する入試）から導入されたもので、全国の国立、公立大学と相当数の私立大学が参加しているセンター試験に、本学2部も参加いたしました。この試験による受験者は、本学独自の入試は受ける必要はなく、願書を提出すれば、センター試験の得点によって選抜される制度です。また、試験による入学の他、推薦入学も実施しています。

このように、多様な入学制度によって入学した学生が建

築の専門教育を受ける場が、最近の2部建築学科であり、まさに夜間に学ぶという制約を最大限生かしているといえます。

多様な経験をもつ学生を対象とするため、現在のカリキュラムにおいては、専門科目はすべて選択科目になっております。学生は、自分の進もうとする建築の専門分野の科目を集中的に学ぶこともできるし、広く建築一般を学ぶこともできます。建築設計系の科目や卒業論文、卒業計画に相当する科目も選択科目であり、学生それぞれの目標にあったカリキュラムを自ら作成することが可能な制度となっています。

卒業後の進路については、就職状況は、全般には建設業界不況の影響をまともに受け厳しい状況にあります。しかしながら、インターネットを利用した求人も定着しつつあり、熱心に就職活動を行えば、希望どおりの就職先を射止めの例も多くあります。大学院進学については、推薦入学の制度も導入され、進学意欲のある学生への道が開けています。

ここ数年の専任教員の構成では、定年退職された先生方にかわり若手教員の比率が高くなっています。昨年度には山下司先生、南迫哲哉先生が定年退職されましたが、新たに新進気鋭の中島智章（建築史）、窪田亜矢（都市計画）、村上正浩（環境防災）の若手教員が着任しました。彼ら新任教員を交え、教員一同、2部の多様な学生に対する建築教育に邁進しています。

## ご無沙汰しています—4

### 大学院建築学専攻の近況



廣澤雅也

大学院建築学専攻運営委員

#### ●30人の教員が134人の院生を指導しています

建築学専攻修士課程の定員は40名ですが、現在の在席者は他科にくらべてかなり多く、修士1年が52名、2年が72名であり、学部生(建築学科180人、建築都市デザイン学科70人の定員)約300人の20%内外が進学していることになります。これに対し、教員の方は特別専任や客員教授も含め合計30人が指導にあたっていますが、分野別に見るとデザイン系、計画・歴史系や構造系の研究室に所属する学生が多いようです。また、他大学出身者や社会人入学者も毎年おおよそ1割前後含まれています。

また、博士課程の入学生も次第に増えてきており、今年3名の入学者を含め合計10名となっています。一方、平成14年度から教員として二人の高名な先生をお招きすることができました。鋼構造が御専門の東京大学名誉教授の高梨晃一先生、建築設計の分野で多数の受賞をされている山本理顕先生で、お二人には早速、大学院で講義や設計の指導をしていただいています。また、後述のように、教育施設や研究施設が着々と充実してきており、優秀な学生が育ってきていますが、昨今の建設不況のあおりもあって、院生の就職もこれまでにくらべると楽ではないのが正直な所です。

#### ●技術系の新しい実験棟ができました

平成13年度には院生室や院生用の設計室が整備された他、技術系の研究施設として新しい大きな実験棟(ニックネームEEC棟)が建設されました。新しい実験棟は文部科学省の学術フロンティア推進事業の一つとして平成13年度から5ヶ年計画として採択された研究プロジェクト「地震防災および環境共生に関する新技術の研究開発」の推進のため、建築地震防災、環境共生型建築生産技術および居住環境技術分野の実験施設として、八王子校舎の建築系実験施設である11号館の北側に地上5階建、延床面積2,653m<sup>2</sup>の規模で計画され、平成14年3月に竣工しました(なお、本プロジェクト関連施設としてはこのEEC棟の他、機械および電気分野の地震防災用実験施設として、既存の8号館の中に中型振動台が設置されています)。

この研究棟の主な実験施設は、実大の3階建木造住宅の破壊実験が可能な大型加力実験室や光や熱などの居住環境システムの制御が可能

な実大環境実験室および耐久性実験室などとなっています。

このプロジェクトでは、上記の諸分野の研究に加え、都市・建築の環境共生性に関する評価システムの研究も予定しており、構造、環境、生産および都市分野の教員15人がこの研究に参加しています。これらの研究開発の実施に対して、5年間で総額約3億円の研究費が文部科学省と大学から支出されることになっており、この研究に参加している教員の研究室では、修士課程や博士課程の院生の多くの人が関連研究に従事することになります。なお、この研究プロジェクトの実施に際しては、多くの分野で産官学の共同研究の企画が推奨されており、OB各位におかれましても、関連分野の計画をお持ちの方は、教員に声をかけていただけますようお願いする次第です。

#### ●修士課程の講義と論文や作品の傾向

近年における各方面的技術の進歩や社会経済の発展は建築分野にも大きな影響をもたらしており、専門技術者として修得すべき技術も次第に拡大、精緻化し講義内容も飛躍的に増大せざるを得ないような状況です。その反面、地球環境の汚染や生態系の破壊などの社会問題が顕在化し、近年では建築分野でも省資源や環境対応技術が大きな課題となっています。

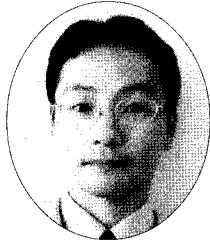
さらには、著しい高齢化やコンピュータ技術の高度利用など、習得すべき技術には限度はありません。こんな中で、修論や修士論文作品のテーマも近年では、既存建物の再評価、リユースや耐震改修、高齢化、環境共生などの関連テーマが多くなっています。また、院生も卒業後修得したテーマに関連する分野の仕事に就くことが多くなっています。

#### ●学位の取得

一昨年は、課程博士5名、論文博士4名と多勢の方々が学位を取得されました。昨年は望月洵研究室OBの竹原雅夫さんが「有開口耐震壁の強度の評価に関する研究」というテーマで論文博士をおとりになりました。竹原さんは本学専門学校で教鞭をおとりになるかたわら、望月洵先生とご一緒に卒論生、修論生の指導にあたり、その集大成として今回の論文をまとめられたものです。OB各位におかれましても、学部や修士修了後、研鑽を積まれておられる方は、社会人博士課程入学や論文博士取得に挑戦されては如何ですか?

## ご無沙汰しています—5

### 2002年度大学入試について



久田嘉章  
建築系学科入試委員

安原治機先生とともに建築系学科の入試委員をしています久田です。2002年度の入試状況について簡単に報告させていただきます。昨年同様、工学院大学の入試状況は一段と厳しくなっています。原因は18歳人口の減少、理科離れ、長引く不況による併願数の減少などが考えられますが、より魅力ある大学に変貌するため緊急な対策が急がれます。

1部の総受験者数は2001年度が1万2,550名から2002年度が1万974名と1割以上、減少しています。建築系学科では、まず建築学科は昨年度から建築コース(2003年度からは建築学コース)と環境コース(同・環境建築コース)に分かれていますが、2001年度の受験者数は2,450名から2002年度2,382名と幸いにして微減に留まりました。

特に、認知度が低く昨年度受験者集めに苦労した環境

コースは、今年度では受験者数は改善されてきています(405名から583名へ)。一方、建築都市デザイン学科では、2001年度の受験者数は1,533名から2002年度1,062名と残念ながら約3割近くも減少しています。

2部の入試状況は、1部が入学しやすくなっている状況の中で近年一段と厳しさを増していますが、総受験者数では2001年度は257名でしたが、2002年度には大学入試センター利用を新たに導入したこともあり、412名と6割以上増加しています。2部建築学科では、2002年度92名から2002年度125名と増加しています。特に建築学科の場合、一般入試だけでなく、社会人特別選抜と編入学による入学者は50名近くおり、社会に開かれた都心型大学としての役割を果たしています。

2003年度の入試種別は下の表に示す通りで、昨年度と同様です。受験生も多様化しつつあり、入試方法もそれに伴いさまざまな種別を設けています。特に2001年に新設された機械系の国際基礎工学科では、海外帰国子女特別入学や自己PR入試(AO型入試)などをとりいれ、多様な受験生の確保を試みています。建築系学科では、2001年度に受験生集めに苦労した建築学科・環境コースでは、内容が分かりにくくと不評だったコース名を2003年度からは環境建築コースと改め、さらにB指定校制度というコース単位の指定校制度を開始し、独自の受験生確保を試みています。詳細な入試情報は大学のホームページをご参照ください。<http://www.kogakuin.ac.jp/>

30名以上の教員を抱える工学院大学建築系学科は、他のどの大学にも負けない多彩で内容の充実したカリキュラムを用意していると自負しています。皆様やお知り合いのご子息・ご息女が大学受験を検討する際、ぜひご考慮いただければ幸いです。

#### ■ 2003年度・工学院大学入試種別

	入試種別	募集人員	選考方法・試験科目	入試種別	募集人員
第1部	学士編入学	若干名	書類審査(建築系は小論文)と面接	編入学	90名
	海外帰国子女特別入学	若干名	国際基礎工学科のみ	指定校制推薦	40名
	自己PR入試(AO型入試)	若干名	国際基礎工学科のみ	公募制推薦	45名
	指定校制推薦	184名	書類審査と面接(建築都市デザイン学科はスケッチも)	本学専門学校推薦	若干名
	理科論文推薦	若干名	書類審査、プレゼンテーション、面接	付属高校推薦	20名
	付属高校推薦	145名	書類審査と面接	社会人特別選抜	85名
	大学入試センター利用試験	127名	数学と英語が必須、他に1科目選択	一般入試	200名
	A日程・サテライト入試	500名	数学と英語が必須、他に1科目選択	大学入試センター利用試験	40名
	B日程入試	108名	数学と英語が必須、他に1科目選択		
第2部					

1・2級建築士をめざすなら、合格率が違う、日建学院へ

# あなたも日建学院なら、夢に手が届く。

1級建築士輩出で毎年日本一の合格システム!!

建築士“名門校”日建学院  
おかげさまで最終合格者（資格取得者）  
**354,277人を輩出！**

（1次学科試験合格者は除く）\*平成13年度含む出身合格者/構造士・測量試験・2土木・1管工・2管工・1土木・2造園は平成元年～10年以降の実績



学科・設計製図試験とともに

**全国No.1**

“建築関連資格取得の名門”  
を自負する、私ども日建学院の  
「建築士講座」合格率が高いの  
には、当然、“それなりの理由”  
があるのです。

学割

当学院入学時に  
エスティックカード（工学院大学OBカード）を  
ご提示いただけましたら、  
学費の割引を適用させていただきます。

1級建築士

2級建築士

土地家屋調査士

宅 建

1・2級 建築・土木 施工管理技士  
管・造園

給水装置工事  
主任技術者

F ファイナンシャル P ブランナー

マンション管理士  
管理業務主任者

主要都市をネットワークした  
全国130校・650常備教室は業界No.1の規模

お問い合わせは、下記・本部までお願いします。

本部／〒170-0013 東京都豊島区東池袋1-21-16 日建学院ビル7F

0120-243-229

インターネットホームページ

<http://www.ksknet.co.jp/nikken/>

建築資料研究社の  
**日建学院**

# 業界No.1宣言

1級・2級建築士

宅 建

1級建築施工管理技士

1級土木施工管理技士

マンション管理士

管理業務主任者

合格者の2人に1人以上は、  
当学院の受講生です

平成13年度  
1級建築士試験最終合格者占有率  
当学院教室開講都道府県  
平均合格者占有率

50.2%

当学院教室開講都道府県  
平均合格者占有率

私たちには、  
建築関連資格取得をめざす  
みなさまを応援します。



当学院イメージキャラクター  
菊川 恵

平成13年度1級建築士試験  
最終合格率

84.1%

当学院基準達成者対象教室合格率

平成13年度2級建築士試験  
最終合格率

87.5%

当学院基準達成者対象教室合格率

建築関連資格指導のエキスパート

総合資格学院 中部資格学院

(株式会社 総合資格)

(株式会社 中部資格)

札幌校 TEL.011-219-3511 FAX.011-219-3522  
仙台校 TEL.022-217-8421 FAX.022-217-8425  
新宿校 TEL.03-3366-2181 FAX.03-3366-3081  
池袋校 TEL.03-3982-8211 FAX.03-3982-7800  
上野校 TEL.03-3832-7201 FAX.03-3832-7250  
五反田校 TEL.03-3495-8671 FAX.03-3495-8771  
立川校 TEL.042-524-7841 FAX.042-524-7491  
横浜校 TEL.045-316-6811 FAX.045-316-6841  
町田校 TEL.042-724-3061 FAX.042-724-3350  
厚木校 TEL.046-226-5788 FAX.046-226-5789  
藤沢校 TEL.0466-55-2611 FAX.0466-55-2601  
大宮校 TEL.048-642-9811 FAX.048-642-9921  
越谷校 TEL.048-990-6971 FAX.048-990-6981  
所沢校 TEL.042-926-6241 FAX.042-926-6281

千葉校 TEL.043-290-7341 FAX.043-290-6981  
船橋校 TEL.047-425-8941 FAX.047-425-8940  
松戸校 TEL.047-369-3821 FAX.047-369-3841  
土浦校 TEL.0298-35-5181 FAX.0298-35-5157  
前橋校 TEL.027-226-7501 FAX.027-226-7402  
宇都宮校 TEL.028-614-4881 FAX.028-614-4877  
名古屋校 TEL.052-202-1751 FAX.052-202-1755  
小牧校 TEL.0568-42-1211 FAX.0568-42-1221  
岡崎校 TEL.0564-57-8161 FAX.0564-57-8191  
豊橋校 TEL.0532-57-0311 FAX.0532-57-0031  
静岡校 TEL.054-275-3311 FAX.054-275-3301  
浜松校 TEL.053-456-2211 FAX.053-456-2261  
津校 TEL.059-238-0711 FAX.059-238-0801  
岐阜校 TEL.058-277-3701 FAX.058-277-3706

京都校 TEL.075-352-3011 FAX.075-352-3051  
梅田校 TEL.06-6374-1411 FAX.06-6374-4711  
京橋校 TEL.06-6882-8211 FAX.06-6882-8212  
難波校 TEL.06-6648-5511 FAX.06-6648-5548  
堺校 TEL.072-222-9311 FAX.072-222-8011  
奈良校 TEL.0742-30-1511 FAX.0742-30-1615  
神戸校 TEL.078-241-1711 FAX.078-241-6711  
姫路校 TEL.0792-24-1411 FAX.0792-24-1412  
広島校 TEL.082-542-3811 FAX.082-542-3815  
福山校 TEL.084-991-3811 FAX.084-991-3820  
福岡校 TEL.092-716-2081 FAX.092-716-1990  
小倉校 TEL.093-522-7511 FAX.093-522-7531  
久留米校 TEL.0942-36-7141 FAX.0942-36-7120  
インターネットホームページ <http://www.shikaku.co.jp>

New!!

詳細計算法  
(接合部設計)に  
対応しました。

THE POSSIBILITIES ARE INFINITE

FUJITSU

## 木造住宅構造計算システム

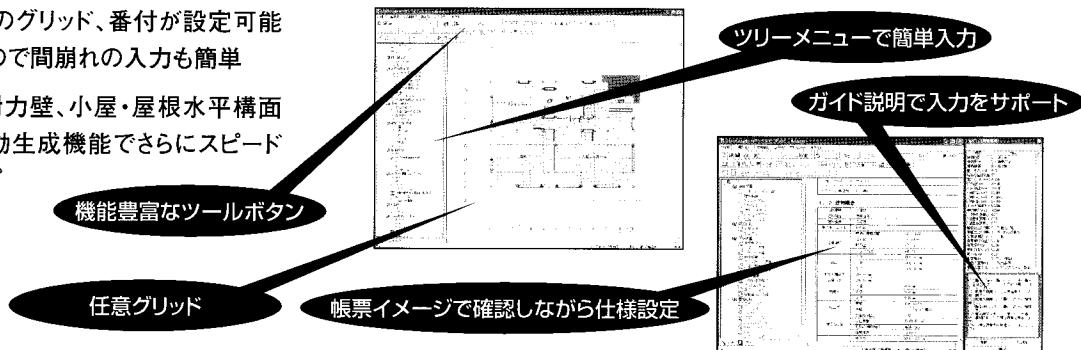
# STRDESIGN® ストラデザイン Version 10

高品質で  
低価格を実現  
製品価格 ¥150,000

- ★建築基準法<sup>※</sup>、同施行令および国土交通省告示に準拠した構造計算を行うソフトウェアです。
- ★建物モデルはマウスで簡単に作成でき、平屋建／2階建／3階建の木造住宅の構造チェックにご利用頂けます。
- ★品確法に定められた構造の安定について指定された等級に対する計算も行えます。
- ★接合部設計(柱頭柱脚、横架材端部)の詳細計算法に対応しました。New!!
- ※平成12年6月施行の新建築基準法及び同施行令に対応しています。

### 設計・モデル入力

- 任意のグリッド、番付が設定可能  
ですので間崩れの入力も簡単
- 柱、耐力壁、小屋・屋根水平構面  
の自動生成機能でさらにスピード  
アップ



### 構造計算・計算書

#### 構造計算

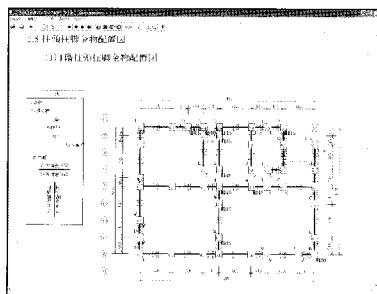
- 梁せいの自動算定、金物の自動配置が可能です。検討時間大幅に短縮します。

#### 構造計算チェックリスト

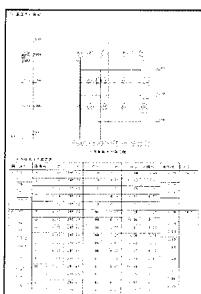
- OK/NG箇所一覧表
- 構造性能一覧表

#### 構造計算書

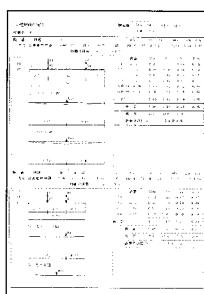
- 建物概要
- 使用材料および許容応力度
- 荷重および外力
- 平面図、伏図、水平構面図、金物配置図 New!!
- 令46条に対する耐力壁の算定
- 地震力、風圧力の算定
- 偏心率の算定
- 鉛直構面の負担水圧力に対する検定 New!!
- 床倍率の算定 New!!
- 水平構面の負担水圧力に対する検定 New!!
- 柱頭・柱脚の接合金物の検討
- 横架材端部接合部の引張耐力の検定 New!!
- 土台およびアンカーボルトの検定
- 軸力算定表(長期、水平力)
- 柱の設計  
(圧縮、めり込み、短期曲げ)
- 梁・母屋の設計  
(長期、短期、仕口せん断力)
- 垂木の設計
- 根太の設計 New!!
- 基礎の設計  
(地耐力、ベース、基礎梁)
- その他  
(転倒の検討、層間変形角の算定)



計算書出力画面(柱頭柱脚金物配置図)



風圧力の算定



梁の設計

毎月講習会を計画して  
おります。  
申し込みはホームページで  
・既に導入のお客様、今後導入を  
検討されるお客様を対象。  
・配布マニュアルに従い、操作中  
心に説明。

FUJITSU FIP CORPORATION

富士通エフ・アイ・ピー株式会社

〒135-8686 東京都江東区青海2-45タイム24ビル TEL.03-5531-5131 FAX.03-5531-5192  
E-mail : fcenasal@fip.fujitsu.com

資料請求、WebShopご注文はこちらから

<http://www.fip.fujitsu.com/fcena/>

*Think for You!*

貴方のために考えます。



都市環境のトータル・アドバイザー  
株式会社 **フォーユー プランニング  
コンサルタント**

三好 薫

井坂 光宏

東京都世田谷区赤堤 4-22-11

TEL 03 (3323) 7311

**KAY 構造設計室**

柴田 和敬

東京都台東区柳橋 2-22-12

TEL 03 (3865) 2327

**株式会社 設備計画研究所**

志賀 常雄

山本 龍英

東京都渋谷区恵比寿南 3-1-21

TEL 03 (3760) 1021

自然環境に恵まれた  
このすばらしい地球  
これこそ、私ども第一設備の  
原点だと、考えています



**DAIICHI SETSUBI**  
*Engineering corporation*

## 第一設備工業株式会社

代表取締役  
社長 鴨志田 征也

本社 〒104-0033 東京都中央区新川一丁目22番3号

電話 03-3552-3331 FAX 03-3551-4087

支店 長野・東関東・横浜・名古屋・大阪・九州・東北

——広告、募集中——

## 【編集後記●】

「同窓生を訪ねて」の欄で、7月初旬の暑い日曜日に、八王子駅前の番匠設計にてお話を伺いました。小町和義さんが一人で待っておられました。工学院大学新宿校舎で山口文象先生の特別講議を、一度拝聴したことがあります。今回、彼の年表を整理していて、昭和初期に新しい時代に向かう、建築家としてのフロンティアの生きざまを感じました。そして、小町さんが10代の時にはじめて接した、山口文象との人間味ある出合いを興味深く聞いていて、何となく歴史の一シーンを見ているような気がしました。

宮崎玲子さんの自宅にも伺いました。インディアンは皮袋に水を入れ焼けた石を放り込んで煮物を作るとか、ヨーロッパの狩猟民俗は男の料理で保存食を食べる。なるほど、ロンドンの朝食は何であんなに簡単なのか、男がキャンプでちょっと食べて、狩りに行くと考えれば納得。一方、日本の食事は土着した農耕民俗の文化が基本ですね。「食事」と一言でくるむ背景にも、民族のヒストリーが流れている。女性の視点から見た、目から鱗が落ちるような話だと思いました。

拡大企画部会の海外視察に8～9月に同行取材。帰国後、9月26日に反省会を新宿キャンパス28階談話室で開催。2次会の席で全員が、また「視察旅行」に参加したいという意見です。今回は10名の参加者だったために、円卓を一つだけ囲んで毎回食事し、一日中行動を供にしました。夜も一つの部屋に集まり、酌み交わして人生論を展開、まるで学生時代の修学旅行のように気兼ねなく、お互い伸び々と行動しました。ガイドさんたちにも恵まれたしね。撮影しあった写真をおみやげに再会を約束しました。

さて、今年残念だったことは、海外のOBとFax.を送付して連絡を取りましたが、返事が戻ってきませんでした。また、記事を依頼してもOKが取れない方もいました。残念です。でも、原稿を引き受けて頂いたたくさんのOBの皆様、お忙しい中をご協力いただきまして、厚くお礼申し上げます。今後とも暖かいご支援をお願い申し上げます。 (大場光博)

## 【編集後記②】

ある先輩から、こう言わされた。「もう、編集後記でボヤくのはよせ！」と……。私は、愚痴を言ってるつもりは、さらさらなかった。『NICHE』を編集していく“完璧なるボランティアの半年間”的なかで、思ったり・感じたことを正直に吐露したつもりであった。それが女々しいボヤきに聞こえたのは、これは私が祖先から永々と受け継いできたDNAのなせる業にもってきて、工学院大学建築学科での4年間、『時間・空間・建築』より『斜陽』や『人間失格』を愛読したせいであり、“止めろと言われても”、もはや60歳を目前にして、いかんともなしがたい。

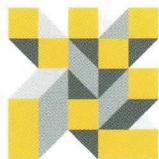
ただ、私が「大変だ、大変だ」とボヤくあまりに、『NICHE』の編集を私一人でやっているようなニュアンスに受け取られていたなら、これはまさに私の不徳のいたずところであります。私は「レイアウト」という、いわば最もカッコ良い部分を独占しているのであり、原稿依頼、催促、整理、返却……という地味な割には忍耐力と包容力の必要とする仕事は、他の編集委員の方たちがやってくれているのである。彼らの愛校心の熱さには私など毫も及ばず、彼らのひたむきな奉仕があるから、私は自由に“私の誌面”をつくれているのである。

さらに、思考力のほとんどがブック・デザインに傾斜しており、文字もデザイン要素の一つと解釈しているから、文章は深く読んでいない。当然、誤字脱字は“薄墨を掃いた夜空に輝く星”ぐらいある。その校正ミスに対するクレームも、他の編集スタッフが一身に受けていてくれるのである。私ほど恵まれた人間はない、とつくづく思う。その幸せな境遇を、なんでグチれましょうか。

もう、何も言いません。1万7,000名余の建築系学科の卒業生がいて、『NICHE』を受け取るだけ受け取って、会費を支払っていない「会員」がまだ9割もいるといううていたらくにも笑顔で迎えましょう。何度も連絡しても“五十番”的出前と一緒にちっとも原稿〆切を守らない「会員」にも跪いて待ちましょう。こんな派手な広報誌など要らないと憎々し気に弾劾する「会員」にも乾杯を捧げましょう。

——『NICHE』は、そんな「会員」の皆様の温かな誠意とご協力で発行できています。

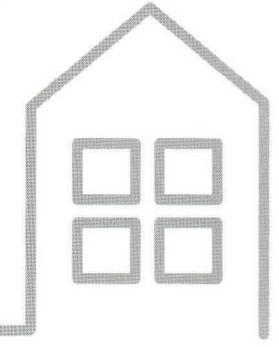
(類洲環)



国土交通大臣指定住宅性能評価機関 国土交通大臣指定確認検査機関 (財)住宅保証機構検査機関 住宅金融公庫検査機関

# 株式会社 住宅性能評価センター

住宅性能評価センターは皆様にご声援いただき  
多くの住宅性能評価書を交付してまいりました。  
現在、建築確認・保証機構検査等を開始し、  
更に幅広くご申請頂けるよう業務を拡大しております。  
今後ともさらなるご支援を承りますよう、お願い申し上げます。



**性能評価**    **建築確認**    **保証機構**    **金融公庫**

**簡単申請** 申請ソフトを利用による手軽な電子申請。

**短時間** 事務所に居ながら電子申請・修正作業が可能。1~2日の迅速な審査。

**合理的** 建築確認 住宅性能評価 保証機構  
住宅金融公庫の総合審査。

**安価** 性能評価料は全国一の安さ。  
確認審査料もセット利用で割引に。

**支援** 性能表示標準資料・オリジナル詳細図・各申請マニュアル等のご提供。

**安心** 経験豊かな検査員・評価員による、的確な検査・審査。親切で丁寧な対応。

20% OFF

**OBの皆様への特典です。**  
申請ソフト[EFFVISIT]木造住宅構造計算ソフト[STRDESIGN][STRPRIME]  
(富士通エフ・アイ・ピー(株) 製) を 約2割引にて提供します。

募集

**パートナーを募集しています。**

- 社員** 建築基準適合判定資格者(建築主事資格者)  
—— 建築確認業務拡充のため 65歳位まで
- 委託検査員** 住宅性能評価・保証機構等の現場検査をお願いできる方  
—— 全国の提携検査員(約120名)拡充のため  
建築士資格者(一級・二級・木造建築士)  
パソコン(Windows)及びインターネットの利用可能な方
- 申請代理** 住宅性能評価等の申請サポート事務所  
(ハウスメーカー・地域工務店等の申請代理業務)  
—— 性能評価・構造計算・各種申請等ソフト 支援・提供

**OB  
OG**

**会社概要**

- 社名** 株式会社 住宅性能評価センター
- 資本金** 1億円
- 住所** 〒160-0022 東京都新宿区新宿2-3-11 東京建物御苑前ビル5階
- 業務内容** 品確法にもとづく住宅性能評価業務  
建築基準法による建築確認審査及び検査に関する業務  
住宅金融公庫等公的金融機関の設計審査及び検査に関する事務代行  
(財)住宅保証機構保証住宅の現場検査等に関する事務代行等
- 社員数** 28名 建設評価員 約120名(拡充予定)
- 営業区域**
  - ・住宅性能評価業務・保証機構検査業務  
沖縄及び離島を除く日本全国
  - ・建築確認・住宅金融公庫業務  
東京都(島しょ部を除く)・神奈川県・埼玉県・千葉県・茨城県・栃木県・群馬県・山梨県・長野県の全域

- 最高技術顧問** 田野邊 幸裕 (建築学科 昭和44年卒)  
(建築系学科同窓会 会長)  
(校友会 監事,学校法人 評議員)
- 代表取締役** 杉山 正博 (建築学科 昭和45年卒)
- 取締役** 大塚 康 (建築学科 昭和44年卒)
- 営業推進室** 宮田 奈津 (建築学修士 在学中)
- 確認審査部** 勝谷 尚武 (建築学科 昭和45年卒)  
建築基準適合判定資格者
- 設計部** 望陀 佐和子 (建築学修士 平成13年卒)  
村山 彰 (建築学科 平成13年卒)
- 建設部** 門脇 賢治 (建築学修士 平成11年卒)  
加藤 朝子 (建築学修士 平成13年卒)  
塙原 俊紀 (建築学科 平成 9年卒)

.....上記のOB・OGまで、皆様からのお問い合わせをお待ちしております.....

TEL 03-5367-8780  
FAX 03-5367-8825

E-mail info@seinouhyouka.co.jp  
URL http://www.seinouhyouka.co.jp

**問い合わせ**

NICHE

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>

[ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/)

[s.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/)

[gakuin.ac.jp/~wwd1025/](http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/)

NICHE

niche(nich), n. (Fr. niche, form Lnidus a nest)

1. a recess or hollow in a wall usually intended for a statue, bust or vase.
2. a place or position particularly suitable for the person or thing in it.

-webster's New Twentieth Century Dictionary-

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>